

特集 ● わが家の経済史 嶋田たい子 杉澤庸代

投稿 ● 連れ子、連れ犬、私は再婚者 門脇元子

ワンポイント情報 ● 私の受けたしつけ

おんなの道楽 ● 雀百まで ジャズ・ダンス 長井淳子

逐次刊行物

第 62 8.13 号

国立婦人教育会館
情報図書室



農文協

東京都港区赤坂7-6-1
電話03(585)1141(代)

●日本のおコメ・たべものを考えるブックキャンペーン('87.8-10月)

われら自然派宣言!

食品添加物

とつきあう法

★不安はあるが拒否できない、どうする?

増尾 清著
元東京都消費者センター試験研究家



子どものお菓子からバック入りのおかずまで、食品添加物だらけの不安な食卓。添加物長小の読み方、毒消し法、毒に負けない健康料理の作り方、添加物の不安な便など、目にしないうけにはかない食品添加物から健康を守る方法を満載。
1100円(税別)

あなたの食卓の危険度

日本農業は活き残れるか

「国民食糧」を提言する

日本の食生活全集

☆いま消えかかると日本の食事を記録 ●内容見本呈
〔既刊〕①北海道②青森③岩手④秋田
⑤茨城⑥新潟⑦福井⑧長野⑨静岡
⑩三重⑪京都⑫岡山⑬高知⑭福岡
⑮長崎 8月刊43熊本 以下続刊
定価各2800円



新曜社

〒101 東京都千代田区神田
神保町2-10 電話03(264)4973
振替 東京2-108464
ご注文はお近くの書店か小社宛前金でお願い致します

家族のミトロジ

桜井哲夫

離婚・シングルが増大、父親の不在、子どもの病理など、現代社会の変動にともなう揺れ動く家族。人類史のなかで、たかだか二百年の歴史をもつにすぎない「家族」を冷静に考察し、家族をめぐる様々なイデオロギーを再検討する意欲作。
朝日新聞、日本経済新聞等、書評多数。
好評重版 ■四六判二八八頁／定価一六〇〇円

魂の殺人

親は子どもに何をしたか
アリス・ミラー
山下公子訳 教育・親の名による暴力が子どもの魂を殺していく。衝撃のロングセラー。 定価二四〇〇円

白バラの聲

ハンズ・ソフイー・シヨル
山下公子訳 ヒトラー打倒の声をあげた「白バラ」の若者たちのひたむきな青春の記録。 定価二四〇〇円

わたしたちの「江戸」

「女子ども」の誕生
本田和子・皆川美恵子・森下みさ子著 「女・子ども」が活躍した江戸を現代に引寄せて考察。 定価一五〇〇円

読む事典・女の世界史

原ひろ子・田中和子・館かおる・須田道子編
●女たちが編集・執筆した初の「女の世界史」事典。
●あらゆる時代・地域を網羅、344項目を97人で執筆。
●ユニークな項目選定で親しみやすく面白い。読む事典。
●項目例：悪女／悪女／おばあさん／女のストライキ／家事の社会化／古代の女王／主婦／女権宣言／女性学 ほか
最新刊発売中! ■四六判二四〇頁／定価一五〇〇円

いいたい放題　したい放題

書きたい放題　よみたい放題の

投稿誌が　わいふです

人間　ほんとにやりたいことは　やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いつきりやれば　気かはれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回　わいふが出来あがるのです

仕上げるに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを！

ピリツとくるか　まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第！

WIFE 207

わいふ目次

表紙イラスト カステラネンコ

忙中閑あり 4

宮淑子さんとカラオケ

写真 佐々木恵子 文 原田静枝

特集・わが家の経済史

ケチ作戦に徹して

10

嶋田たい子

百グラムの肉をおかずに

15

杉澤庸代

対話のページ

18 ★

中村道子・古沢涼子・山口純子・中西清美
匿名・匿名 名・高尾千恵子・高津由美子

職場は多面体

26 ★

藤枝まさ子・吉田笙子・岡村和代・後藤八重子

連れ子、連れ犬、私は再婚者

34

門脇元子

マスコミむしる

42 ★

たまき久美

おんなの道楽

43 ★

長井淳子

マジの発言

46 ★

片山節・樋口晃子・中松ミナ子・山本留々子
小江鐘子・太田知子・紅露操子

アンケート

結婚成功の条件を探る②

58

まとめ 佐藤詔子



オットとつこい

64 ★

島山徹子・法村祐子

エッセイスト・クラブ

66 ★

佐野美智子・入間田礼子・椿芳子

広瀬サカエ・荻田一枝

観たり聴いたり

76 ★

山田幸子・高木百合・松本弘子

ナウい熟年

80 ★

村田起久代



ワンポイント情報

82 ★

〈私の受けたしつけ〉

法村祐子・匿名・田岡あかね・伊賀美智子

山田さとみ・渡辺美智子・児島正子・鈴木由美子

池田敦子・堀場美代子・高宮みか

八路軍とともに
法村香音子

96

生きてます活字人間

109 ★

和田好子・森本邦子・篠木千枝子

遊びましょ

112 ★

堀場美代子

ファミリー・イン・ブルー

114 ★

窪田潤子・坂本由美・十文字美恵

わいわいがやがや

126 ★

NM・家守恭子・高橋らんこ・鷺洲優子・高谷みつほ
桜井淳子・猪股てるみ・北川時子・西山美沙世
藤村佑・岩田和子・富永柳枝・野村純子

サークルだより

108

情報コーナー

122

ほん 特集テーマ原稿募集

141

投稿規定

142

編集だより

144

★印は
投稿ホットライン
のページです！

忙中閑あり④

私のホビー

—宮 淑子さんとカラオケ—

写 真・佐々木恵子
文 原田 静枝



“SNACK・ひまわり”にて（東京・赤坂）

その昔、父にねだった木琴に熱中し
NHKの「声くらべ腕くらべ子供音楽会」
で合格の鐘を鳴らし、
シャンソン歌手を夢みて
声楽のレッスンを受けたこともある。
抜群の音感に恵まれた宮さんの「憩い」は
もちろん「歌うこと」。



水泳とダンスで鍛えたしなやかな長身を
カラオケのリズムに乗せ
越路吹雪、五輪真弓、と大好きな曲を
次から次へと披露する。
その声に自らが酔い、友や居合せた客たちも、
時を忘れて聞きほれる「絶唱」だ。



▲ 街角での取材

▼ 友人との語らい



ふるさと信州・飯田の生家で
曾祖母、祖母、母にかこまれ育った少女は、
「もっと別な生き方をしたい」と
大学で、英文学・社会学を学び
『婦人民主新聞』、『教育の森』の編集者を経て
いま、フリーのライターとして
思春期の子どもたちにメッセージを書く。

TOJU**冬樹社**

東京都文京区本郷4-15-7 〒113

電話 03(818) 2981(代)

振替 東京8-7757

50人の隣の女たちから 離婚しつかり本

グルー・プくるくるY編

B5判変型・一二〇〇円

50人の女たちが出てきたさまざまな離婚、その生の声をテーマ別に再編成。経験した者でなければわからない、いろんなこと、今、実際に悩んでいる人たちに是非伝えたいことを満載。



〈目次より〉

プロフィール

1 原因 えくぼがあばたに帰るとき

2 決断 〇 性格の不一致／暴力／浮気／嫁姑／経済迷ったあとは元気に決意する

3 再出発 子供／未練／同意・世間体／決意／準備実行／調停・弁護士

再出発 自分で自分を励ましなが

関係 裁判・弁護士／経済／福祉／子供／異性

エピソード わたしたちの結婚観・離婚観

情報版 あなたのつよい味方です

法的手続き／弁護士／お金／子供／福祉

春秋社〒101 東京都千代田区外神田2-18-6
電話(03)255-9611 振替東京8-24861

「漂流へ」芹沢俊介 家族論集

●芹沢俊介

家族から今、

エロスが衰弱して行く!!

シリーズ4
1700円

これまでの男と女が作る「家族」という古いストーリーを捨てて、新しい家族への旅にむかいはじめた女性と子供が描くシナリオとは？『家族の現象論』以後、『イエスの方舟論』によって既成の家族論に一線を画した著者の、ここ数年にわたる主要作品を収録する意欲作。本書に、『漂流へ』というタイトルが選ばれているのは、高度になった家族のエロスの水準を前に、家族が解体せずに自己を新しく組み替える可能性を、浮遊から漂流へという主題が転位する方位に求めようとしたからである。(あとがきより)

シリーズ〈家族〉 好評既刊

対幻想

n個の性をめぐって

シリーズ1

●吉本隆明 『共同幻想論』以後はじめて、男と女の領域を正面から考察した話題作。〈聞き手〉 芹沢俊介 1800円

「イエスの方舟」論

シリーズ2

●芹沢俊介 連合赤軍、原理運動などとは対比させながら、その傑出した集団の全思想を解明した問題作。 1800円

父とは誰か、母とは誰か 『イエスの方舟』のシリーズ3

●千石剛賢 なせ、女性たちは「方舟」によって解放されたのか？ 事件後はじめてその真実の姿を明かす。 1800円

特集

わが家の経済史



ケチ作戦に徹して

嶋田たい子

埼玉県越谷市



朝食抜きでドケチに徹し

昭和四十二年四月二十五日、結婚して初めての給料日、私は夫の帰りを待っていた。

自転車のチリンチリンという夫の帰宅を報せる音に私は笑顔一杯でアパートの扉をあけた。

夫は「はい、お待ちかねの給料袋です」と私に渡してくれた。

「ありがとう、ありがとう」と私は何度も給料袋に礼をいい、さっそく机の上に飾った。

私の実家は商家で何度も不況の目に会い、辛い思いをしたことがあった。そのたびに毎月キチンとお金の入ってくるサラリーマンのほうが生活を計画的にやるのにと羨ましく思ったものである。

結婚することを約束したとき、夫は大阪の池田市の郊外に家賃一万二千元の一軒家を借りていた。

夫に頼んで結婚生活は家賃六千円の一

DKのアパートに引っ越しをしてスタートした。

夫は二十八歳で会社員、私は二十一歳で学生であった。

夫から初めて手渡されるサラリーが私の腕の發揮どころとソロバンにノートと十二枚の封筒を机の上に準備しておいた。

まだ年齢が若すぎて、学生であるということで私の両親からは猛反対を受けての結婚生活だったので、親の援助はあてにできず、夫の給料を上手くやりくりしてやってゆかなくてはならなかった。

夫の給料は手取り四万円であった。

さっそく夫からいただいた給料全てを食費、光熱費、教養費、家賃などと項目を十二に分けて一円も残さず封筒に小分けした。

新しい生活を始めて最初の給料袋を手にするまで連日、私は一日の生活費を項目別にいくらと頭にいられたのである。夫は給料袋にだけ礼をいい、その上、給料が細かく封筒別に入れられるのにび

っくりしたようであるが、私が自分の計画どおりにやってみたいと宣言してたので黙っていた。

例えば一日の食費を一人二百八十円と決めたのである。

私自身、次の日から朝食抜きでラッシュにもまれ御影駅に降り大学へ行った。

すきっぱらではあったが、自分で決めたことと割り切って昼まで我慢した。

昼食は大学の生協の食堂で八十円の大盛りカレーとか百二十円の定食をゆっくりと噛みしめて食べた。

講義が終わると友達とのコーヒータイムもせずに真っすぐに阪急電車に乗り、池田駅に降りたものである。

物品を購入するときは二三日考えて、それがなければ生活が成り立たないかをポイントにした。衝動買いをしなかったのである。

あのころ、池田市は主婦の店「ダイエー」ができたところで、連日チラシが入っていた。

一か月に調味料いくらと決めていたので、砂糖一キログラム〇〇円と一円でも安い場合は、大学の帰り駅から自転車でダイエーに足を運んだものである。

「大阪人のケチぶりにはびっくりしてたがお前はそれを上回るドケチだなあ」と夫はダイエーから自転車で走ってくる私をみてよく言った。

一か月たった給料日には一円でも残った費目があるとさっそく私は銀行に出向き、貯金をした。

洋服は全て母の手作りでたくさん持っていたので、新しく購入する必要はなかったし、髪の毛も束ねてリボンをつけたりしてたので美容院へ行く必要もなかった。

学生運動さかんな時代でブランド志向の学生もなく、私のように徹底的なケチぶりを発揮する人間がいても、誰も不思議に思わなかった。

夫も私に準じたケチ作戦をやってくれた。というより小遣いを月三千円と決め

ていたので何も買えなかったのである。
小遣いを残すと私が喜ぶので、酒も煙草も嫌いな夫は、けなげにも私と志を同じくしてくれた。

ボーナスを全額銀行に持っていたときの嬉しさは今でも忘れられない。

半年もたつとチリも積もれば何とかで、かなりまとまったお金が貯金通帳に記載されていた。

幸いにも私の学費は国立大学だったので前期、後期あわせてもわずかであった。秋には大学附属の中学校への就職も決



まり、女教師に憧れていたもので、バリバリ働きたいと張り切っていたが、十一月に妊娠していることがわかった。

教授に告げると初めての子は大事にしろとはげまされ、あと数か月で卒業というときに私のケチ作戦はおジャンになったしまった。

夫は妊娠をことの外喜んでくれて、私の就職はかなわぬ夢物語となった。

妊娠で人間らしい生活に

妊娠と同時に私は粗食に耐えることを

やめ、母性第一と朝食をキッチンととり、大学へ通学した。

食費の計画は崩れ、次に連日お風呂屋さんへ行くため保健費も崩れ、通学用のマタニティドレスも手縫いしたもの、の衣料費も大幅に変更しなければならなかった。

結局、私のケチ作戦は六か月しかもたなかったのである。

「これで良かったな、やっと人間らしい生活ができる、ゆっくuriとした気持ちで良い子を産んでくれ」

私のやりくりは夫にとって相当の苦痛だったようである。

夫は休日になると栄養のあるものを食べなくてはとステーキハウスなどへ連れていってくれた。

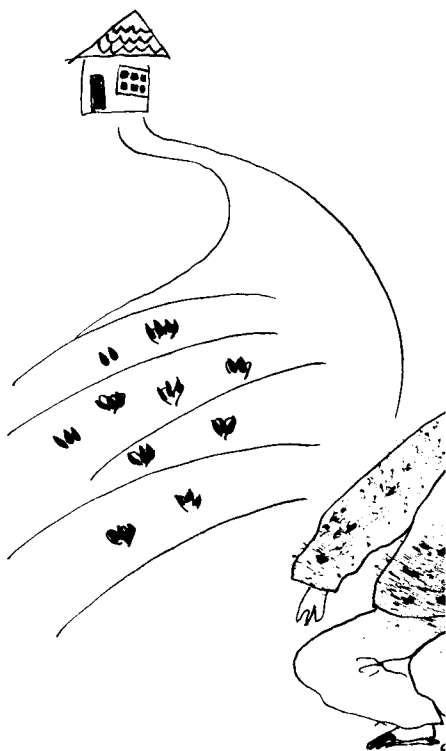
家計簿の収支決算は銀行へ出かける必要もなくなり、プラスマイナスゼロとなった。

それでも大学卒業の年、私達は結婚一年で夫の郷里である熊本に二百五十坪の

畑を購入することができた。価格はたしか四十二万円だったと思う。

夫の両親は畑を買ったということで私を過大評価してくれた。私の両親がまだ結婚を許してくれなかったので、結局、私は夫の郷里で、夫の両親、兄妹達のお世話になり、長男を出産した。

たまたま夫の妹夫婦が家を建てたいが土地がないと探していたので、私はお産のお礼として夫に相談なしに妹夫婦にその二百五十坪の畑をあげてしまった。何とも肝ったまの大きい話である。



夫は私のやり方に対し怒っていたが、また一からやり直しさえすれば土地ぐらい大丈夫という私の一言にしぶしぶ承諾してくれた。

私にしてみればほんのわずか、ケチに徹すれば土地を手にするができるという自信がついたからである。

妹夫婦の新築の家の庭には、わが長男の誕生を記念して、桃、びわ、柿、みかん、ザボン、甘夏、梅など十種類の果物を植えたが、今ではすっかり大きくなっている。

長男が産まれると私のケチ作戦は完全に崩壊して、子供を中心とした生活で貯金はゼロのまま、夫の仕事の関係で上京してきたのが昭和四十四年の九月であった。

春休みは海外旅行

東京でのスタートは杜宅だったので家賃はいらなかった。私は家賃代としてさっそくつもり貯金を始めた。

上京して九か月目に次男の誕生、その二年後、長女の誕生と同時に埼玉県の越谷市に、四十坪の建て売り住宅を購入した。

建て売り住宅の価格は五百五十万円であった。上京して貯えた百五十万円を頭金とした。

購入して一か月後に同じ住宅の価格が六百五十万円と一か月に百万ずつ価格がせり上がる。列島改造論たけなわの昭和四十七年のことである。

何事も夫の協力なしではできなかった

であろうが、全て自分中心でしかものをみられない私にしてみれば、上京して二年九か月で三人の子供の親となりマイホームを手に入れたのだから、蓄財に少々たけていたのかも知れない。

ローンの支払いは月三万円であり、夫一人の給料では大変であった。

学生時代のあのケチ作戦はさすがに發揮できなかったが、私や子供の服は全て手作りにした。

味噌、マヨネーズ、パン、菓子を全て手作りにし、借り農園で野菜を作り、朝早くから夜遅くまで私が最高に専業主婦に徹したときであった。

上京してから十七年たった現在、子供達は大学一年、高二、中三となり教育費の占める割合が大変なときを迎えている。

「お小遣い」

「塾のお金」

「部活費」

「修学旅行の積み立て代」

「床屋代」

連日、かわるがわる私にお金の請求を出す。どの子にいくら払ったか、ボケが始まったのかすっかり忘れてしまったりする。

食べざかりでもあり、スーパーで両手に一杯買いこんできても、翌朝には何一つ食べものが残ってなかったりもたびたびである。

三人いるせい、食事のときは競争して食べてくれるので、私の声は一段と大きくなる。

「全部できあがるまで、待ちなさい」
「全員そろってからゆっくりと食べてね」

私の注意など上の空で彼らは黙々と食べてくれる。「昔、お父さんとお母さんは一日の食費を二百八十円でやりくりしたのよ」などと私が話したところで誰一人耳を貸そうともしないであろうから子供に話したことはない。

六年前より以前にもっていたライセンス

スを生かして私は市の病院で看護婦として働いている。

ブランクがあったので、同年齢の人より十万円ほど給料は安い、わが家にとって貴重な収入である。

夫の給料は銀行振り込みなので、なるべく私の給料でやりくりして夫の給料はローンや光熱費などにあてたいと思っはいるものの、思うようにいかない。

夫の給料をおしいただき机の上に飾った自分なつかしい。

ちなみに現在の家は前の家を頭金にして八年前に駅前に建て替えた。

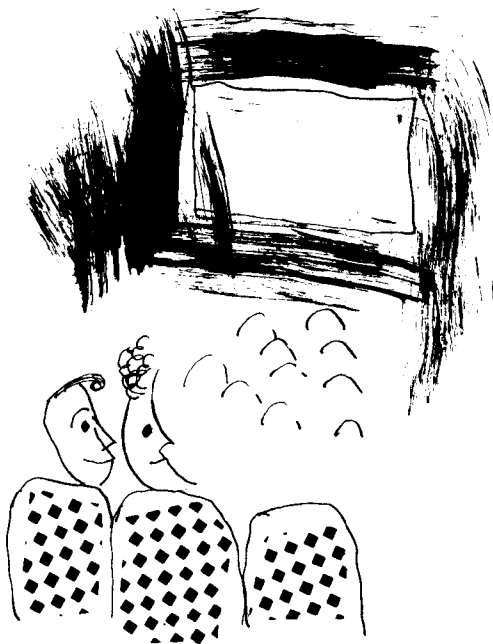
そのローンもあと百万円ほどになっている。ギスギスしてもはじまらないと夫の提案でここ十年ほど、毎年春休みに、家族で海外旅行に出かけている。

共働きを始めたら気も大きくなったのであろうか、私自身、手作りをすっかりやめて、休日ともなると本に埋もれて、老眼鏡をかけ、活字を追っている。

百グラムの肉をおかずに

杉澤 庸代（55歳）

奈良県生駒郡



ない者同士のスタート

昭和三十三年五月、私達は当時「一万円」の結納で、父同士が同じ三重から早大卒、三井に勤務していた上、ともに東京で空襲にあい、焼け出されて田舎へ疎開、ない者同士がということで結婚しました。

主人は大正生まれ、早中から軍に取られ、内地ですけど体をこわし田舎で百姓。二十六年に同志社大に入学して京都まで通学、保険会社に入社して二年目。

私は高校出て銀行のOL五年。当時私のほうが給料多く、主人の給料を見て「私の小遣いは？」と聞いたほどでした。英文タイピストとしての仕事は捨てたくなかったのですが、主人について転勤先の宮崎に行きました。

三年ほど大阪のお茶の先生のところの下宿してましたとき、手取り八千円の半分四千円を二食付き下宿代として入れていたので、貯金は三万ほどあり、着物な

ど用意できました。布団や式の費用は父が出してくれました。それと退職金を三万円ほど持って結婚したのです。このお金は長男の出産時お手伝いをたのむに役立ちました。

主人の給料は手取り九千円、背広の月賦が千円、六畳の間借りの家賃が二千七百円、唯一電気製品ラジオの月賦が九百円、光熱費と銭湯代、保険に少し加入したのでその掛金でパー。あとは私の失業保険が週に二千円ほど。

百グラムほどの肉や鰯、ホーレン草、サツマイモなどのおかずばかりたべていました。

テレビがありませんから三本立ての映画を週が変わる毎に、夕食すんでから二人で百円出して見て、回転焼きを二個ずつ買って食べながら深夜まで見て、そつと家に帰ったものです。

県立延岡病院で二人きりで長男の出産をすませ、百日目に大阪へ転勤、トイレも台所も共同の塚本寮へ。そこで五千円

の水屋を購入、今も大事に使っています。三十五年の暮れに寝屋川の文化住宅に移って、おむつは手で洗い、正月、盆には必ず両親のいる田舎で過ごしました。

子供も増え、毛布が足りないので、田舎でもらってきたお米を、余り良くないけどダブルになった毛布と取り替え叱られました。が、重宝しました。

少し給料が上がりましたが、両親に二千円ずつ送金を始めましたが、給料前になるとどうしてもやりくりがつかず、銭湯に行くお金もなく、母にももらったヒスイのイヤリングを質屋へ、二千円貸してもらい、大助かりしたことがあります。

昭和三十七年、夏、津山の営業所に転勤、所長として地方新聞にものたりしましたが、やはり家計は苦しく、保険を解約しに大阪まで子供と出てきたこともありました。

やっと、コタツとテレビ十四インチの白黒を買って、三十八年、一年ほどで大

阪へ転勤。立花の文化住宅へ（代用社宅です）入りました。

三十九年八月娘が産まれ、世は高度成長時代、東京オリンピックで騒いでおりましたが、我が家は扇風機なし。暑くて暑くてうちわでパタパタ母子であせも一杯つくって大変でした。

ベビー箆笥の代わりに和箆箆買って、下駄箱とか冷蔵庫、電気洗濯機とか揃ってきました。

仕送りも一万円から二万円とふやし、子供が中学小学生となるころは、ステレオや二段ベッド、応接セット、ピアノ、車までそろい、主人もゴルフを始めました。私もミニスカートやセーター全部手作りで、子供も喜んで着てくれました。

子育て終えて、見果てぬ夢を

子供に手がかからなくなると、どうしても家が欲しいし教育費もかかります。主婦も自由になるお金が必要と、保母の通信教育を始めました。

三年間浪速短大のスクーリングに通い、元手は十万ほどかかりましたが、保育所の実習をさせてもらった町で保母が足りなく、公立の保育所に、四十過ぎてから五十まで、七年間働くことができました。手取り十三万、ボーナス三十万ぐらい、年収二百万ぐらいになり、元は十分取り戻し、貯金のつもりで、五十一年に現在の土地六十坪ほどを購入、五十三年に希望の我が家に入居できました。もちろん主人の力ですが、そのときの喜び。

これが自分の家だ、庭がある、二階がある、木が植えられる、犬が飼える、野菜も花も作れる、家賃払わなくてよい、もうここで一生終わってもよい。

もう少しローンが残ってますが、両親も無事見送り、息子もこの五月に結婚し、福島で新居を借りて頑張ってます。

娘も大学を卒業してこの四月から社会人、主人は昨年定年でしたが、しばらく嘱託として元気に頑張ってます。給料はびっくりするくらい減りましたが、年金

が入りますし、ゴルフのできるくらいの小遣いが頂けますし、退職金は息子の結婚費用、娘の結婚と当てにできませんが、私も血圧が高く、歯も痛くなりますし、健康に注意し、家事をこなし、趣味を活かして生活をエンジョイしたいと思っています。お金はありませんが、持って死ぬわけなし、人に迷惑かけないよう仲良く金婚式まで頑張りたいと話しております。



お陰様で今は人並みに電化製品も揃い、衣食足りて一応幸せな日常生活を送っておりますが、世は円高、失業時代と、息子に「いい時代にサラリーマンしたネ」と言われましたが、これから高齢化社会に向かい、若い人達の負担は大変だと思っています。いつまでもこのよい時代が続くことを願ってやみません。

私達も無我夢中で子育てを終え、老齢化へと進んでおりますが、二十一世紀には、六十六歳以上が多くなるとか。我が家のわがまま娘は独身貴族を謳歌し、今こそ青春とばかり、会社も二年間だけ勤めて、二百万貯め、アメリカへ行ってきた仕事探して、まだまだ結婚しないと申しておりますが、のんきというか、勝手というか親の心子知らずで、こちらは早く良い人に娘を差し上げて、中国、台湾、ハワイ、四国八十八か所巡りとか、全国ドライブ旅行をしたいと見果てぬ夢を見ております。

(え・万谷陽子)

投稿ホットライン——あちらを立てればこちらが立たず

対話のページ

“産む性”を

捨てられなかった私

東京都中野区 中村 道子(35歳)



“産む性”を捨てて——の滝沢さん、同じく三人目をこの三月に出産し終えた者として、

切実な思いで読ませて戴きました。でもいいな、お嬢ちゃん。我が家は三人目・男。

「どっちでもいいの」なんて言いながら、胸中秘かに期待していた私は、取りあげて下さった助産婦さんの「アラッ、また、男」の黄色い声にそれこそ一気に身体力が抜けたものでした。私も、滝沢さん同様、こと性に関しては全くの晩生（^{オセ}）というより無知——でも卵管の件は知っていましたぞ）で、三人とも全く無計画な出産でした。その結果、二番目の子は、張り切ってパート勤めを始めた直後に妊娠がわかり、今度の子も、新しい職場に慣れたころの産物。タイミングの悪い子達です。

次男が四歳になりホッと一息。経済的にも精神的にもやっと落ち着きが得られるように

なった矢先。はつきり言って、うろたえしました。元看護婦の友人は、「何と言っても、あなたが産むのだし、いろいろ考えて中絶するのなら、それはそれで仕方ないことよ。後ろめたい思いなんて持つことないわよ」と言ってくれた。しかし、やはり、私は産んだ。もう、これで最後の思いで——。

だが、私は不妊手術にまではふみ切れなかった。「まだ若いし（?）、それはいつでもできるから」との先生の言葉もあるが、やはり、自分自身への淋しさからである。

でも、あの機をのがしてしまっただけ、決断のチャンスを失ったのでは——との後悔の念がぬぐい切れないのも確かです。

つわりがひどく、やっとの思いで出産にこぎつけた友人が言う。「交替でいきたいね」と。それは、とてもいい考えだが——。

性に関するさまざまなリスクはまだまだ女性のほうが大きい——と思う。だからこそ神は、乳房を与えるときのあの幸福感をも与えたのだらうか——と思いつつの子育て最前線である。

貴重なチケットを くず入れへ

栃木県宇都宮市 古沢 涼子

「没になった人たちにも誠実に」ととても興味深く読めました。

そういえばいつのころからか、「ことわり書き」が同封されるようになったのでしたね。「あらご丁寧に、読んでればボツになったのわかるのに」と、封筒と紙切れを何気なくクズ入れに(!!)投げ込んで、「わいふ」を開いておりました。

「わいふ」以外に話せるところがなくて、必要に迫られて投稿していた時期もありました。ある程度以上の量を書くのも訓練という意見に、そういうものかなあと特集投稿を試みたときもありました。全部載った昔も、なかなか載らない最近も、気まぐれに細々と出しているさみだれタイプです。

このごろはつい、多少の選考があることに

甘えていたかもしれません。私は書きたいことを書けばいい、編集の方々に読んでもらえただけでも嬉しいし、多くの方に伝える意味があると判断されれば掲載されるからそれもいい、という気楽な任せかたです。この是非は、もう少し、考えてみます。

撰択の基準は投稿していると大体わかっています。緑さんのご意見への答えとして出された目やすです。ますますはつきり見えました。ボツが毎号たった三十人という数には驚きましたね。残念、残念と聞くうちに半分くらいはダメなのかなと思いついていたようです。まだまだ読むだけにまわる人が多いとすれば惜しいことです。感動を生むのは文章のうまさではないことは、読んだり書いたりしているうちに自然にわかってきます。

どうしようかなとためらう線から一歩踏みこむと体験はにわかに生々しくなり、結果として書くタネも増えます。恥と感動は裏表です。

もし投稿を迷っている方がいらしたら、まずもう一步、積極的になることをお勧めしま

す。その一足がきっかけで、たぶん、他の面でも自分の世界が広がることと思います。

お金を出しても載せたい方もある、腹を立てている人もいいるという点は、私には言われなくては気づかなかったことでした。ははん、あの紙切れは(あいまいな文章だったかどうかわれちゃった)、主にそういう方を意識した挨拶文だったのかと思います。

「お電話で説明」が、時間をかけて説明したことからある点も、わかつてはいませんでした。ボツ以上に明快な表現はないワ、別に聞くほどのことない、と単純に考えていました。本当はあの紙切れは、編集長とサシで話のできる貴重なチケットだったのですね。

今度いただいたら、多忙な方の迷惑をかえりみない勇気を出して、お電話してみようかと思えます。きっと、「言われてはじめて見える部分」がそこにもあるでしょう。

ともかく「わいふ」編集部が、「誰もが書く」ほうへ誘うことに温かくしぶとい情熱を持ち続けていることは、何とナナメに購読八年目になる私めが、保証します。

「六年間の沈黙」を読んで

東京都千代田区 山口 純子

WIFE二〇六号「六年間の沈黙」を読んだ、涙が溢れました。

私の父は、私が十二のとき退職しました。一流建設企業の現場監督という肩書きを捨て、パート経営という家業への転職でした。

経済的には支障はありませんでしたし、父には父の事情があったと思いますが、生活そのものは大変な変わりようでした。大の男が、それも働き盛りの男が、一日中テレビを見てゴロゴロし、同じ家の中で母は、体の弱かった私達姉妹の世話に加え、リユーマチで食事はおろか、排泄さえも自分ではできない祖母の世話、そして父の弟達の面倒までも一手に引き受け、一時とて休むことのできない状態にいました。

しかし、母が父へ直接、不満らしきことを言ったことはない替わり、私が母の愚痴の捌け

口になっていたようです。

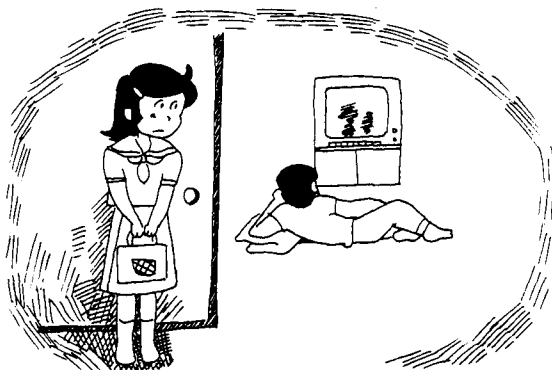
二十歳過ぎ、遅ればせながら自我というものに目覚め始めたとき、それまで心の奥に溜めに溜めこんだ汚水が、一挙にはとどろくかのように、私は父に食って掛かり出しました。ことあるごとに……。

母のために、母の代弁者となって……私が言わなければ、誰が父に母の苦勞を分らせるんだ……責任感のようなものが、当時の私にはあったようです。

そして、娘ながらも、夫婦なのに何故、片方ばかりが我慢するんだろう、という疑問が、やがて、父への憎悪、軽蔑へと変化していきました。

今思えば、母の愚痴は私が感じていたような切迫したものではなく、単なるこぼし話だったかもしれません。そして、妻としてではなく、嫁として生きなければならなかった時代の制約も、母の上に大きくのし掛かっていました。

でも、娘というものは、母想いなものです。困っている、苦しんでいる母を見ることは、



娘にとって、それがほんの些細なことであっても、苦しみの種になるものです。力ない故に……。ましてや、その原因が父親だとしたら……。

六年、本当に長い年月だと思えます。でも、私は、結婚し、子供が三人もいる三十一歳に

なるこの年まで、その気持ちを引きずってききました。理沙ちゃんには、決してこうなってほしくないと思います。

あのとき、母が父へ直接、不満や希望を伝えることができていたのなら、今までの十数年、もっと違った形で父と接することができたのでは、と今、苦い思いが私の心を覆っています。

そして、後悔を誰よりも強く感じているのは、夫婦二人きりの生活となった母、その人自身だと思います。

あなたにとって、「深酒とたばこを嫌う」気持ちには、「夫のやさしさや誠実さを尊重している」気持ちに較べたら、取るに足らない部分のようです。が、あなたの大変さを知っているが故に、理沙ちゃんの心の中では、あなたが、今のあなたでいる限り、父を許せない部分が残っていくと思います。

「氷の解け出したような理沙」ちゃんの心に、暖かい春の日差しを当ててあげられるのは、自分に対してごまかしのない、正面向いた、夫へのあなたの言葉：それだと、私は思います。

すばらしいお嬢さん！

滋賀県守山市 中西 清美

「わいふ」二〇六号を読んで驚きました。私は「わいふ」は普通の女たちの投稿誌だと思ってきましたがそうではなかったのかと思わされる内容を見つけたからです。

それは「六年間の沈黙」（三十二ページ）です。

どんな社会にも暴力はあります。しかし暴力を否定するモラルが確立している社会とそうでない社会があります。日本は残念ながら後者だと「六年間の沈黙」を読んで思いました。女の子にとって小学六年生というのは最も多感なときです。そんな少女を、大の男である父親が、しかも自らの醜態を注意されたのに逆上して殴るとは、最低の行為です。

私は最近、あるグループで一人の女性の両親についての話を聞きました。とにかく理由なしに両親からたえず暴力を受けたのだそうです。

す。父親に薪で殴られたこともあるとのこと。す。もう父親なんて怖くて怖くてそばに行くなんてとてもできなかったと、四十年前も前のことを昨日のことのように話すその五十代の女性の眼から、涙がとめどもなく流れていました。

彼女はあるセラピーを受け、ようやくこうして人前で自分のつらかった過去を話せるようになった、とのこと。それまでは思い出すのもつらく、言葉より先に涙があふれ、話すことができなかったといえます。私は彼女の心の傷の深さを思い、返す言葉がありませんでした。

暴力は受けなくとも、潔癖な娘なら父親の酒やタバコにのめりこむ姿を嫌うものです。まして醜態を演じればなおさらのことです。そういう父親の介抱をすべて弟にさせ（母親はもちろんない）、終生父親を許さなかった七十代の女性も私は知っています。

まして人間が月に着陸するような時代に生を受けた理沙さんが、醜態を連日のようにさらす父親を合理的な考えで批判するのは当然



のことです。その批判に暴力で応じた父親の人間としてのレベルの低さを、妻も認めるべきだったと思います。強者から弱者への理不尽な暴力はいけないというモラルを徹底させ、夫には酔いがさめたとき娘にあやまらせ、母として、同じ女として、そういう男の横暴に悩む立場を娘と共感できれば、そうした上で父親のいいところを認め合うことができれば、六年間もの沈黙はなかったのでは、と思うのです。

親が子供を育てるのは無償の行為です。親の理不尽をごまかすために、恩に着せたり、まして年間六十万の学費うんぬんに至っては話になりません。親が納得して私立に行かせた以上、そんなことを今さら持ち出すのは卑怯です。

私は娘はいませんが、理沙さんの気持ちはよくわかり（たぶん）、逆に母親の気持ちはよくわかりません。共働きののに、なんでそれだけ夫にしたい放題させるのか。夫の尻ぬぐいをするために働いているようなものではありませんか。連日それだけ酔っ払って帰ってきて、外泊も多く、日曜もひたすら寝てる。そういう生活で、家事の分担はできているのですか、自分だって疲れているのに、深夜しつこく鳴り続けるベルでたたき起こされ、「オイ、飯ッ」と命令され、グチャグチャ長い文句につき合わされる生活に、怒りを感じないのですか。

共働きで母親が留守がちだということにさえ、子供に対してひけ目を感じる親たちが多い中で（それも正しいとは思いませんが）、や

りたい放題の父親、たぶん仕事と夫の世話で精一杯の母親にはったらかされ（そうじゃなかったでしょうか？）、よく理沙さんはぐれもせず育ったと思います。よほどしっかりしたお嬢さんなのでしょう。親としてのご幸運に祝福の言葉をお送りしたいです。

シンデレラのその後を知っていますか

神奈川県 匿名

このところ投稿の中に医者との結婚すなわち玉の輿というようなものがあり、実は開業医の妻である私は胸がチクリと痛みました。シンデレラ物語を知らない人はいないでしょう。でも王子様と結婚したシンデレラ姫のその後の物語をご存知ですか。

なあんと王子様はその後もしばしば舞踏会を催して美しい姫を追い求めたということで

す。
この話を、夫から寝物語に聞かされた私は笑って笑って涙がこぼれたほどでした。

夫は私に、男というものの正体を親切に教えてくれたのです。そしてここ数年にわたる一日おきの午前様や週末の外泊、ある女性との浮気旅行などを正当化しようとしたのです。私が夫の行動に不信の念をつのらせるようになってから、知人の奥様の中の、あんまり幸福でない一面をも知ようになりました。

M夫人は、毛皮のコート、ダイヤの指輪、シルクのロングドレス等々、ため息が出るほどなもの持ちで、いつも髪はきちんとしており優雅な方です。でもその反面、自宅にも伊豆にある別荘にも、その会社社長の主人の部屋があり、妻といえども立ち入り禁止なのだそうです。以前から、お二人は別々の部屋に寝ているということです。

Yさんは、ここ数年夫婦の性生活はないと、ご主人が自慢気に話しているのです。

Kさんは、夏休みや連休にはよく海外旅行なさいますが、奥様も一緒だったことは一度ありません。

ご主人達はそろって外車を乗りまわしていますが、奥様は年に何回乗せてもらっている

でしょうか。

このように、玉の輿に乗ったと思われる奥様の現実には、甘いものではありません。

力がある（と世間に見られている）男達を、まわりは放っておきません。誘惑は多く、したがって交際は広く、遊びにこと欠きません。特に医者は、会社や上司や得意先などに縛られるということは少なく、自由が多く、仕事のためという名目がありません。

その行動は、すべて本人の意志ですから、妻は自分をなぐさめる術がありません。

私の場合、去年の暮れに、夫からダイヤの指輪を買ってもらって、どんなに嬉しかったとか。

その同じ男が年が明けるや、なにくわめ顔で、女性をつれて北海道へ三泊旅行したので、女性をつれて北海道へ三泊旅行したのです。

偶然にも、雪まつりのスナップの中にその女性と並んで写っている夫を見つけ、私は棒立ちになりました。友達とスキーに出かけたとはかり思っていましたから。その写真の女性、うすうす私もなにかあると感じていた

人だったのです。夫がよく行くバーのママなのです。私はその写真を夫につきつけ、飛びかかってなぐってやりました。

でも子供達にも親にも、そのことは一言も喋りませんでした。こんな父親でも子供達を可愛いがっており、長男は来春の大学医学部受験のため、必死に勉強しているときですし、反抗期真っ盛りの娘は何を言うかわかりません。

「お前がいるから安心して遊べる」「お前は



お前、遊びは遊び」と、夫は弁明しています。

少しは反省したようで、最近はお泊の数もへりました。私も嫉妬に狂った般若のような女にはなりたくありません。

華やかな男と結婚できたとしても、自分も華やかな生活ができると思ったら、違いますよ。

女性も実力を身につける時代です。玉の輿という字は、いつかなくなって欲しいと思います。

「妻に信教の自由はあるか」と投稿なさった方へ

神奈川県 匿名

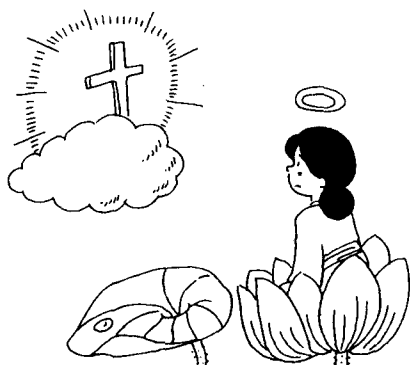
信教の自由、ありますとも、日本国憲法の第三章、国民の権利および義務の項で十九条に「思想及び良心の自由はこれを犯してはならない」二十条に「信教の自由は何人に対してもこれを保証しいかなる宗教団体も国から特権をうけ又は政治上の権力を行使してはならない」とうたっています。けれども現実

は……。

私が六年前のクリスマス、洗礼をうけたいと夫に告げたとき、反対はしませんでした。がちょっとびっくりにしたみたいでした。私と一緒に受洗した一人の婦人はこのことで二十年も悩みつづけ、ご主人を説得するのに、この「信教の自由」を持ち出したのでした。その方は信者になってから二年後、がんで天に召されました。

私はクリスマスチャンになって今までの人生で一番の宝物に出逢えたと思っています。私が聖書を日課として通読し出したのは、信者になってからですが、今では読まないといわれなくなるほどで、生きる糧となっています。

私の主人の母も大正時代からのクリスマスチャンでしたが、その葬儀は日本の風土にしみついた仏教によってなされてしまいました。死んだら、信教の自由ははく奪されるのかと真剣に考えました。私は、「教会でやって下さい！」と大声で叫びたかったのだけれど、主人が「何も言うな！」と命令したのです。葬式も分骨も教会でとの生前の意志を知って



た私は、涙のうちにお経を聞いていました。ショックでした。後日の納骨のとき、故人の言葉を重んじ、教会の牧師先生の協力で、改めてキリスト教の告別式をしたのでした。

お悩みのあなたが誰はばかることなく聖書がよめますように心からお祈り申し上げます。この投稿も名前を出す勇氣を持ちあわせていないことが大変悲しいんです。

三拍子そろった洗剤 あります //

市川市 狩野さんへ



東京都練馬区 高尾千恵子

私たちの使っている石けんを紹介します。
「わいふ」にも広告を出している生活クラブ
生協の粉石けんですが、もちろん無公害、手
荒れなし、衣類の洗たくを始め食器を含め何
にでも使えます。(トイレ掃除、フロ場洗い
もOK) 換気扇はウソのようにきれいになり
ます。

台所には蓋に数個穴をあけた空ビン(ジャ
ムなどの)に入れ、振りかけるようにするか、
ぬるま湯で溶かし濃い目の石けん液を作って
おくかすると便利です。

一度使ってみて下さい。(二・四キログラ
ム箱入六二〇円)

東京都墨田区 高津由美子

台所の食器洗い洗剤で、無公害かつ、油落
ちもよく、手も荒れない、という三拍子そろ
ったものは? という市川市の狩野さんに答
えて、「あります」とお答えします。

それは、天ぷらやホットケーキに使う、あ
の「小麦粉」です。

小さなボールに水を半分ほど入れて、その
中に茶さじ山盛一〜二杯の小麦粉を入れて混
ぜる。これが夢の小麦粉水です。

数年前にどこかで(読み物)発見して、す
ぐ実用に及んだところ、公害の心配がないと
か手がすべすべというのはもちろんのこと、
既存の合成洗剤や「やしの実洗剤」に比べて、
しつこい油污れもサッパリとよく落ち、かつ
後で洗う食器に、先に洗い落とした油分がっ

かないというのは感激でした。あえて難点を
挙げるなら、水洗いをよくしないと、乾いた
とき粉が残るということぐらいです。

その当座、親切心で友人知人に紹介したの
ですが、何故か反応はサッパリで、それ以後
一人寂しく、けれど満足して、食器洗いを楽
しんでいたのです。

今でも、どうして広まらないのか不思議で、
けれど、もうお節介は懲りて、今回は最後の
つもりで書きました。

どうか、必ず使ってみて下さい。そして感
想を書いて下さい。

(この小麦粉水には、ふきん状の網目のナイ
ロンたわしが最適です)

ところで、狩野さん。お姑さんとごいっし
よに台所をなさるとのこと。そこが心配です。
というの、私にも母がいて、その母が大変
な「もったいながり屋」なものですから、小
麦粉を食用以外に使うなどとはいえなくて、
未だに「小麦粉水」の使用は内緒ごとなのだ
す。

ご健闘(?)を祈ります。

(え・小宅昌枝)

投稿ホットライン——能ある應は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

区役所見聞記

東京都 藤枝まさ子

区役所の窓口に住人があるので、ある日町に出たついでに覗いてみると、茶色い上ツ張りを着た彼女は隅のほうにすわっていた。

「あら、めずらしい。どうしたの」

「税務署に来た帰りよ。職安にでも寄ってみようかと思うんだ」

職安と税務署と区の出張所が三題話の

ようにくっついていてこの町。

「区役所のアルバイトでよかったら聞いてみてあげるわよ。でも安いからあなたにはどうかな」

あんまり当てにしていなかったけれど後日彼女から連絡があった。他人の親切は受けるにこしたことはない、四月のある日から私は俄然早起きをして区役所

まで自転車飛ばす毎日となった。

アルバイトの配属先は国民健康保険課。初日の仕事は山と積まれた保険料納付通知書の袋詰めだ。時給で働くのは初めてなので、五分十分と経過するたびに、これで五十円働いた、百円働いた。午前中働いても二千円ちょっとで、ああ薄給みじめ。でも見渡せば大の男の職員が総出で机に封筒をうず高く積み、せっせと封入に励んでいるのだから文句は言えない。左手に封筒を持ち、右手で通知書を入れて封をする単純作業を朝から晩まで三日間続ける。内職と同じ。

区役所という所は雑然としており、管理職は広い部屋にたった一人しかいないし、労働組合が強いせいか職員は本当にリラックスして働いている。服装も制服のブレザーを着ていたり、背広を着たり、ポロシャツあり、トレーナーあり、ジーンズありとまちまちで、ざわざわ話したり笑ったりしながら仕事をしている。それにひきかえ課長さんは百人近い部下を

抱えながら、あたりを睥睨することもなく、いつもうつ向き加減で一人静かに仕事をしている。課長といっても民間と違い、なかなかなるポストではないが、彼は孤独である。客も少ない。

ここは窓口業務をしている所なので、入れかわり立ちかわり区民がやってくる。電話の問い合わせも多い。就職したので国保をやめる人、退職したので国保に入る人、保険料に納得がいかないので問い合わせる人など。

ある日和服を着た老婦人が窓口に来た。最初はもの静かに話していたが、だんだん声が高くなる。

「払いたくても仕事をやめて収入がなくなったんだから今まで通りに払うのは無理ですよ。ええ、として仕事が無くなったんです」

髪を団子に結った老婦人は目的を達するまではとことん粘る決意らしい。小さな声で應對していた職員が係長に代わってもらう。「月々わずかな年金で保険料



まで払ったらどうやって食べていけばいいんです? 払いたいのには山々ですよ、でも払うお金がないんです」

老婦人は相手が代わってもたじろぐことなく頑張った。彼女はそううち奥の応接セットに案内されて、課長も交えてしばらく話をしていたが、とうとう保険料を負けてもらえたらしい。さっきまでのまなじりを決した様子とは打ってかわり、満面に笑みをたたえ、相手を崩してにこやかに、「有難うございます、有難うございます」と、それこそ職員全員に手当たり次第に頭を下げて、嬉しそうに帰っていったのだ。

「貧乏人も金持ちも同額の保険料を払うのは不公平じゃないか!」と大声を出すおじいさんが来た。女子職員が「保険料は収入に応じて決めるので、決して全員が同じではありません」と根気強く説明しているがなかなかわかってもらえない。「しかし、わしの保険料は多すぎるよ!」
「でも所得税なしの方に払っていただく

最低額を払ってもらっているのですから、多いわけはありません。多いと思われるのは、お宅が四大家族で人数割りの保険料が一人につき千円かかるからです」

おじいさんはなかなか納得しないでおもくいついている。おじいさんがあんまりお金がないと言うものだから、おじいさんが身につけているベレー帽も蝶ネクタイも、緑のブレザーもなんだかくたびれて見えてくる。女子職員が資料を出して説明すること三十分、納得したのかしないのか、おじいさんはようやく帰っていった。応対した職員の額に汗がにじむ。

ある日、色の黒い小太りのおばさんが来てカウンターで、ぶつぶつ文句を言っている。

「具合が悪くて立っているのもやっとなんですよッ」

切り口上である。一体何事かと、私はアルバイトの手を休めずそちらの話に聞き耳をたてている。だいたいの話を聞いて

てみると、そのおばさんは保険料を滞納した結果、新しい保険証が届かなくなり、病院で診察を受けるのに困ってしまい、わざわざ区役所まで出向いて来たというところらしい。

「保険料がたまっているのが五十万円です。これだけたまっているのを払っていただかなければ保険証は出せないです」そう言われたおばさんは、五十万円も一遍に払えないともぞもぞ消え入りそうな声で答えている。そして、しきりに体の具合が悪くて辛いと訴えている。

「保険料を払わない人にも払う人にも同じように保険証を渡したら、毎月きちんと払っている人に悪いでしょう。どうしても払えないのなら、せめて分割で納めるくらいの誠意は見せて下さいな」

応対の係長におばさんはしばらく言い訳をぶつぶつ言っていたが、やがてたどたどしい声で言った。

「少なくとも申し訳ありませんが毎月五千円ずつお払います」

新しい保険証を手にしたおばさんはきちないお辞儀をしたあと、溜息をひとつついて帰っていった。

保険料を滞納している人はこのおばさんに限ったことではない。督促状がダンボールに何箱も作ってある。男の職員が毎日鞆を提げて外出するので、どこへ行くのかといぶかって見ていたら、滞納している人の家を訪問して料金をとりたててくる係なのだそう。二十二歳のM君もその係を三年経験したそう。あんまり若すぎるので督促に行った家の人に身分証明書を見せても信じてもらえず、「あんた本当に区役所の人？」といぶかしがられたのも再三だったという。とりたて係といってもきついノルマがあるわけではなく、一日に二軒か三軒集めてくれば普通だそう。

あるとき、うつ向いて仕事をしていてふと顔をあげたら、つるつるピカピカの坊主頭が二つ視界にとびこんできた。三十前後の背の高い男と低い男と二人並ん

で窓口に來たその姿は三ツ揃いでバリツときめて、申し合わせたようにサングラスで凄みをきかせ、刑事コジャックも顔まけのかてか丸坊主である。その二人がいかにも格好つけて肩を怒らせて歩くものだから、こちらは笑いをかみ殺して平静を装うのに精いっぱい。彼らが窓口にいる間中、見たいのをがまんして眼を合わせないようにするのが大変だったこと。用事をすませた彼らが帰ったあと職員が係長に耳打ちをしている。

「服役中の友達の奥さんが保険料を払えないで困っているらしいんだ。それでなんとかならないかって来たんだけど、服役中の人間の場合は保険料免除の規定が確かあったよね」

「多分あるよ。まさか刑務所で保険証は使わないだろうしね。しかし彼らも、見かけよりは生活が苦しいんだね」

区役所見聞記のおそまつでした。

割りの合わない仕事

私の月収、今月は一万七千三百六十円也。某出版社の添削を始めて三年になる。ここは通信添削では老舗で、難関校をめざす優秀な生徒が集まってくる。

こういつちゃ何だが、現職の先生だってずいぶん苦労するんじゃないかというような採用試験をパスし、さらに、試用期間に通削者としての適性を調べられて、やっと採用された。

しかし収入は答案一枚につき、現在二百八十円。私は月に二回、計約六十枚程

群馬県桐生市 吉田 笙子

度を添削している。一時は月四回で百五十枚ぐらいたやっていたが、当時ときたら、ひどい肩こりに悩まされ、背中には〇〇エレキバンが何十個もベタベタ。おまけに締め切り前は子供が寝てから深夜まで机に向かうため足が冷たくて眠れなくなる有様。あー、この仕事が終わったら温泉にでも行って、マッサージってのを一回やってみてもらいたいなあ。……と思えど、そんなことしたら、もう幾らも残らない収入。内職で一万円稼ぐとい



うのがどんなにシンドイかを、身にしみ
て考えさせられる毎日だった。

結局、仕事量を減らしたのだが、その
結果は冒頭の収入。この仕事を始めた
ときは下の子が生まれてまだ間もなく、
育児の合間にでき、最新の受験情報も得ら
れると考えたのだが、どうも内職という
のは孤独で割に合わない労働のようであ
る。一枚やって、これでコーヒー一杯。

二枚やってこれで五目ソバ。なんて自嘲
的に言いながらも、私は、この仕事で少
しは社会とかかわってるんだとか、次へ
のステップのためにも頭をサビつかせな
いでいられるだろうという妙な安心感が
得たために、文句も言わず真面目に仕
事をしている。

いろんな事情から、割に合わない内職
を続けている人の胸の中、そして、その
心理を利用して、安く内職者を使ってる
人の話もぜひ聞きたく、労働者とも言え
ない身ながら声を出してみました。

砂の中のダイヤモンド

人生で面白いと感じるし、また有り難
いと思うのは、そのときでさまださ
まな個性をもった人々と出会い、少な
からぬ影響を私自身が受けるときだ。

今、私は経済的に迫られてやむな
く働いている。最初は一週間も続くかと
危ぶまれたほど、精神的負担の多い職場
だ。人とかかわることの嫌いな私にはま
ったく向かない所なのだが、今日までな
んとか続いている。

十年間もの専業主婦生活の後では社会
的能力はゼロに等しく、就職したその日
から、先輩のTさんに手とり足とり教え
てもらい、それでも、未だに一人前の仕
事はできないのである。

パートの身分で、朝の九時から夕方六
時だか七時まで社員同様に仕事をこなし、

長野県長野市 岡村 和代（36歳）

待遇についても仕事の内容についても、
一言の愚痴をこぼさぬTさんを見ている
と、私が十六年前、社会人として初めて
就職した職場での先輩Mさんを思い出さ
ずにはいけない。

私はMさんが退職するための後任とし
て配属されたのだが、彼女が辞めるまで
の三か月間、「私が知っていることは全
部教えてあげる」と言って、つきつきり
で面倒を見て下さった。彼女は真面目で
頑張り屋で働き者であった。何でもでき
るし、何でも任せられる人であった。

その彼女が何故退職したかと言えば、
原因は夢である。退社の直前まで、彼女
は、毎朝、同じ夢を見続けた。「学生時
代の試験中の夢なの。終業のベルがもう
すぐ鳴るという時間になっているのに、



答案は白紙なの。どうしよう、どうしようと思っっているうちにベルが鳴って、はっとしたら目が覚めるのよ」

以前は女子が二、三人いたセクシオンであったが、退職して補充されぬまま、彼女一人で二、三人分の仕事をこなしていたため、精神的には追いつめられたようである。

郷里の福島に帰った彼女は、実弟のお嫁さんが年子の幼児二人を残したまま自

殺したために、その子達の母親代わりとなつて、現在に至り、間もなく四十歳になろうとしている。

私自身、精神的にも身体的にも疲労を感じることの多い毎日で、ときどき「つまらない人生だったなァ」と慨嘆してしまふのだが、MさんやTさんの存在や思ひ出は、砂漠の中に埋もれる小粒のダイヤモンドのように、私の心を温かく華やかにしてくれる。

機械オンチが「ベテラン」に

東京都練馬区 後藤八重子

色褪せた格子編のスモックとズック靴といういでたちで、現場へ一歩足を踏み入れた瞬間、私はシマッタノと思った。

一緒に案内された山本青年の横顔を窺うと、やはり冴えない表情で控えている。フロアの中央には二十台ほどのプリンターが二列に配置され、その前に一人ず

現代は「やり手」と称される人への評価が高い時代かもしれない。他人を傷つけても、押しのけてでも、目的を達する強引な人のほうが仕事上の評価は高い。

それでも目立たぬ場所で、コツコツと地道に自らの業績を積み上げて、自分なりの人生を歩んでいる二人の先達に私は敬意を表したい。

野の中にあっても、価値あるものは光るのだと――。

つ座った社員が一心不乱に手足を動かしている。

台と背中合わせに並んだ木机は、色の指示を送る検定員の席だ。机には現像されたばかりのテストプリントがロールのまま載っていた。

「はあ、お二人とも大卒ですか。ここは

ご覧のとおり事務職なんかと違って重労働なんですよ。まあ慣れれば簡単、すぐ一人前になりますよ」

二通の履歴書に目を通した四十前後の係長はニコリともせずそう言うと、先に立ってフロアを一巡し、作業の工程を説明してくれた。

仕事というのは、市井の写真館やフリーカメラマンから依頼されたネタを、指定の大きさにプリントするもので、ここで問題となるのがトリミング技術とやうだが、素人の「俄職人」にはそれがなかなか大変だとのこと。単に頭で理解するだけでは駄目で、写真の知識から運動神経の能力まで要求されるという、高度の作業なのであった。

私が最初にシマッタノと感じたのは、実に的確かつ正直な第六感というべきであったのだ。私はこの方面にはトンと疎く、機械オンチでもある。といって、今さら逃げ出すわけにはいかない。何しろ共働きを済る夫を説得し、無理矢理五歳



の息子を保育園に頼み込んだ手前、職場をおいそれと替るわけにはいかないのだから。

係長の講義を一通り拝聴した後、私と山本青年は別々の台に配属され、実地の研修に入った。まずは見学。私の指導に当たった女子社員は小柄な美人で話し好き。私の経歴や家族構成を根掘り葉掘り

聞き出し、さらに世間話に花が咲いた。

女同士の気易さで私は幾らかリラックスした。すると女子社員は突然口調を変え、意地悪そうな瞳をチラッと向けて言った。

「ここ、アル・バイトさんいつかないのよ。大抵の人が三日で辞めるわね。一週間もてば上々、なかには初日のお昼で帰って

しまう人もいるぐらいだから」

「ほんとですか?」

私は思わず聞き返した。

「本当よ。毎年この時期になるとアル・バ・イトさん募集するんだけど、私の見るところ二分の一が三日で落伍ね。あとの三分の一が契約期間の二か月でチョン。残りの三分の一がどうにか再契約に漕ぎつける人かしら」

(へえ。二か月ごとに契約更改か)

私は新たに知った事実に愕然とした。

面接の場ではそんな話など聞いていなかったからだ。言葉も空ろになる私に比べ、女子社員の方は急に生き生きとした表情になり、満足気な微笑を浮かべている。ひどく嬉しそうな顔に私のほうはあ然の体。

「要は本番のときのトリミングとゴミの有無さえ注意すればいいのよ。慣れれば自然に手足は動くし、テストなんか勘で焼けるわよ」

得意満面に講釈する彼女の勤務年数を

聞いて合点がいった。十二年のキャリアなのだ。

彼女の他に五名の女子社員がいるが、いずれも八年以上の経験者で、この道二十年という「剛の者」もいるという。おまけに六名とも全員、独身という足並みの良さには恐れ入ったが。

作業というより華麗なる妙技とも尊称したい仕事ぶりを見物しているうちに、私の脳裏には大枚をはたいたに違いない新聞の求人広告の文句が、電気の切れなかったネオンサインのように点滅を繰り返した。

「アルバイト求む。誰にでもできる簡単な仕事です。主婦学生大歓迎」

一か月後、私と山本青年は最古参のアル・バ・イトさんになっていた。教員の採用試験に何度か滑った山本青年はしばらく腰を落着ける構えらしい。私のほうは「意地」で頑張っているだけだった。

私達のあとにも新人が何人か入ってきて

たが次々と姿を消し、ハイミスのショッキングな耳打ちは今や日常の風景と化していた。戦友の苦楽を分かち合う私と山本青年は、もう何年もこの仕事に従事しているような錯覚さえ覚えた。まあ格好だけはどうかサマになってはいいた。

ある日、どこかの団体が私達の仕事の見学にやってきた。このとき、説明役の係長が私の背中で声高に話しているのを聞き、私は内心唸った。

「今焼いているのは七五三のプリントです。この人はベテランです。素人さんではとてもこうはいきません。何せ技術のいる仕事ですから」

係長のおほめの言葉にもかかわらず、私の焼いているネガの指示用紙には、次のようなことが書かれてあった。

「YとM(色を表わす頭文字)の数字を正確に合わせて下さい。それからゴミの始末が難過ぎる。注意せよ」

ああ、契約更新までにはまだ一か月もあるのだ――。

(え・片岡悦子)



連れ子、連れ犬

私は再婚者

奈良県天理市

門脇元子（44歳）

離婚して 気儘な暮らし

専業主婦をはじめて三年目。いまだに主婦らしさは身につかない。第一、家事を手順よくするのが、何とも苦手なのである。そのため私の場合は「一日一善」ならぬ「一日二、三善」の失敗をしでか

すことになる。だから夫が、こんな女を女房にして「シマッタ」とホゾを噛んでいるのではないかと思ったりする。

私は二十数年間、ずっと外で働いてきた。その間に結婚、子育て、離婚、そして母子家庭をやって、二度目の結婚をしたのだ。大阪のK市に住んでいたが、相手の居住地は少々遠隔地で、同居すれば

娘が地元高校への通学が困難になることと、私の仕事の整理をする必要から、初めの二年間は別居結婚をした。娘を「連れ子」し、長年飼ってきたメス犬も「連れ犬」と、にぎやかなおまけつきの再婚である。

夫のもとには、息子二人のほか、オス犬が一匹。息子は当時二十歳と十八歳だ

ったが、正確には、夫の兄の遺児で養子なのである。

当時の私は、娘と二人暮らし、当然厳しい一面も背負ってはいたが、家の中では誰はばかるものなしの、気儘な生活に浸り切っていた。

彼は私が以前十六年勤めた職場の先輩で、偶然の再会が、結婚を申し込まれるきっかけになった。私は「絶対再婚はしない」という強い意志決定をしていたわけでもないけれど、再婚は彼と出会うまで、考えたことはなかった。

お互いに、二十歳代の結婚とは違う。折り返し人生を生きてる者には、それなりの付録があって、慎重にならざるを得ない。

私の中には「何とか親娘二人食べてるんや、気儘が一番。煩わしい気遣いは好かん」と面倒臭い気持ちもあって、慎重にも何も、再婚を考へることもしなかった。その上、元の職場を辞めて、いろんな経緯の後に、三年前からひとりで始め

た、宝石の商売への執着もあった。

しかし、敵さんのほうは男ばかりの家、その上飼ってる犬までオス犬とは——。よほど毎日のおさんどんや雑事が負担なのか、さして「いい女」でもなく、半ばオトコオンナのおばさんの私の情に、しきりに訴えてくる。

彼の男女観は 保守的だった

私も、彼の熱意にそれなりの誠意を持つて応えるべき時期が来た。

「体質的に盆栽は嫌いです。あなたの盆栽にはならねんから」

それから、いままで舅、姑の暮らしに縁がなかったの「お父さん、お母さんがいてはるんやったら、まるっきり自信ないわ」と、いたって現実的なことをスパツといった。ご両親がすでに他界されていることを善しとするのは、甚だ不謹慎には違いないが、たとえ薄情女と思われようと、どうしてもやってゆけないこ

となら、敢えて冷酷を承知で問うしかなかった。

「母は六十六歳で四十八年に、父は八十一歳で五十五年に……」彼は静かに、そしてはっきりと事実だけを語った。

聞いた私は、忸怩たる思いにかられた。私は相手にいたわりなど微塵もない問いかたをしたことを悔んだ。特に義母が六十六歳……ということが、妙にひっかかり、まともには顔を上げられなかった。

「立派にしたてられた盆栽なんかは魅力はないなあ。君のいう通り、大地に根を張って、自分の力で水や養分を吸い込み、太陽をほしきままに、大空に葉を拡げる——。これが自然や、僕はこれまで君が、自分の力で生きてきた姿に、心が動いてるんや、君の枝を僕の好みで切ったり、曲げたり、折角の芽を摘んだりする気はないよ。ただ、今後の問題として、君の今の仕事をどうするか、考えてくれないか」

甘い言葉や、ムードあるアイの台詞な

ど無縁のダサ男は、真面目な硬派の話を、理路整然と語るのが得意。

彼はかつて職場でも、労組の委員長を何期も務めた人間で、誰いうとなく「追及の門さん」が社内に浸透していた。私も民主活動の端くれをやって、平和集会などにも参加してたが、その時代の仲間でもあったので、彼の人となりについては、一応の心得は持っていたつもりだ。

しかし、職場の先輩、後輩の関係とは異なり、これからの人生の伴侶として一緒にやっていく男と考えたとき、彼の家庭内における男女観は、職場で見た新しさはなく、保守性を引きずっているようだ。なかでも、女房は家において欲しい気持ちに相当根強いものであることが、会話の端ばしに感じられた。

私は社会に出てから、「女も働くべきや」と信じ、一度も家に入ることは考えなかった。それだけに、生きざまをすっかり変えなくてはならないであろう、彼との再婚話は、不安とためらいがつきま

とう。そんなとき、別れた元亭主との生活を思い起こした。

私は ドン・キホーテ？

元亭は、経済的理由がないにもかかわらず私が働くことを、結婚当初は理解していたようだ。だが、元亭が病氣、失業してからの私は、「女も働くべきや」と主義や好みばかりで「働く」気楽さではなくなった。「働くきゃない」のだ。

娘を出産した後も職場に戻る準備をした。会社側が、産休あけの私を特に阻むことなく受け入れてくれたのは、ありがたかった。しかし、産休あけから働く子持ち社員は、会社にとってはじめてであり、職場の中には何かと放言が飛び交い、決して居心地好いものではない。仕事も男性社員ばかりの職種で、對外活動が多く、なかなか物理的にも厳しい条件であった。

子供の事故、体調をくずし病気になる

ることも何回もあり、父親譲りの体質が禍したのか、軽度の小児結核と診断されたときなど、ホトホト難儀した。

一方亭主は、病も癒えて、職探しをし、働くようになってはいたが、どの職に就いても定着できないでいた。学生時代に患った結核で、片肺しかない身体は無理がきかないのだ。

次第に気力も萎え、うつ屈したやり場のない感情を、自分の殻の中に閉じ込めて、苦悩するようになってしまった。

気持ちがあんまり内向し、歪んでいくうち、女房の「働き」が必要と分かっている癖に、疎ましく、腹立たしく、焦燥感をおおったのだらうか。「子供や亭主よりも仕事が大事なのか」とか「俺の人生は滅茶苦茶にされた」など、かつては物静かで、優しい男だった亭主が、そこまで追い込まれていたのが、私には強い衝撃だった。

娘を腹に宿したときから、小学五年生になったそのときまでの十年間、私が「親

娘のために良かれ」と思って働いてきたことは、馬鹿な思いあがり、うぬぼれだったのか。

しあわせになれると、ガムシヤラになり過ぎて、家族をバラバラにしてしまった。藪から蛇を出したのだろうか。一生懸命やったのは、仕事と子育てで、女房役は不器用すぎて、できなかったののだろうか。

一人三役の相剋のなかで迷い、苦しんで働いた結果は、あまりに無残だった。「俺ひとりなら、なんとかやり直しができと思う、別れてくれ」悲しい一言である。決別の言葉に嬉しいものはあろうはずがないが、私にとってそれまでの生活すべてを否定する、破壊力を持っていた。

離婚に際し、亭主は真面目に言った。「僕が腑甲斐ないばかりに、長い間苦労をかけた。でも、こんな頼りない僕と一緒にだったことで、君は信じられないほど、逞しく、強くなったぞ。きっと娘と二人

楽しく生きてゆける人や」

強がって生きるしかなかった私は、「女ドン・キホーテ」だったのだろうか。

派遣家政婦さながら

私は、昔のことを考えながら、女が働くこと、職業を持つことの諸々に思いをめぐらした。

働くことは生きることなのだ。そして、よりしあわせに暮らすための手段であるべきだ。

人それぞれの条件で、家庭内、家庭外に労働の場を無理なく持つことが一番自然であり、働く本来の定義にかなっていると思う。私は「再婚して彼が家にいることを望むなら、働きにゆくことはやめよう」と、やっと結論が出せた。

再婚話はいつしか、私の実家や親戚にも伝わった。かねてより私のことを、親元離れて女ひとり、娘を育てる危なっかしい存在と見ていた者どもは、真面目が

ネクタイを締めたような彼の出現を大変に歓迎したようだ。

私は「主婦としてできるだけの努力はしてみますが、でも、過剰な期待はしないで下さい」といささか、彼にとっては興ざめの、結婚承諾の返事をした。振り返ってみると「結婚はハズミでするもの」の言葉そのままに、結婚承諾をした感はある。

結婚は当初二年間は別居結婚。私は土曜日の午後から夫の家へと出かける。そして月曜日、夫が仕事を終えて帰宅するまでの、都合二泊三日を夫の家で過ごすことになる。やもめ暮らしの夫の家には、掃除、洗濯、買い物、食事の用意と、いくらでも家事仕事がある。まさに、週末旅行二泊三日は、派遣家政婦そのままであった。

とにかく私達は、ウォーミングアップ済みの結婚、ということになるのだが、娘の高校卒業を機に、古い土地柄の田舎にある家へ越してきた。

男のエゴを のぞかせる夫

息子二人とのかかわりかたも、一切無理しないことにしている。生さぬ仲で、しかも成年に達している息子二人の母親になろうなどの気負いは、結婚のときからなかった。ただ、一つ家に住む、息子たちより長く生きてきた者として、つきあうだけだ。

だから、彼らが私を呼ぶ場合も全く自由でいいのだ。「あのう……」とか「ちよっと」「なあーって」などの呼びかけ語を使って話している。「連れ子」の娘だけは、私達が再婚した時点から、夫のことを自然に「お父さん」と呼んでいた。まごついたことに隣人とのつきあいがあった。私が家から一步外に出ると、いろんな眼が追ってくる。「ああ、あそこいきよった、今度の嫁かい」って具合で、たちまち注目の人になった。そして専業、兼業の農家の多いここには、古く

からの土地の慣習が根強く残っていた。人々のなかに「女房たる者、家において所帯を守れ」の意と各箇所を掛けた「出ん得」（出んとおこう、出んと得をする）なる言葉が生きていたのには、驚いた。当然私のように、音楽や演劇鑑賞、美



術展などにゆくとか、ときには友人に会ったりで、出歩く者には、窮屈な空気だ。しかし私は、いささかの遠慮もせず、また最近ではその回数も、増している有様なのである。

夫は日が経つにつれ、男のエゴを覗かせてきた。ネクタイを解き、背広をぬぎ

捨てたときから、まるで別人になるのだ。「おい、風呂に入る」「おう、水や」「暑いッ、扇風機の風を強うせえー」女房には絶対命令口調でいいつける。そして自分が「これやッ」と欲するものは、即座に調えないと我慢できないのだ。また並

行して女房泣かせの根源は、面倒なこと、嫌なことからは平然と逃げることだ。

一方、いい妻を演じられない私は、夫の横暴な態度、物言いに「ハイ」とか「申し訳ありません」など、口が裂けてもいえない。一言、三言必ず言い返す。

自分の前のテレビのチャンネル切り替

えまで、台所で水仕事をしている私に、大声でいい付けてやらそうとするに至っては、まるで子供以下、自分のことが何一つできないのだから、それは夫にとっても、不幸なはずである。夫は私の口答えを不機嫌に聞きながらして、「お前は『ハイ』とか『すみません』を言わん」と、ふくれる。

私は言うだけ言ったら、あとは子供を諭すような気になり、「みんなお父さんのためよ、私にポン、ポン言われてる間は、きつとボケの心配は要らんわ」と、笑いながら落ちをつける。

再婚で喪つたもの 食っていく気力

毎晩晩酌する夫は、上下左右あらゆる次元の議論を、ダバッアとぶつつけてくる。酔いの性と根からの頑固さから、独断偏向甚だしい論旨でがなり立て、論戦を挑む。

酒呑み話と、譲っては聞かぬが、私に

もどうしても領けないことがある。そこでたまりかねて、「うん、そうやけど○よ」と異論を唱えようと、これまた一段とヴォルテージが上がり、怒とうの如く声がうねりだす。

私はもう大声に耳をぶたれ、頭はガンガン反響音が交錯して、まるで拷問されるような身になる。側に座っているだけで、夕食後といえど神経、体力ともに消耗してくるのを感じる。

もう限度いっぱいだ。「お父さんの演説、もうええわ、私疲れるウ」とギブアップする。それがまた気に召さない。

「疲れるノ アホなこと言うな。その言いかたは、一番卑怯やぞお、お前も反対意見があるなら言うてみい。俺を納得させてくれるんなら、堂々と主張せえ、急にダンマリ（黙る）で『疲れた、ヤメロ』とは何じゃ。最後までやろやないか、夜中が朝になろうと構うことない」元・山男だった夫は、ひとり峰をめざすかの、ド迫力でせまってくる。

「追及の門さん」は茶の間では悲劇だ。やはり「笑いの門さん」として、福をもたらししてほしい——。これが女房の悲願である。

たまに揃って夕食していた息子や娘も、こんな調子の夫がいたら、「茶の間の話題とは思われへん」と呆れ顔で、めいめの部屋に退散することになる。

私は元の職業柄と言うか、ほとんど二十数年間、人さんと話すことで仕事をしてきた者で、適度の会話を楽しみたいのだ。

ところが今は、日中ひとりきりで、めったに話すことがない。そして唯一、口が稼働できる夜の八時から十一時すぎ、喋るには喋れるのだが皮肉にも、我が意に反して、攪乱されてしまう。

昼間ひとりで、百年以上もたった家において、緑生い茂った田園から吹く風の音を聞き、本を読む。庭木の枝にあそぶ小鳥をぼんやり眺めている。

そんな暮らしは、以前の私の生活では

叶いっこない野趣に富んだ、贅沢な生活である。けれども、その静けさの中に埋没し切れないものが、胸の奥の数枚の襷を、ちよっとしたはずみで焦燥感、孤独感に駆り立ててゆく。

サラッ、サラッと呼びはじめた襷は、またたく間に一つに連なった、全部の襷を大きく揺さぶり、ザワザワザワアア……と次第に、揺れと音が大きく速くなってゆく。襷の山がみんな膨らんでなくなったとき、激しい言葉が喉を吐いて出る。

「私は、アンタや息子、娘の便利屋とちゃう。私のやる仕事、それは何ッ。使い捨てカイロみたいに、使うだけみんな使うてえ、あとは勝手に……」

パイプレーションのかかったソプラノで叫んでいる。眼は霞がかかったようになつてくる。夫は幾分うろたえているのか、静止さそうとしているらしい。「まあ、まあ」みたいな繰り返し言葉を発している。息子はいつの間に姿を消したの

か、いない。娘が不満そうな顔で、私をじっと見ている。

そして二、三日。ときには一週間、私は夫には必要なこと以外は、できるだけ喋らない。普段は一番よく笑うのに、それも止す。

それから私が、徐々に落ち着いてくるころ、夫は私に反比例するように、滑稽なほどに私へ気を遣ってくる。やや気の毒にも思ったりするが、極力知らんぷりを装う。

そんなときである。娘が険しい顔つきで、夫と私に向かって言う。「友達いっぱいいたK市の家から、こんな誰も知らんところへ連れてこられたんも、ママがしあわせになる結婚やから来たんや。お父さんとケンカするんやったら、前の家におったほうがましやわ。何ッ考えとんねん」

そうであつた。まさに私は愚かしい母、悪妻である。私は再婚したことで、食ってゆく厳しさと、氣力を喪つた。同時に

感動も、緊張もなくなっている。

それはとりもなおさず、「連れ子」「連れ犬」で再婚した者の、責務と気概を忘れているのだ。お互いによく知らない者同士が、新しく生活を始めた。環境も変わった。家族それぞれに面白くないことや、まごつきもある。それらを一つ家族になるため、みんな我慢してくれている。そんな周囲の気持ちに無頓着な主婦、私は過ぎた日を懐古するだけで、何もしていかない。

私は再婚を “選択”したのだ

――働きながら、さまざまな人と出会い、数々の感動を受けてきた。愉快なこと、悔しいこと、それらが当時の私をいつも支えてくれた。引っぱり上げてくれたり、あと押しをしてくれたのだ。

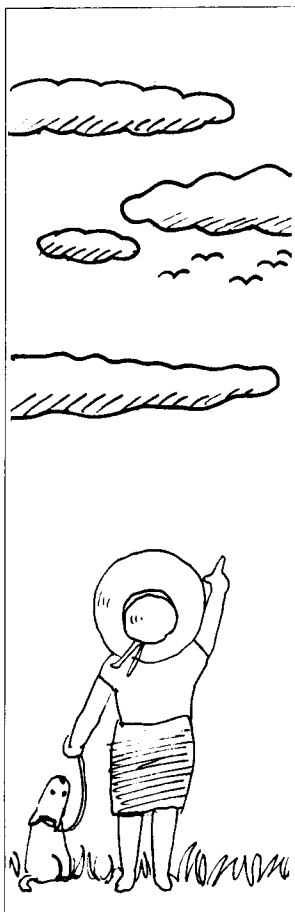
娘の保育園がなくなって、自宅から一時間半も費やして、職場近くの保育所に預けて働いたころも、私を揺さぶるような

感動がたくさんあった――。

これらはすべて昔のことである。今の私にそれがないと嘆くなら「盆栽」でない、食い扶持を貰う「鉢植えの生き方」があるはずだ。大事なことは、私が選択した現在の生活に、家族に期待するのではなく自らの意志で、内に感動を呼び覚ます何かを、創造する以外にない。

働いていたころ昼間に、庭いっぱい洗濯物を干している主婦を羨ましく、新鮮に感じた。私は、今それが毎日できるのだ。

草花に話しかけながら、草抜きをして、四季の花々を楽しんでもいる。



二匹の犬とたわむれながら、野辺の道を歩くのも日課となった。

年二回夫婦でする旅行のほか、娘との二人旅、友人達数人で行くグループ旅行も昔のまま続けることに、夫は気持ちよく応じてくれる。

それでもまだ、私の独占できる時間と、心に余白をみつけた私は、今までやりたくてもできないまま、胸の中で埃をかぶっていたものを一つひとつ並べてみた。

そうして、どうしてもやりたいもの、条件的にやり易い無理のないものから、手を伸ばすことにした。

七十歳で絵を描き始めたアメリカのモ

ーゼスおばさんは、童女のように純粹で、夢にあふれた絵を多く残している。

私は美術展で観たときの感激を思い起こした。私の四十四歳は、まだまだ若い。希望が持てた私は、この春から、水泳とエレクトーンを初心者として、習いはじめた。もちろん家族には、笑われることを覚悟で話した。そして、人に話すことで練習に身が入るメリットにも気が付いた。

幼稚園の子供たちも、髪に白いものが目立つオバサンも、知らないことがわかってくる喜びは同じで、有頂天になって励んでいる。

私は再婚したことで、全く異なった女を生きたことができた。ひとりの女が二人の女の人生を歩くように――。私のひとつの生命は貪欲に、人生を二倍楽しもうと高揚しているのである。

(え・堀切潤子)

投稿ホットライン——楊枝で重箱の隅をほじくろう！

マスコミ むしる

ついていけない 大仏建立広告

東京都国分寺市 たまき久美

こんなことにこだわるなんて、私はよっぽどヒマ人だと思いながら、五月二十八日朝日新聞朝刊の全面広告から眼が離せない。

身も心もビッグな越前大仏さま

感動はそのままレトロ体験

と、大きな見出し。さらに、

「大門の仁王さま

おこっちゃいや。たくましいけど
じっと見てると可愛くなりそう」
などの小見出し。

大仏建立のPRらしい。レトロ、エスニック、ルックス、ヘルシーと片仮名の流行語も満載で、弱冠三十四歳の私が、「世の中変わった／＼」とため息をついた。忙しい（？）一主婦をア然とさせ、あれこれ思いを巡らせる材料を提供したということは、とりもなおさずこのPRは大成成功なのだろうか。

さて忙しい（？）主婦である私は、二歳の子供を遊ばせるため友人宅になだれこみ、そこでめざとく読売新聞を見つけた。あった。真ん中の全面に、「これが

噂の越前大仏だ／＼」と大見出し。

不思議なことに（？）記事内容からレイアウトに至るまで何もかも違う。読売の記事は旅行（業界誌・専門誌）のルポ風PR記事、とでも言えばいいのか、朝日の感覚派に較べて、ずっと説明もマトモ。大見出しは「勝山市は『大仏』で村おこし」となっている。フツの主婦にはこのほうがわかりやすい。

しかし、まあ何の理由があって全く違ったPR記事を作る必要があるのだろうか。

二つの新聞の読者層を想定して、というのなら「ご苦労様」と労をねぎらうベきか「勝手に読者の好みを想定するな」と文句をつけるベきか。

ところで、この二つのPR記事から、朝日と読売の読者層は広告業界ではこう想定されているのだろうか、と私は憶測（邪推）した。

新人類が（新人類も）読む朝日新聞
団体旅行参加者が（も）読む読売新聞

投稿ホットライン——思い立ったが吉日

おんなの道楽

女が何かをやればどれでも道楽、ウレシイ！

雀百まで

ジャズ・ダンス

東京都東村山市 長井 淳子

昔、学芸会では一握りの生徒が先生のご指名でお遊戯や劇に活躍した。私なども出してもらえた口なので文句は言えな
いが、今から思えばひどい差別があった

ものである。
戦後は私も人なみにフォーク・ダンス
や社交ダンスをちよっぴり味わった。盆
おどりは土地柄か参加したことはない。

私の踊りの体験はそこまりであった。
またジャズに関して言えば、江利チエミ
とかベニー・グッドマンどまりで現在に
いたっている。

この私が、なんとジャズ・ダンスを始
めたというのだからおどろきである。お
茶、お華、テニス、コーラスなどとも無
縁できた私である。せいぜい油絵、読書
会、ヨーガあたりで満足してきたのであ
る。しかし同年配の友人が、更年期とか
腰痛とか足に水がたまっただなど言い出
すころになって私も「もっと動いてみた
い」と考えていたのであるが、その矢先、
「先生が実に愉快でたのしいの。若い人
ばかりでなく、年配の人でも沢山いるし大
丈夫よ」とさそわれたのがジャズ・ダン
スであった。

私はいたって行動的なほうでウジウジ
しないタチであるが、このジャズ・ダン
スだけは体力と気力と適性ということで、
二の足をふんだのである。しかし、のぞ
いてみようということではじめて見たジ

ヤズダンスは、私の古くよんだ血をさわがせた。その昔、学芸会で緊張しながらも童謡にあわせて可愛くシナをつくっておどった血がよみがえったのである。

たしかに若い人は少なく、三十代、四十代が主流である。それ以上の人は私も含めて六人ぐらいだろうか。一丁前にレオタード、レグ・ウォーマー、サウナパンツだの色とりどり、思い思いの恰好をしたオバさんたちが、お世辞にも美しいとは言えぬ姿でおどっている。

しかも皆一様にイキイキしていて朗かなのである。あたり前だが、根暗ではこんな所にこんなにしんどいことをするためにくるはずがない。曲に乗って自然と身体が動き出すダイゴ味は先のことで、今は次にどうするかを考えながら踊っているところである。一を聞いて十をさとする根ッからの踊り上手が二、三人はいて彼女らが先頭に立ってくれる。それを見ながら真似をしていると、いつの間にか考える前に身体が動いてくれるときがあ



公民館で、夜のレッスン風景

る。

「しめたッ、これだな」と思わず知らずオーバーに表現したりすると、不思議なことに踊りになるのである。頭で考えているうちは、デクの棒がギクシャクと体操をしているだけである。

いつの間にかマドンナの曲にあわせて、身体が気持ちよくおどり出し、コップに一ぱい分もの汗をしたたらせている——これは実に気持ちがいい。白髪まじりの髪をなびかせてせり出したお腹をユサユサと揺らせるなんて、思えば「オエッ」ものだけれど、踊る当人はプロのおどり手になっているつもりかも知れない。人の目を気にしないで自己満足していればよいのである。

私などは目立ちたがり屋のほうではないと思っているが、このように身体で何かを表現したいという欲求は、ごく自然でしかも表現した後の充足度は意外に大きいことがわかったのである。

指導者の気さくな人柄、魅力のある踊

J.フィリップス／小池和子訳

イブ/その理念の歴史

フェミニズムを視野に
おいたイヴ神話の解釈
の解釈史。2700円 300

D.スベンダー編／原恵理子他訳

フェミニスト群像

女から女へ、時代を超
えて継承されてきた鉾
脈を探る。2400円 300

L.イリガライ／棚沢直子他訳

ひとつではない女の性

女のセクシュアリティ
を克明に描いた著者の
代表作。予2500円 300

目黒依子

個人化する家族

個人の生き方を支援す
るシステムとしての家
族を予測。1800円 250

J.トンプソン／上杉孝實他訳

解放を学ぶ女たち

イギリスの女性教育と
運動の現状を詳しく報
告する。2500円 300

……………好評5刷……………

上野千鶴子

女という快樂

〈女と男の関係の解放〉
を説き続けてきた著者
の到達点。1900円 250



勁草書房

東京都文京区後楽 2-23-15

☎ 814-6861 振替東京 5-175253



先生はプロのダンサー、最近の舞台姿

りっぷりは天性のものである。元OSKの踊り子で夫が振り付け師とかの踊りざんまいの生活であるらしいが、私たちのような偶然あつまったオバさん相手の指導が「息ぬきができて、しかもたのしい」とのこと、実に上手に指導してくださる。入れかわり立ちかわりの生徒の名前をすぐに覚えて「○○さん」「××ちゃん」と呼びかけるのだが、これはふりを必死に覚えようとしている私達初心者には、ずい分はげみになっているのである。「せめて六十歳までがんばりたいわね」とヘトヘトになりながら話しあっている……。

投稿ホットライン——物いわぬは腹ふくるるわざ

マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でもの申そう！

話題

東京都 片山 節

知人、友人に会えば大概会話が始まる。一般的にどのような話題が多いのだろう。

また、どのような話題のとき、話し合った後、楽しかったとか有意義だったかと思えるのだろう。それはもちろん、人によって異なると思うが……。

毎日毎日、多くの人が偶然または必然的に会い、言葉を交わす。また、人々は友を求め集まり、楽しそうにおしゃべりをする。でも、本当に楽しいのであろう

か。心が通いあい、満たされているのであろうか。

私は内向的な性格なのか、心を許し合っている人との会話は別として、一般的なおしゃべりは苦手である。親しい人達に、どんな話題が多いのかと聞いてみると、もちろんいろいろな話題が出るが、噂や悪口も結構多いとのこと。なぜ人は他人のことにそんなに関心があるのか私には分からない。よそのお子さんが何大

学に入ろうと他人には何のかかわりもないと思うのだが……。

一般的に、主婦はどうも自分の子供の話が多過ぎるので聞いているほうはつまらない。ほとんどの人が自分自身については、何をし、何を考えているのかを語らない。隠しているのだろうかとかさえ疑いたくなる。それとも語るべきものがないのだろうか。

同じことに興味を持っている者同士で、それについて語り合うのは本当に楽しくて私も好きだ。だが、どうも、自分に興味の無いことでも付き合ひ上、一応楽しそうにしゃべらなくてはならない場合が多いようで、そういうのは疲れるし、時間が勿体ない……と悲しい。



仕事や趣味に打ち込んでいる人の話は（自慢話にならないければ）たいいてい生き生きとしていて興味深い。また、相手がほとんど一方的に話をして、話者が博識で、こちらの知的好奇心を満たしてくれ、知恵、知識、情報など興味深く授けてくれる場合は大変有難い。相槌を打っているうちにこちらも少しは利口になっていく感じがするから。

一番楽しいのは、好きな人と話をしているときであろう。相手が仮に大したことを話してなくても（いや、全て素晴らしいことを話しているように思える）、一緒にいられるだけでも最高である。残念ながら、もうこういうことは過去に属し、今はただ「昔を今になすよしもがな」と涙するのみ……。

さて、私は以前から大変不思議に思っていることがある。人はなぜ天気や噂や悪口などでなく、もっと自分にとって大切なことを話し合わないのだろうかということである。学生のころは、人生論とい

うか、将来のこと、どういう考え方生き方をしたい等を友達とよく話したと思う。それなのに、何故、大人になるとそういうことをほとんど話し合わないのだろうか。若いころは未来は五十年も六十年もあり、可能性はいくらでもあるから夢を語ったのであろうか。それでは四十代五十代には未来がないというのか。いや、後二十年、三十年しかないからこそ、一年一年、いや一日一日を大事に有意義に生きたいと思うのが普通ではないだろうか。そしてより良く生きるために、知恵を知識を交換し合うべきでないだろうか。それとも、忍び寄る老化が怖くて無視したいのであろうか。はたまた、多くの人々は、もうすっかりと自分の人生哲学を持ち、目標も定まり、有意義な毎日を通じているから、今さら他人と話し合う必要はないというのだろうか。それとも、ことが重大過ぎて、他人と軽々しく意見を交わすべきでなく、各人が自問自答しているのだろうか。

私はいえ、自分の人生、考え方生き方はこれでいいのかとつねに考え、自分にとって少しでも有意義に、また満足できるような生き方をしようと心掛けている。そのために本を読む。そして、こうして文を書く。でも、ときどきは、ためになる先達の話も聞きたいし、生き方に対する友達の考え方も聞き、お互いに参考になることは影響し合いたいと思う。だが、こういうことを話し合いたがる人はほとんどなく、語り合える人は少ない。

付き合いとか、会話とかは、本当は自分に関心のないこと、大事でないことであつても、さも興味ありげに明るく楽しくおしゃべりするべきなのであろう。だが、人は皆、それで心が満たされるのであろうか。自分がどういう考え方で生きていくかということは、話し手皆それぞれに一番大事で、関心のあることのはずなのに、なぜあまり話題にのぼらないのであろうか。

「匿名」を恥じる

私は二〇六号に「しわ」と「ひとみ」というエッセイを匿名で載せていただいた。

各地区の福祉事務所より措置書という書類によって人生を左右されている施設入所老人の姿を「わいふ」の読者に報告したかった。

実際に原稿を書き、投稿しようとして、私はどうしても本名を書く勇氣がなかった。

匿住、匿名の私の原稿を「わいふ」誌上で一読して自分を卑怯だと思った。私の取った今度の行動は、目出し帽子のあの朝日新聞記者の猟銃犯人と根本的なところでは同じではないかと思えた。

問題提起する場合は、やはり正々堂々と本名を出し、自分の意見を述べるべきだと痛切に思った。

自分の存在をはっきりとさせてこそ

福岡県遠賀郡 樋口 昊子

ルポではないかと反省している。

「匿名で書くくらいなら原稿なんか書くな」

と師からも叱られてしまった。

私は、特別養護老人ホームで寮母長として勤務していた。退職後も全国的にあ

ちこちの施設を回り、また研究会にも個人の資格で参加している。

退職してまでこんなことをするのは何故か？ 老人施設には余りにも問題が多いからである。

人間が、「老い」「死」という最終段階へさしかかった際の居住場所としては、考えさせられることが多すぎる。

先日見舞った九十歳の老女は、ベッドに両手をしばりつけてあった。

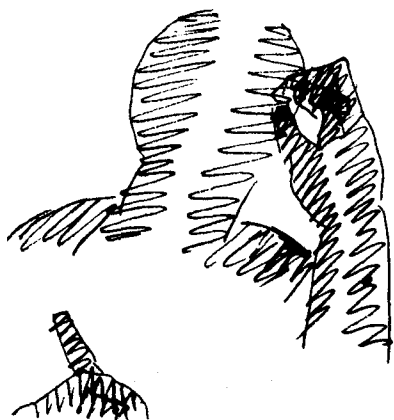
「じっとしとるのはきついな（疲れるな）」
そう言って老女は弱々しく笑った。

東村山市の長井淳子さんの「子供と遊ぶ老人」私も同様のことを考えた。

つきつめていけば、管理というところいくつかではないかな——と知っている。
（施設側の）

これからも考えたこと、見てきたことなどを報告していきたい。良いことも悪いことも——。

そして、もちろん、本名で……。



ああ、お葬式

大阪府豊中市 中松ミナ子

母は六か月の闘病生活の末、息を引き取った。その瞬間より、今までの患者は病院側から是一個(?)の死体でしかなくなる。したがって一刻も早く病院外へ出ることを望んでいるのだ。

病院からの連絡で駆けつけた葬儀屋の寝台車は裏門からソロソロと出た。すでに明日に近い深夜の道路を夫や弟の車が、母の横に付き添った義妹と私の乗る寝台車のライトと交錯しながら、山道をくねくねと下っていった。

そして、ようやく母は念願の我が家に帰れた。入院以来、少しずつ容体は悪化、その様子を、ただ医師の手にゆだねただけの私……、大好きなコーヒーの一滴さえ口にさせずじまい……、どうせ助からぬものなら思い切り飲ませてやりたかった。

しかし医師は一分一秒でもと、この時

点で医師(病院側)には、肉親の感情より医学技術がいかに優れているか、の問題にひたむきの姿勢が見られ、母の肉体はもはや私たちから取り上げられたも同然となるのだ。追い打ちをかけるように母の介護者は、私に花さえ持ち込むのを止めた。

床ずれを防ぐために二時間ごとの体位を交換する作業は確かに重労働であるから、枕もとの花は無用であったろう。だが意識モウロウの母も、フツと現実に戻る瞬間があったかも知れないのに……。結局は母の最期の枕もとに花の一輪もない淋しい情景であった。

その思いが私を「葬儀は花でいっぱいにしてね」と夫と弟に申し出させたのである。

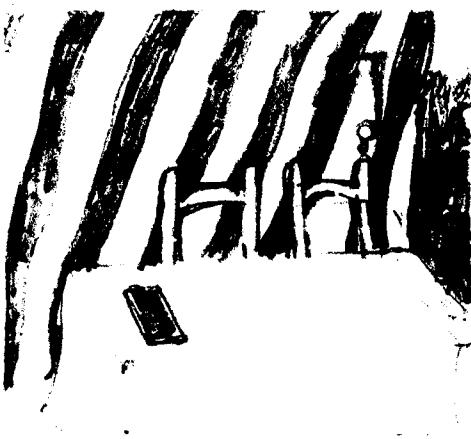
そして母は、まさに花にうずもれた祭壇で少しばかり照れ笑いを浮かべている

ようだった。

さて、葬儀は葬儀屋の狂いしない指示に従って時間通り進行し、やがて終わった。

ああ、お葬式ノ こればかりは、ある種の批判を持って見守る他人サマの葬儀に限る。

人生七十年余りの終幕が、これほど大変であろうとは予想だにしていなかった私は、母の死の悲しみにひたるよりも、その後始末に悲鳴をあげているのである。



払うべきか、べからざるか

岩手県花巻市 山本留々子

「また、きた。やっぱり払うしかないか」
割り切れない気持ちに心に重い空梅雨
の暑い午後、

「そうよ。払わなきゃ、連帯保証人に請
求がいくって書いてあるもの」

私は自問自答していた。

約二年半、私たち家族は、東京都公社
住宅の所有である町田市郊外の団地に住
んでいた。団地に住み始めのころは、そ
れまでのアパート住まいと違って、家賃
が約半分で納まることや一部屋増えたこ
ともあって、五階建ての最上階ではあつ
たが、なかなか快適だった。

しかし今年二月末、私たちは自然とと
もに生きたいと考え、宮沢賢治の故郷で
あるイーハトーヴに腰を落ち着けた。計
画していた無農薬野菜作りや（まだ、ほ
んの少しばかり）花作り、春の山菜採り
に追われていたある日、一枚の請求書が

届いてから重い気持ちで三か月も暮らし
てしまった。この素晴らしい緑の地にい
てもったいないとは思うのだが。

ことの始まりはこうだ。私たちが団地
を引っ越した後、公社側は次の入居者の
ために住居を復旧した。天井や壁、畳や
襖など新しくし、台所の油の汚れなども
清掃する。それらにかかった費用は入居
時に納めた敷金から差し引かれるのだが、
私たちの場合、敷金内で復旧できなかつ
たとして不足金を払うよう請求書が届い
たのだ。

内訳書を見て納得できるのであればも
ちろん払うつもりでいたが、どうしても
合点がいかない個所があった。それは私
たちが入居当時から取り付けてあった浴
室のタオル掛けや台所の網戸に対する撤
去代、また引っ越し日に大勢で清掃した
ガラスに対しての汚れ清掃代金などであ

る。

私たちは入居時に取り付けてあったタ
オル掛け、網戸については公社側の所有
する取り付け物だと当然思い、退去時、
元のままにしておいたのである。抗議の
文面を送って、もう一度検討してくれる
よう頼んだ。二週間後、返事は電話だつ
た。

午前中の忙しい家事の合い間、もうす
ぐ二歳になる長女はいたずら盛りで、さ
かに電話をいじる。それを止めながら
の落ち着かない状態での五十分のやりと
りとなった。

大勢で清掃したにもかかわらず「汚れ
ている」と判断された清掃代千八百円の
ガラス汚れについては、査定者は一定の基準
から割り出し判断している。研修会など
で偏らない判断を勉強しているという。
また、タオル掛けや網戸については、「公
社はすべて取り外した状態で次の入居者
に入ってもらいます。退去してから、そ
れらは入居時、付いていたものだと言っ

ても水かけ論です。入居時に申し出るように『しおり』に記されていますよ。その時点での話をするには、おたくの主張は通らない」とも言った。

しかし、『しおり』には入居時、取り付けてあるものについての部分は一切ない。私は食い下がった。「でも明らかに取り付けてあったのです。私たちが購入したではありません。すべて取り外している（公社側）」というのが前提だというが、実際に付いていたという事実はどう説明するのですか」

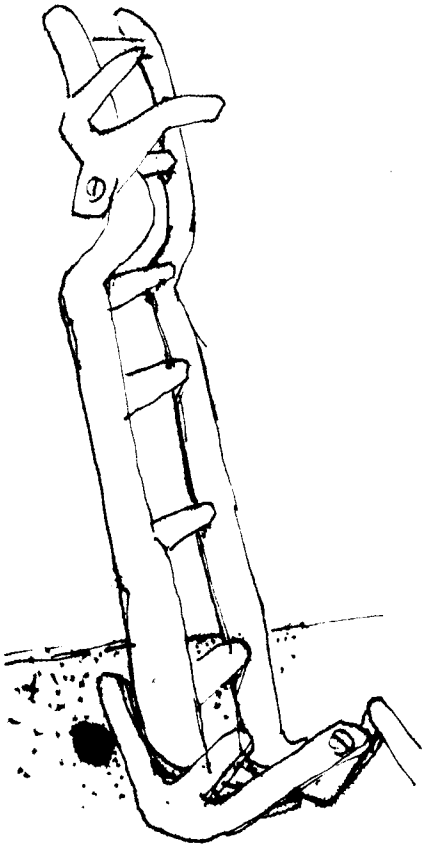
これに対して、査定者（および作業者も含むのか）は多い日で何百件数の空家を見て歩くこと。また、そうした中には見落としもあるでしょう。人間の作業ですから……と言ったのけた。さらに「おたくは、まだ安いほうです。二年ぐらい住んで額はいくらですか。三千二百五十円。これが八年、何十年住んでいるとなると何万とか何十万とかの請求がいくこともあるんです。極端ですが。でも、大

抵は居住年数が長いということで皆納得されています。おたくさんのように申し出る方は一パーセントぐらいですが」と続けた。

請求額が高いからということでは言っているのではなく、筋道が通っていれば払わなければならないと思う。しかし、取り外しの作業を忘れておきながら、その作業代金（撤去代）を次の入居者である私たちが払うというのが納得できないのだと繰り返した言ったが「変えられません。

払って下さい」だった。五十分のやりとりでお金をからめた話をしているのが、ふっと空しくなり、返事ともつかないため息をして電話を切った。

それから、どうしたら良いものかと考えた。「五十分も話したのだから不足金にもなったろうし、もうここで手を打って払ってしまえば悩むこともない。そうしよう」と思っではみたが、やはりすっきりしない。するわけがない。夫の帰宅を待ち話をすれば「払うことないよ」の



一声。その後「何か言ってきたら払おうか」と軟弱に言うだけだった。腹立たしさを覚えながら、また考えた。

第三者に相談したらどうだろうか、と、住んでいた団地の自治会長あてに一部始終を書き、解決の糸口を見つけられたらと速達用切手を貼付した返送用封筒も同封したが、一か月以上たつ今も返事はない。甘かったのかなと苦い思いと自己嫌悪が走る。そこへ二度目の公社側からの請求書だ。私の心の中には、宮沢賢治の

重症心身障害児施設「秋津療育園」を訪ねて

東京都練馬区 小江 鐘子（40歳）

門の横に「関係者以外立入禁止」と書かれてある。まず大きな玄関に入り、受付のような窓口で、様子を聞くことにした。

「石神井教会の方が今日、おむつを畳みにみえると聞いてきましたが、私は少し早く着いたので、その部屋を教えていた

一節がうかぶ。

北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ……

今、そう言われれば「ハイ」と答えるのだが。二度目の請求書を受け取ったときには、主人に言った。「自分で内容を確認してね。私任せにばかりしないで」と。しかし、私ばかり悩んでいるのではないことは分かっていた。主人も揺れていたこの三か月である。今は二人ともこの一件を落ち着かせて静かに暮らしたい。

「はい、そうです」
「あら、じゃ、女の子のカットをしていただけると助かるんだけど、実はね、伊勢丹の美容室から、若い美容師さんが来てくれていたんですけど、結婚して来られなくなって、困ってるんですよ」
「ああ、そうですか、私は、おむつを畳むつもりでしたが、どちらでも結構です、お役に立てば」
そんな会話を交わしながら、山ほどおむつがある部屋に案内された。私より先に二人の中年の奥様が、すでにおむつを畳んでいた。

洗い場が隣にあり、ときどき、さらに乾燥機から出されたかご一杯のおむつを、係のおじさんが山積みにする。私がおもたしている、その人がニコニコしながら、おむつ用の台と座布団を出してきてくれた。そして、畳み方の要領をやはりその男性に教わった。

十時過ぎたころ、石神井教会の方達らしい四人連れ、七十歳ぐらいのお爺さん、

八十歳ぐらいのお婆さん、熟年の奥様二人が現われた。慣れた様子で、台や座布団を用意している。「あのーッ、私、石神井教会の佐藤さんに聞いて、今日初めて、ここへ来たんですけど」

「ああーッそういえば、大島先生から聞いてましたけど、あなたが小江さんです



か？」

「はい、そうです。教会は一年に何回も行かないので、皆様ともお知り合いになれなくて、でも今日はよろしく願います！」

その一行にはお爺さんがいて、私は驚いたが、十一時ごろ、もう一人男性が加わった。教会の牧師さんだという。自分の夫が何も手伝わない男性なので、私は感心してしまった。

単純な作業だから、さほど神経は使わなかったが、普段立ち仕事の私には少々座っていることが辛い！でも、一番若い私が、そんな表情は出せない。何しろ八十歳のお婆さんが同じ作業をしているので、負けてはいられないと頑張った。

十二時二十分ごろ、そろそろ終わりましたよというとき、外にマイクロバスが止まった。

「天理教の方達のようなね！」と誰かが言った。

「火曜日の午後は、いつも天理教の方が

見えるのですか？」と私が聞くと、

「おむつを畳む人の人件費は出せないの、ボランティアの力に頼ってるけれど、毎日平均して来ないと、一日六千組も使うおむつを畳む作業は、一日も休めないのよ」と、いつも見えてる方がいう。

マイクロバスから降りた天理教の方々ほとんど、腰を曲げて歩くお年寄りだった。皆さんお弁当を食べてから、作業を始めるのだという。

こんなお年寄りたちがボランティアにくるのか、私にはまたまた驚きだった。

単純な作業を休まず二時間半続けただけで、翌日から一週間、背中から腰にかけて、寝返りを打っても痛い。あの八十歳のお年寄りたちは、私のように痛くないのかどうか、不思議だった。

その日出会った人達の自然な奉仕態度に、改めて私自身の日常も考えさせられた。来月からは、カットの道具を持って、心からの奉仕をさせていただくつもり。

まだ四十歳!! 頑張ります！

「塩川文相発言」について

東京都西多摩郡 太田 知子

「子どもが義務教育中、母親は家庭に戻れ」塩川文相がこんな暴言を吐いたのが、五月十六日。それからもう一か月半もたつというのに、大して議論が沸き上がらないのは何故だろう。改めて振り返ってみた。

私があの問題発言を知ったのは、五月十七日付けの読売新聞朝刊である。第一面の左下に、四段見出しで掲載されていた。ところが、他の新聞では取り上げていなかった。（私が調べた限り、朝日、毎日、サンケイ、東京、日経には出ていなかった。他の新聞で見た方がいたら知らせてほしい）

記事によれば、五月十六日、京都市内のホテルで開かれた文部省主催の教育改革推進懇談会の席上で、文相は次のように女性の社会進出を批判した。「末っ子

が義務教育中にもかかわらず、職を持っている母親が半数を超している。男女同権で外に働きに出たいというのかわかるが、それは建て前で、本当は家庭に戻ったほうがいいと思う」と。

それに対し、文相は懇談会后「母親は、家庭と子どもの環境にとってもっとも重要な存在。できるだけ家庭にいてもらわないと問題が起こる。これは私の信念で、機会あるごとに話させていただいている。男女雇用機会均等法は、働いている人について男性も女性も平等にということであって、それ以前に、家庭の責任というものがあるのではないか」と釈明したそう。

私はこの記事を読んで、目の玉が飛び出るほどびっくりし、日本の教育を司る文部省の最高位に在る文相がこんな考えを持っていることに強い危惧を覚えた。

「男女平等の民主教育はどうなるのだらう。文部省は、戦前の『良妻賢母』教育を復活するつもりではないのか」と。

文相の発言の根幹にあるのは「男は仕事、女は家事育児」という性別役割分業意識そのものであり、「子育ての責任は、全て母親にある」という偏った考えである。だから「母親が家にいないと子どもに問題が起こる」と言いきっているのだらう。しかし、これは間違っている。

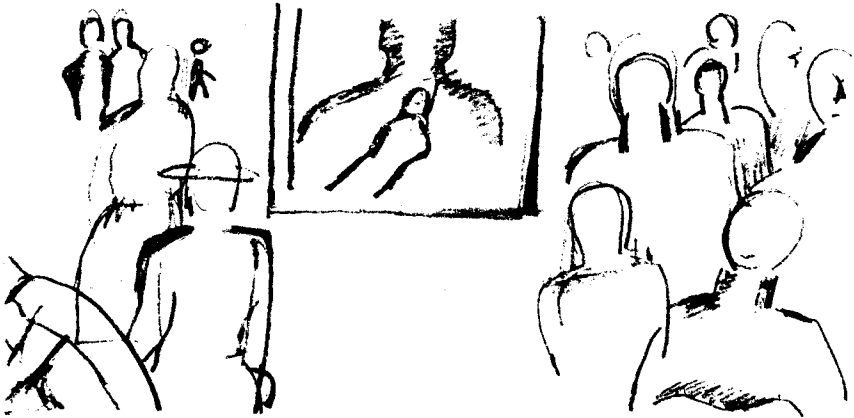
子どもは、母親が家にいても問題を起こすし、外で働いていてもしっかりしている子はいくらでもいる。このことは、私が小学校の教員をしていた経験からも言えるし、「母親の就労が子どもに及ぼす影響」の実証研究をしている国際女性学会ワーキングマゼース研究会の調査結果を見ても明らかだ。だいいち、母親のほとんどが働いている中国やスウェーデンで、子どもが皆問題児になっているだろうか？

文相はまた、「平等に働く以前に、家

庭の責任というものがあるのではないか」と述べているが、これもおかしい。平等に働いている男と女が結婚して家庭を持ち、責任を分け合うのであって、平等の以前に家庭があるのではない。

文相ともあろう方が、「母親が家にないと子どもに問題が起こる」という誤った認識を「信念」として持ち、「機会あるごと」にさまざまな所で話しているというのは恐ろしいことだ。子どもを人質に「母親は外で働くな」と脅迫しているようなものではないか。

ところで、一般の人たちは、この発言をどのように聞いたのだろうか。さほど議論が沸かないのは、皆、文相の言葉にならずにいるからだろうか。新聞報道された一週間後、投書欄「気流」に読者の意見が載った。三十四歳の男性と四十五歳の女性。二人とも「原則では文相の意見に賛成だ」と支持している。特に男性のほうは「懸命に働く父親、優しく家庭を守る母親。無言の愛情こそが何ものに



もまさる最高の教育だ」と公言していた。世の中は驚くほど保守的だ。性別役割分業意識が根強く残っている。文相自身、「男女同権は『建て前だ』」と述べたように、本音では『男尊女卑』の思想に凝り固まっている人がウジャウジャいる。だから、均等法で男子のみの採用や、賃金差を否定しておきながら、女性が働き続けるために必要な母性保護が否定されたり、保育所予算が大幅に削られたりするのだろう。

問題発言のあった同じ日、神戸では「働きながら生きる」をテーマに、第二回世界女子学生会議が開かれた。そこではパネリスト全員が「仕事、家庭、子ども」のすべてを求めたい」と一致団結し、そのために「男性に子育て参加や家事の楽しさを伝えるべきだ」と訴えたという。世の中の意識を変えさせるには、実績を示すのが一番だ。均等法以後の女性たちには大いに頑張してほしいと思う。

老後は豊かに——私のプラン

東京都目黒区 紅露 操子（50歳）

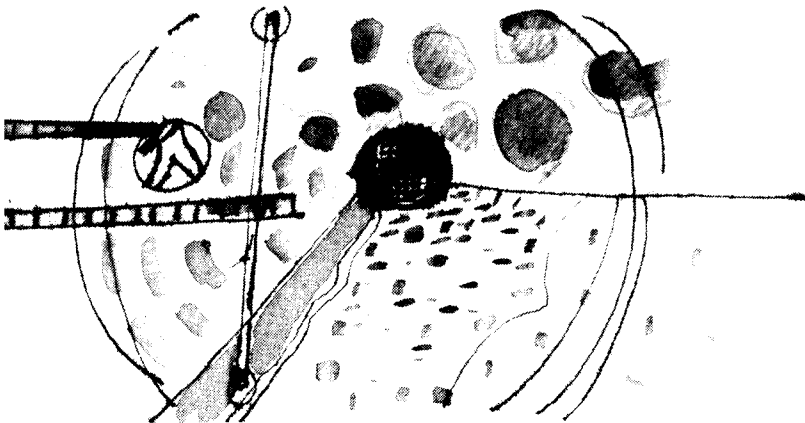
先日「変わる女性・変わる家庭」というトークインに出席して、これまで頭の隅でボンヤリと考えていた老後へ向けての生活設計が決まった。

きっかけを与えてくれたのはパネリストの一人、朝日新聞編集委員の下村満子さん。下村さんは十歳のときから「家庭と仕事を両立させる」とまわりに言っていた（お母様が医師であられ、その影響大の由）ハネムーンの翌日から当然のように出社したとか。アメリカへ単身赴任し、ニューヨーク発の記事を書いていた方である。男性と伍して時代の最先端の仕事をし続けてきた方であればこそ備わった、溢れんばかりのエネルギーと自信、次々ととはしり出る言葉は生命を持つかのように私の心をゆさぶった。

「今、女性が変わる（変えられる）それが家庭を変える」というような悠長なと

きではなく、日本が、いや世界中が、文化が科学が（科学も万能ではない、公害等）経済が（日米貿易摩擦、円とドルの逆転等）政治が（米・ソ・日・中相互の関係）刻々に変わっている。まさに予測のつかない激動期にあり、あらゆるものが見直されている時代に私達は生きている。

技術革新にともなって女性の労働力が求められるようになり、女性も多様な生き方が可能になった。不十分とはいえ社会的条件も整い、家庭においても家事の電化、省力化が進み、家族構成の変化によって外に出やすくなった。女性も自分の道を選択することができるようになった。その代わり自分の生き方に責任を持たなければならない、誰のせいにもできない、これからは決して自己弁護の時代ではない、たいへん厳しい時代になるとの要旨であっ



た。

現在とは比べものにならない時期から、自分の信念と責任において進む道を選んだ女性の見事な生き方を目の当たりにして、十年後の自分が生き生きと心豊かに暮らしていられるために、まだ活動できる今こそ、新しいスタートをきることを決心した。

その姿は心身ともに健康で、心の友とともに、社会人として経済的にもある程度自立して豊かであること。(自分がそうであれば家族も同じ状態にあると思う) ●心身の健康はごく当たり前に、規則正しくバランスのとれた食事と適度の運動

と趣味(洋裁を少々たしなむ)を持つこと。

●自立した社会人となるにはつねに社会に目を向け、また「わいふ」を通じてまずふれあいを深め、人間性を高め、心の友をふやしていきたい。皆様よろしくお願ひします。

●経済的自立 これが一番むずかしい。三年ほど前から無理をしないで収入をと、ポツポツ始めた仕事に本気で取り組み、絶対に成功すると確信している。具体的な目標を作り、地道に努力して少しずつ収入をふやしながら、仕事を通じて信頼し合える真実の友をふやしたい。家庭で

の責任もはば果たし、健康で自由に動ける今が最後のチャンス、今からの十年の生き方がそれ以後の私のすべてを決めると自覚した。理想の姿を実現できるかどうかのカギを握るのは最後の項目である。後になってホゾをかまさないよう、私なりに選んだ道の第一歩をしっかりと踏み出そう。皆様はどんな道を選ばれますか。二〇三号の窪田潤子さん、自分の食い扶持ぐらいいは自分で稼ぎましょう。

(え・岡田正子)

いま、心をみなおすとき……
現代心理学ブックス
新書判/定価各680円

離

☆危機はいつ訪れるか

婚

大宮録郎 著

ケース22からの考察

現代の変容する社会情勢の中で増え続ける離婚の諸相を主要な原因別に追及し、家裁調停員の経験と社会心理学的知見からその実相を解明する。

既刊81冊

愛着の発達

繁多 進 著

いじめから学ぶ

江川 玫成 著

性役割の心理

東 清和 著
小倉 千加子 著

母子関係の心理学

依田 明 著

親と子のカウンセリング

水島 恵一 著

大日本図書

〒104 東京都中央区銀座1-1-10
TEL 03-5611-8670

条件を探る ②

まとめ 佐藤詔子

■私が夫を選んだのは、性格が気に入ったから

Q あなたが現在の夫を選んだ主な理由をお聞かせ下さい。

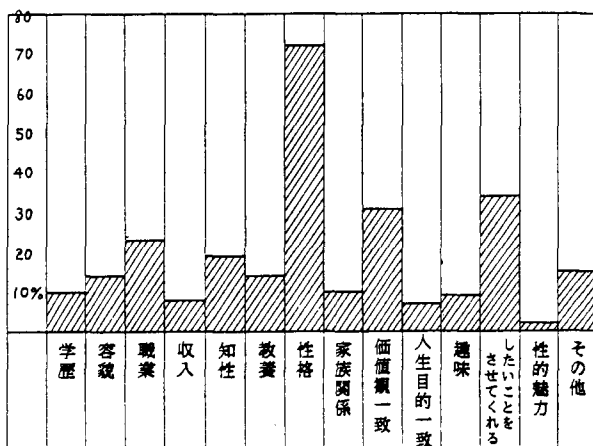
学歴 容貌または身長 職業 収入 知性 教養 性格(どんな?) 家族関係 価値観の一致 人生目的の一致 趣味の一致 自分のしたいことを認めてもらえる 性的魅力 その他

(問は三つをえらび、重要な順に番号をつけることになっていたが、一つや二つ〇をつけたり、番号なしが多くあったりで、順序に関係なくすべてを数えた)

「成功組」ほど多く選んだのは、「性格」「人生目的の一致」で、逆に「失敗組」になるほど多くなるのは「学歴」「容貌」「職業」などであり、他は成功、不成功との関連性がはっきりしない。

全体のグラフを見てみよう。群を抜いてトップなのが「性格」である。次に「したいことをさせてくれる」。

夫を選んだ理由 (図 12)



とを認めてもらえる「価値観の一致」が続く。

「学歴や収入なんか問題ではないの。趣味や



アンケート● 結婚成功の

A	やさしい 包容力がある 思いやり 寛大	弱い人に暖かい めんどろみがよい 友だちを大事にする 私を思ってくれる		
B	明るい 大らか 楽天的	ユーモア 円満 温和	ゆったり おしゃべり のんき	社交的 楽しい さっぱり
C	誠実 まじめ 正直	無口、静か かざらない 泥くさい	努力家 慎重 責任感	堅実 素朴 良識的 よく気がつく 素直
D	たよれる 決断力がある 信念がある	実行力 強さ 強い意志	信頼できる 常識豊か 不条理と闘う	
E	女への偏見ない 意志（意見）を尊重してくれる 自分を主張できる	フェミニスト 押しつけない 束縛しない		
F	理性的 合理的 情熱的	ユニーク 強引 好奇心がある	自分に合わせろ	

どんな性格がえらばれたか？

(図 13)

人生目的が合わなくてまあいいわ。何
といってもあなたの性格が気に入った。それ
に私のしたいことは認めてくれるしね。ぜい

たくは望まないから、お互いにそれぞれ楽し
めて、大事なところだけ価値観が一致してい
れば、それでO・K——そんな声が聞こえ

てきそうである。

その「性格」とは、いったいどんな性格が気に入って選んだのであろうか。記述されたものをみると、だいたい六つのグループに分けられる。

A・B・Cともほぼ同じパーセンテージで、その中でも特にAグループの「やさしさ」は、

	1 位	2 位	3 位	4 位
20代	性 格	価値感一致	したいことを認めてもらえる	収 入 教 養
30代	性 格	価値感一致	したいことを認めてもらえる	知 性
40代以上	性 格	職 業	したいことを認めてもらえる	知 性
全体	性 格	したいことを認めてもらえる	価値感一致	職 業

年代別・夫をえらんだ理由 (表2)

何といっても一番の魅力であるらしい。それに準じた言葉も含めると二四%にもなる。

Aグループとはほぼ同数のBグループ、明るく太らかで、のんびりゆったりとおしゃべりを楽しむ、そんな友達夫婦を望んでいるのであろうか。

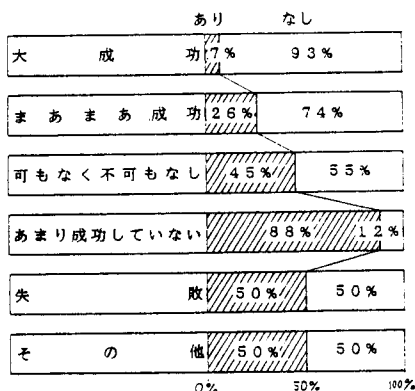
美智子妃が皇太子を称した「ご誠実な方」も、まだまだ健在。何十年前前であれば、かなり重要視されたであろう、強くて決断力があり、頼りがいのある夫像は、「やさしさ」の前では影がうすくなる。

見落としてならないのがEグループ。「こ

婚前交渉と婚外交渉

Q 婚前交渉（夫以外の人）の体験
あり なし
Q 婚外交渉の経験の有無
あり なし

夫以外の人との「婚前交渉なし」と答えたグループが、だんぜん成功組に多い。「大成



婚前交渉 (図14)

の相手は、女性への偏見がなく、妻を一人の人間として認めることができ、他人の意見をも尊重し、自分を押しつけてばかりはこないであろう」そう思ってた夫を選んだ人たちは一〇%にすぎないが、一人残らず、結婚に失敗していない。

年代別に見てみよう。(表2)

四十代以上では「価値観の一致」に代り、「職業」が大事な条件になってくる。結婚することによって、まず経済的にも社会的にも安定をはかりたい、そんな永久就職的願望がはっきり表われている。

功」では九三%、「あまり成功していない」「失敗」の平均が三一%。結婚そのものに対する、また結婚相手に対する慎重さ、健全さが成功へとつながってくる——と考えていい

■不安いっぱい飛びこむ結婚

Q あなたは結婚するとき、夫について不安だった点がありますか。(いくつでも選んで下さい)

職業の将来性 収入の少なさ 性格 フ
イーリングがあわない 外観が気に入ら
ない 家族関係が煩わしい 健康 人生
観、価値観がちがう 仕事本位でかまっ
てもらえなさそうだ 自分のやりたいこ
とができなさそう 亭主関白になりそう
その他

「不安は全くなし」で結婚したのは、全体で
たったの十四人で一一% (図15)。

大成功組はやはり「不安なし」が多く二九
%。階段式に減っていった、失敗組はもちろ

だろうか。

婚外交渉に関しては事例も少なく、成功・
不成功との関連性はほとんど認められない。

不安な点 (表3)

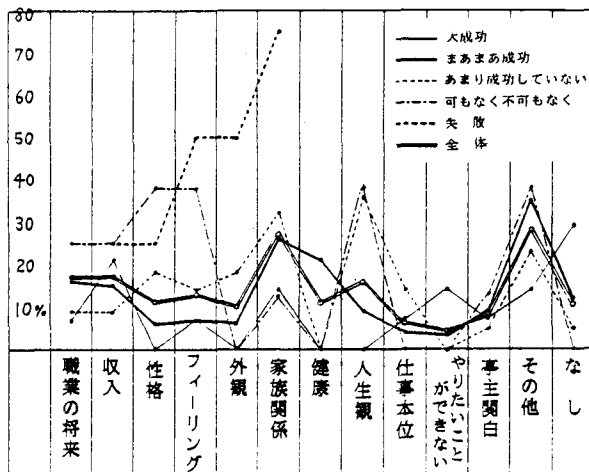
	1 位	2 位	3 位
大 成 功	な し	収 入	家族関係 やりたいこと ができない
ま あ ま あ 成 功	その他	家族関係	健 康
可 も な く 不 可 も な し	人生観	家族関係	その他
あ ま り 成 功 していない	人生観 フィーリング 性 格		
失 敗	家族関係	外 観 フィーリング	性 格 収 入
全 体	その他	家族関係	収 入

んゼロ。不安要素をかかえる割合が多いほど、
やはりそれが現実へとつながってくるのであ
ろうか。

全体として、不安要素を多い順にみると、

不安な点

(図 15)



「その他」を除いて「家族関係が煩わしい」
「収入の少なさ」「人生観・価値観がちがう」
「職業の将来性」と続く。(表3)
それにしても複数の不安な点をいだきなが

ら、しかも「人生観・価値観がちがう」「フ
ーリングが合わない」また、選択肢以外に
書きこまれた不安点「あまり好きでない」「い
つまで夫への愛情が続くか」「愛していない

5・結婚後の状態

■努力と結果は比例しない

Q 結婚後、夫婦間を密接にするため、
いろいろな努力をしましたか。
大いにした 少しいた 全くしない

Q どんな努力をし、その結果はどうで
したか。

よりよい夫婦でありたいと、何らかの努力
をしたグループが全体の七八%、しないグル
ープが二%であり、程度の差はあれ、四分
の三強の人たちが、夫婦のコミュニケーション
を密にするべく努力をしている。(図16)

のに」などと思いつつ、どうして結婚ができ
るのだろうか。これから二人で新しい人生を
築きあげていこうとするそのスタートライン
においてであるのに。

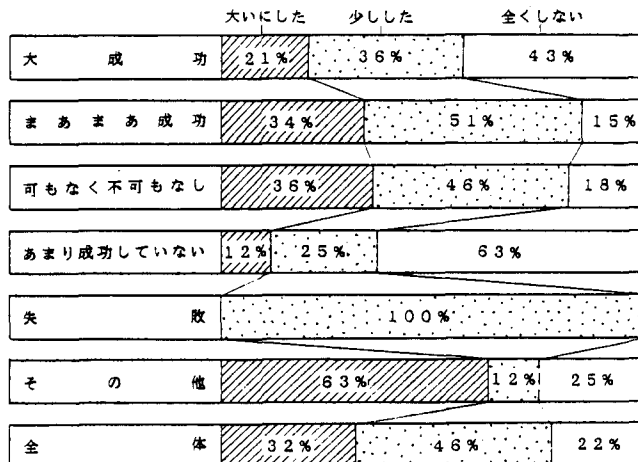
ただし「努力をしない」意味合いが「大成
功グループ」と「あまり成功していないグル
ープ」ではかなり違ってくる。前者は「必要
がなくてしない」であり、後者は「やる気
もなくてしない」のである。

そして努力をしたから、結果として全てよ
い方向に向かったとは限らない。当然「失敗
組」は全員が多少の努力をしたにもかかわらず、
全く報われていない。

■とにかく話そう、話しあおう、大切な夫婦の会話

ではどんな努力をしたのだろうか。記述さ
れたものから多い順に拾ってみよう。
1・会話の時間を多くする。

努力と結果 (図16)



一方的に妻のみが語りかけても夫のほうに
も積極的歩みよりがなければダメ。四六例中
七例は「のれんに腕押し」型。言いたいこと

をはっきり言い、けんかをしても、とことんやりあうほうが結果的にはよい。若い世代はど遠慮せずに自分をさらけ出し、ぶつけている。もちろん相手の話も聞く。その結果として、「家事分担をしてくれるようになった」「自分がやりたいことをやらせてくれるようになった」「夫婦間の決まりを作った」など成果が多い。

2・夫とぶつからないよう、夫の気に入るようにあわせていく。

具体例をあげると

・夫の気が向いたら、いつでも出かけられるよう準備をしておく(二〇代)

・徐々に事を運び、直接的な行動に出ないように(三〇代)

・夫の趣味につきあう(四〇代)

・できるだけ夫の考えを最優先(四〇代)

・主人のいやがることを避ける(五〇代)

・表面は夫の言いなり、みづからめよう仕事した(五〇代)

・夫に従ったほうがうまくいくと考えた(三〇代)

・夫の希望を入れ外では働かず(四〇代)

・夫に尽す(四〇代)

・イヤなことは聞かせない(五〇代)など。

このタイプはやはり四十代・五十代に多く結果として「女は損だ、という気持ちがずっと消えず」「内面で夫への不満をもつようになった」など、あまりうまくいかなかった例が半数もあった。

3・健康管理をし、心をこめた食事を作り、家計のやりくりをうまくし、夫の身の回りの世話をする。

努めて主婦業に精を出すこのタイプは、すべて結果も上々であると自負している。

4・共通体験、共通目的を多くもつようにする。

テニス、ドライブ、ショッピングなどを一緒に。旅行、スキー、映画、外食など夫婦だけの時間を作る。会社設立のために力を合わせる。動物を飼い植物を育てる、など。

5・いつも笑顔で、相手に思いやりを。相手を許し、傷つけないように。

6・伝言板や手紙を使って、意志のやりとり

をする。

五位、六位は少数であるが、結果もよい。以上のように、いろいろと努力はしてみたが、それが実らなかった場合(努力をしたうちの二二%)「お互いに個人の生活には立ち入らないほうがいいのではないか」と考えたり、「自分の世界を外につくることで一時休戦」をしたり、「全くバラバラで、お互いに相談することもなくなる」「意見が合わず、相談にもならず、昔のボーイフレンドと婚外交渉もまじか」など、夫に背を向け始めた、あきらめ顔の、または開き直った妻たちの姿が見えてくるのである。

——つづく——



オットどっい

粗大ゴミ予備軍の生態記録をとろう！

夫婦で会話を

長野県 島山 徹子

二〇五号の「会話のないわが家」の田代さん、どこの夫婦も同じですね。私たち夫婦も会話のなさでケンカします。夫たちは妻がどんなに楽しい会話を望んで

いるか知らうともしないのですね。この世の中で一番心許せる人なのにさびしいと思います。

新婚のころはあまりの無口さに私は泣いてしゃべってくれるよう頼みました。私はたくさん、たくさん話すことがあり、社会の出来事、友人、人生観など一方的にしゃべってましたが、「静かにしてくれない」とか「そんな話ききたくない」とか言われ、なんて夫婦なんだろうと一人涙流したものでした。それでも子供が二人でき、子煩悩な夫は子供には話しかけています。

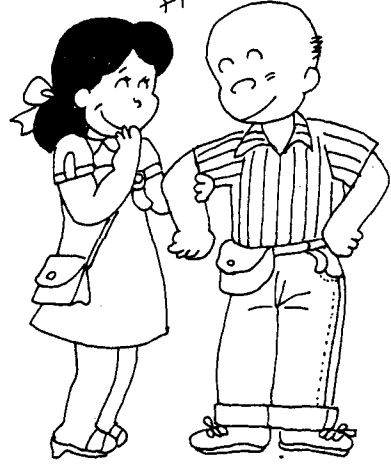
結婚して五年も過ぎると何でもやりたがりでたがりの私は、夫の無口、無関心をいいことに家事そっちのけ（私はそうは思っていないが）で好きなことするものだから、ときどき怒られます。この間言っていました。「怒るときはしっかりしゃべって、もっと他に言うことあるでしょう」と。

このごろは無口にも慣れ、お互いに干渉しあわずに気楽に暮らしています。日曜など遅く起きてきて、「オイ、メシと言うのも面倒くさいらしく、自分で台所に立って作っています。こりゃ、食事の心配しないででかけられるとうれしく思っている最近です。

夫の無口をテーマにノンフィクション小説の一つや二つ書けそうですが、考えようによっては、無口とおしゃべりだらうまくいっているのかもかもしれません。しかしまだ私は夫婦の楽しい会話への夢はすててはいません。どうしたら楽しくなるか明るく考えていこうと思っています。

老夫婦、若返ろうと 思ったが

東京都田無市 法村 祐子



「お母さん、ただいま」と、夫の声。
「お帰りなさい。お疲れさまでした」
「ああ、疲れた。つかれた。ねえ、お母さん、これから僕のことを博人^{ひろと}さん、と呼んでくれないかね」
「ええ、どうして？」と私。「ウン、実は今日ネ、家で、あんたが僕のことをなんと呼ぶか、と聞かれたから、博人さんと呼ぶと言っちゃったんだ、だからそう呼んでもらわんと困るんだよネ」
「あらそう、じゃあ、私のことはどう呼

ぶんですか？」「そうだねえ、祐子さんと呼ぼうか」
「でも変ネエ……」「じゃあ呼んで見ようか」「博人さん」「祐子さん」と呼び合って、二人で顔を見合わせて、アッハハハハ。
「矢っ張り変だねえ」「ウン、まあそのうちになれてくれば、変でもなくなるでしょう」と言ったのに、その時だけ、あとは元のままで相変わらず、お父さん、お母さん。
(え・小宅昌枝)

★わいふバックナンバー

- 176号 わたしの恋愛体験
- 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
- 184号 私の災害体験
- 186号 お医者さんを診断する
- 191号 集合住宅で生きる
- 193号 学校教育への疑問
- 195号 特集なし(私の昭和史①)
- 197号 親があなたに伝えたもの
- 205号 ある日曜日・夫婦の会話

送料は一冊二〇〇円、二冊三冊二五〇円、四冊六冊三〇〇円、七冊九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。
tel(〇三)二六〇一四七七・四七七三

投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶったまげた・頭にきた・ジーンときた

エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

なつかしいひと

東京都葛飾区 佐野美智子

「素敵なお洋服ですね」

幾度となく新幹線に乗る私だが、隣の人から声をかけられたのは、それが初めてだった。二十代最後の夏、バーゲンで買ったばかりのピンクの花柄のワンピースを派手すぎないかと気にしながら着ていた私は、それを認めてもらって、素直に嬉しかった。

新幹線は、東京を出て三十分ほど走ったところ。ひざの上に小さなパンと豆乳を乗せた、その婦人の親しみやすい品の良さに、私の気の重さも少しずつ晴れていくようだった。

私は、友人のお母さんとでも話しているような気分で、聞かれるともなく、結婚二周年を迎えようとしているのに、まだ

子供に恵まれないことなどを話していた。お盆に親せきが集まったときに、皆から何となくせかされそうなのもゆううつだった。

「二年できないくらいでは『不妊』とは言わないのかも知れませんが、年齢も年齢なので不妊検査を受けたんですよ。でも異常はなくて……。要はタイミングな

んでしょね」

「そうですか。それは大変ですね。私は反対にできやすくて。『パンツをはいてもできるんじゃない』なんてからかわれましてね」

その人が口になると、少しも卑猥ではなく、明るく笑えてしまうのだった。

「最初の子は男でしたけど、私は女の子がほしくて。次に女の子が生まれたときは嬉しくて嬉しくて。長男に『お母さんそんなに女の子が生まれたのが嬉しいの』って言われてしまいましたの」

同じく女の子がほしい私は、ほほえましい光景を想像しながらうなずいた。

「今は、長男は社会人で、独立して家を出ていきました。主人はボーイスカウトの世話に夢中。子供が好きなんですね。自分の子供はもう大きいのに。私は一人でつまらないので、名古屋の妹のところ遊びにいらいますの」

私は、こんなお姑さんとなら楽しくやっていけそうだな、などと思いつつながら、

ふと、

「娘さんはどうされているのですか」

とたずねた。すると、思いがけない言葉が返ってきた。

「なくしましたの」

私は、とっさにはその言葉の意味がつかめなかった。

「生まれつき心臓に欠陥がありましてね。寝たまま、歩くこともできなかったんですよ。四歳までしかだめでしたの」

私は、この穏やかな、少女のような雰囲気を持った婦人の胸中に、そのような大きな悲しみがあったとは、にわかに信じられないような気分だった。

しかし、徐々に、その娘さんの死が、この人にこんな透明感を与えたのだと思えてきた。そして、子供のない私には、子供を持つということの厳粛さを教えられた。

婦人は、しかし、特別の感傷に浸るふうもなく、次の言葉を残すと、温かく微笑んで、名古屋駅に降りていった。

「大丈夫。あなたもできますよ。できると信じることですよ」

「はい。できると信じます」

何故か私は、心からそう言わずにできた。あるいはどこかで予感していたのかも知れない。実は、そのとき、私の体には、小さな命が宿っていたのだから。

それから三年。息子は二歳を迎えたばかり。ワンパク盛りの反抗期。私は朝から大声を上げてばかり。元気が何よりとは思うものの、追いかけて回して、相手して、心身ともにくたびれて一日が終わる。今年も、もうすぐお盆。また、息子の大好きなシンカンセンで里帰り。もしも、再び、あの婦人に会えるなら、伝えたい。「お蔭様でこんなに元気な子ができました。そろそろ次の子がほしいのですが、できません。でも、次は絶対女の子がほしいと思っています。おとなしくて可愛い女の子が」

ミルクとクリームソーダの話

東京都武蔵野市 入間田礼子

「ちよつ、ちよつと待ってね、替わるから」

朝食の準備をしかけていると、秋田の従妹から電話がかかってきた。型通りの元気だの誰それかわりないだのと喋って、慌ただしくその娘の和代と替わると言うのである。

「おばさん？ 朝からすみません。七時なんぼの汽車で東京に行くの、あたし」

「えーっ？ きょう？」

「ハイ、すみません。夕方着くので、今晚泊めて下さい」

「泊まるのは良いけど、どうしたの急に」
「やっぱり看護婦学校受けることにしたのオ」

「そう、ま、話は来てからとして、ウチまで来られるわね？ 迎えに行かなくても……」

「ハーイ、母さんも一緒だから……じゃア」

若くして夫を亡くした従妹は、和洋菓子の製造、卸、小売りまでの天晴れ社長だから、上京は始終で、その都度一泊は我が家である。

二階を二人寝られるよう片付け、寝具を陽に当て、献立も一品増やそうかななどと忙しい。

母親同士が姉妹で、従妹とは年も近いしで、姉妹のように育ち、互いに子連れで泊りあうので、子供達も兄妹のようなのである。

夕食の後で改めて聞くと、願書締め切りの間際になってその気になったとかで、「学校の場所もなんも見えないのよ、だから一日早く来て、明日見に行こうかと思つて」

場所は渋谷の広尾だと言う。地図を出してきて頭を寄せる。私もつき合うことにした。

「帰りにね、原宿へ行きたいの」と和代がしゃらつと言った。東京に何十年も住んでいながら、例の、原宿は行つたことがない。

「原宿ね、行つたことないから分からないヨ」

「多分分かるヨあたし」と和代は澄ましている。従妹が注釈を入れてくれた。

「アンアン」とか「ノンノン」の類の雑誌で、地図も店も勉強済みだと言う。

「原宿が主で学校がついでみたいよ、全く……」従妹は和代を横目でにらんだ。

翌日、無事学校の所在を確認し、いよいよ原宿である。タクシーをつかまえると助手席に収まった和代は元気一杯。



「ねえおじさん、原宿行って、クリームソーダ行って！」「クリームソーダねえ、クリームソーダは知らないナ、ミルクじゃだめ？」

何を二人でふざけている。和代も和代なら運転手もいい年をして何言ってるのかしら。「クリームソーダのほうが私の好きなのよ」と和代。「何なの。そんな特別なクリームソーダがあるの？」途端に車の中は笑い声で一杯になり、私だけ

がキョトンとしていた。

「あたしもね、和代に聞いて笑われたの、クリームソーダもミルクも店の名前なのよ」

オリジナルのTシャツ、靴下、靴その他もろもろの若い人向けの店だと言う。

「全く人騒がせな店ですよ」運転手氏が気の毒そうに私をふり返った。

「ミルクでも何でもその辺で止めて、あと探すから」和代の言うままに降りて

ついて歩く。大人にはまだ寒い街の春気分の若者たち。

目指すクリームソーダを見つけ、和代が弟や友達、先輩に頼まれた物まで買う間二人で辺りをぶらぶらする。店頭の衣類もさりながら、さまざまな人種が好きな勝手な格好である。

野良着の重ね着風、裏返し、後ろ前、片袖だけ腕を通す、ウェストの上で切ったセーター、「あれあれ」目で教える彼方からロングスカートの裾を二十センチぐらいズボンふうに縫い上げ、ヨチヨチ歩くお嬢さん。何のことはない、おむつのずり下がった赤ちゃんである。

漸く出てきた和代の横を赤い車が徐行した。ボディの文字を見て三人同時に言ったものだ。

「あつミルク」「ほんとにあるのね、ミルク」

原宿駅は……私の脇をすり抜けて和代が言った。「駅？ こっちよ、おばさん！」

男友だち

東京都品川区 椿 芳 子（64歳）

NHKの銀河ドラマ「友だち」は毎回かかさずみては一人で感動していた。男と女の友情はなりたつかというのがテーマであるが、戦中派の私にとっては、それはひとつの願望でもあったからだ。

現在六十四歳、堂々と友だちといえる男性を持つことに一種のためらいとはじらいがある。一対一のつきあいはもったことがないのだ。周囲には誰かがいて一対一は夫以外にはない。

ところがである。私が毎月一回吉祥寺

に詩の勉強会に行くが、そこにたった一人、男性が加わっている。合評の際の発言が控え目ではあるが、的確で、男性の目の確かさに敬服する。帰途渋谷までは方向が同じである。文学や本の話となると二人はいきいきとしてしまう。ツートえばカーというように通じあうものがある。

私は夫には作品を見せたこともないし、そのことについての話しあいは持たない。彼も妻とは趣味の話はしないそうだ。

何かのはずみで私より一歳下であることがわかった。「僕よりお姉さんだ」私のことをそういう。一つ上というだけで心安くつきあえそうだ。まるで少年、少女にかえていきいきとしてくる二人。

彼はシベリア帰りである。作品にはシベリア体験のものが多く、私の夫もシベリア帰りなので、作品そのものに対して親しみを覚える。ところが作品にはくらしというものが無い。からっとしているのだ。年月がすべてを浄化させたものか。戦争の中に青春を生きたが故なのだろうか。

彼も「友だち」をみているようでそのことが話題になる。戦中派は男女間の交際もひっそりとそれこそ人目にふれることがタブーのような状態であったから、異性に対してのあこがれはひとつの夢で



すぎてきたように思う。

それだけに彼の作品には愛をうたうものがみずみずしく青年のようだ。青春をずっと胸に抱いたまま私もすぎてきたように思う。「奥さんはまるで少女みたいだ」と夫の戦友達は私を評する。気持ちだけは少女のころの夢を追っている私なのだ。それだけでなく詩を作れはしない。彼はあくまでも友だちである。友だちといえはかつて子供のPTAで私ははじめて異性の友だちを持った。私はそう信じていた。

子供の担任が男性の教師だった。たまに、その先生が広報のTの副部長で、



その先生のたつての頼みで私はPの部長を引き受ける羽目になった。Pの副部長と私とTの副部長とは気が合って、はじめての体験ながら広報の仕事は家庭から私を解放して充実した日々だった。彼は私より三歳下だった。そのことが気楽であつたはずだった。

商店の広告取りから割り付け、校正などすべては彼の指導で本印刷の広報便りは校長に賞められるほどの出来栄であつた。

夜の会合でもPTAというと夫は気持ちよく出してくれた。彼から電話がある

がら受話器を私に手渡す。私がいきいきと立ち働き、家事も手抜きせずすることに夫は安心しきっていたのだらう。

私にとって夫以外の男性と気軽に話し合える友だちはまたあたらしい世界をひろげるものだった。社会への目をひろげてくれたのも彼だった。わずか一年で転任していった彼は、子供の結婚式のおりスピーチで娘と私とを賞めたが、私にはその言葉が涙の出るほどうれしかった。あとでPTAで二人の仲が噂的になっていたのを知った。男と女の友情のなり立たぬことを味わった。それも年齢にもよるものなのか。

六十をすぎた現在、趣味を通しての友情はゆるされていいのではと思う。人生の終えん間際、心と心の結びつき、そのことが生きることへの喜びにつながるような気がする。私はいま、友だちとなつた彼の存在が大きな力になっているようだ。

かめさんの願い

香川県小豆郡 広瀬サカエ

京都国立博物館の常設館には、古代の出土品が多数展示されている。その一角に九州で発掘されたという、人を埋葬するときに入れた素焼の甕がいくつか並んでいた。それらをみているとき、突然、私はかめさんのことを想い出した。かめさんはこんな甕に入れてもらいたかったに違いない。

かめさんは私が子供のころ家の近くに住んでいた。年のころは六十ぐらいであったろうか。毎日布袋を手首にひっかけて、私の家にその日に食べる米やその他の食糧をとりに来た。敗戦からまだ幾年もたっていないくて、食糧事情が極端に悪かったころのことである。

かめさんは食糧がある間はいくらでも食べるので、次の配給日まで食べ延ばす

ことができないのであった。

私の父が、当時は何といっていたか知らないが、今という民生委員のような役をしていたので、身寄りのないかめさんの面倒をみていたのだろう。

着物に兵児帯といういでたちで、坊主頭を斜め前に突き出し、上体を前方に倒すようにして、セカセカと歩を運ぶさまは、おおよそ名前とは似てもつかぬ歩き方であった。

いつか兄が私に聞いた。

「かめさんの、ほんまの名前を知っとるか」

「知らん」

「松原亀太郎というんだぞ」

「ウー、すごいいい名や」

兄は自分が名付け親でもあるかのように威張って言い、私はその名があまりに

も上等なのに驚いた。

ある日、かめさんは手首から血を流しながらやってきて、「○○が石をブツつけた」と、涙を浮かべて家にいた祖父に訴えた。

「よし、あとでわしが叱ってやろう」

「モシモシかめよ、かめさんよ」と悪童連がはやしたてているのを、私も見たことはあったが、ひどいことをするもんだ。

夜になってもかめさんが食糧を取りにこないで、家の誰かがみに行くと、「しんどい」といって寝ていると言う。母が食事をつくって持っていった。

かめさんがふせていたのは、ごく短い期間だったように思う。

「オラが死んだら熱くないように甕に入

れて焼いておくれ」と言い遺して、近所の人々が見守る中で息をひきとったという。

かめさんの家のひとつだけしかない出入り口に、地区内の人達が集まっていた。その間から家の中を覗くと、せまい部屋に数人の人が座っており、その真ん中で父がお経をあげていた。それは聞きなれた私の家の宗派のお経だったので「なかなかうまくやってるナ」と思いながら聞いていると、

「ああ、間違えました。もう一ぺん、はじめからやります」と大真面目で言っている。自分の家のお経を間違えるくらいだから、父はあまり信心深くなかったのだろう。かめさんは三途の川を一服しながら渡ったに違いない。

お経が終わって棺桶に収まったかめさんが、駕籠のように前後を二人の人にかかれて、家の中から出てきた。

「ああ、やっぱり甕に入れてもらえな

ったのだな」私はかめさんが気の毒になった。土葬ならともかく、いくらかめさんの願いだとしても甕に入れて茶毘に付すなどということはできる相談ではなかったのだらう。

乾いた白い道をかめさんの棺は人々にかわるがわるかかれながら、火葬場のあ

る共同墓地へと向かった。

その後長い間、私は共同墓地に煙が立ちのぼるのを見るたび、手首から血を流しながら涙ぐんでいたかめさんの目を想い出し「熱い熱い」という声が聞こえてくるようで胸をあつくした。



ベゴニアの花



去年の春買った一鉢のベゴニアが、一年の間私の目を楽しませてくれた。小さな苗だった株が、春、夏、秋と過ぎるうちに鉢にはみ出すほどの葉を茂らせ、赤い可憐な花を次々に咲かせた。

寒い冬にも衰えることもなく青々と育

ち、花を咲かせては散ってゆく。ベゴニアは、花が落ちると直ぐその下に新しい蕾を持っていて、花の絶えることがない。草花を育てる事の下手な私でも、水さえ絶やさなければよいので、冬の間に室内に置くが、日中はときどき陽に当てるためバルコニーに出してやる。

鉢を出したり入れたり、冬の日課の楽しみの一つにしていたが、その花も、四月の声を聞くと、生き生きとしていた葉先は艶を失って茶褐色に変わり、花は咲いても淋しげで、女性に譬えたら、華やかな青春が過ぎてゆく時期に入るのだらう。このころ葉先を切り払い、あるいは地面に植え替えてやったら、根を張り、新しい生気を吸い取って、夏が来れば再び花を咲かせるのだらうけれど、残念ながら大抵一年で枯らしてしまう。

東京都江戸川区 荻田一枝

二、三日間、私はまた二株のベゴニアの苗を買ってきた。若い苗は瑞々しく、葉の間にピンクと赤の花が幼子のように愛らしい。ベゴニアはこの花屋にも売っているし、値段も安く、私にとっては手ごろな買い物だが、そればかりでなくこの苗を手にするとき、私の胸にはいつも彼女とともに歩いた横浜の街角の姿が、彷彿と蘇ってくるからだった。

彼女とは小学校も女学校も同じ学級に学んだ幼なじみで、ともに文学を愛した親友なのだ。学校を卒業すると互いに、二十歳というその時代でも早婚な結婚生活に入り、彼女はご主人の勤務地の西宮へ、私は五年後、夫とともに大陸へ渡っていった。日本の国が総て戦争という思まわしい時代に入り、二人の間にも長い空白があったのだが、その間、彼女は作

家として幾つかの作品を文学誌に発表していた。彼女と再会できたのも二十三年二月、彼女の書いた「煙草文学」というエッセイが新聞に載っていて、偶然私の目に留まったからだ。大陸から引き揚げて、心身ともに憔悴しきっていた私に、その文章は懐かしさと羨望の思いで胸を打った。

翌年の六月、横浜開港記念の祝日、彼女は西宮から、私は東京から、二人が生まれ育った思い出多い横浜に誘い合わせてやってきた。戦災で幾人かの友達を亡くした中で、互いの無事を確かめ合い、烈しい爆撃の中にも焼け残った海岸通りの古い倉庫の建物の間を、肩を並べて歩いていった。ニューグランドホテルの前の舗道の街路樹は青葉が匂うように茂り、遙か彼方に外国船の浮かぶ山下公園をそぞろ歩きながら、学生時代の昔にかえて再会を喜び合ったものだった。

私はその公園で店を開いていた花壇園で一鉢の花を買い求めた。彼女はその花

はベゴニアで「花もちがとても良いのよ」とも教えてくれた。迂闊なことだが、私はそれまでベゴニアの花を知らなかったのだ。可憐な花に魅せられた私は、毎年花屋の前を通ると買ってきて育てるようになった。

彼女の計報を知ったのは四年前、読売新聞の計報欄だった。体の不調なことは年賀状で知っていたが、一瞬息を吞む思いでその記事を読み込んだ。病名は結腸ガンだった。「人魚」「青い部屋」などの作品を出す一方、昭和二十九年から読売新聞（大阪）婦人面の「人生案内」を約二十七年間担当したとも書き添えてあった。その夜、私は涙を拭きながら喪主のご長男にお悔みの手紙を書いた。

近ごろ少しでも書くことに親しむようになつて、彼女が健在だったなら何らかのアドバイスを受けられたらうにと、青葉茂る横浜の初夏の街を、今再びともに歩むことができたらしめしみ想う。

（え・カステラネンコ）

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 事↓こと 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで etc

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変（わ）る↓変わる 浮（か）ぶ↓浮かぶ 話（し）合↓話し合う 気持ち（ち）↓気持ち 行（な）う↓行なう 表（わ）す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお願い致します。

投稿ホットライン——百聞は一見に如かず

観たり聴いたり

「プラトーン」を観た

香川県丸亀市 山田 幸子



「地獄の黙示録」とはまた異なる視点からベトナム戦争をとらえたこの映画は、ぎりぎりのところで「アメリカ」を救済してみせ、やはりアメリカ側から描かれたベトナム戦争にかわりないことを証明した。

泥と汗と湿気と雨のジャングルの中で、いつ敵と出会うかもしれない恐怖とともに、神経を張りめぐらせていなくてはならぬ緊張感。これが戦争なのだ、近代的武器で戦っているようでも結局は肉弾戦なのだ。相手を殺さねば自分がやられるというぬきさしならぬ事態

なのだ。

現代の戦争が、あのジャングルでの接近戦のような様相を呈して、過酷な自然条件のもとで戦われるうちに、味方であるはずの同僚の中に敵が見えてくるようになる。それはとりもなおさず、「敵は我々自身の中にいる」というクリスの独白に表される現象だ。

だからこの映画は、ベトナム戦争の是非というより、エリアスとバーンスの対立に象徴されるように、ベトナムの戦場であぶりだされた人間の理性と狂気、愛と憎悪の実相を描いてみせたといっている。

その意味で、アメリカ対ベトナムという従来のベトナム戦争の構図から、アメリカ側を断罪した矢野暢氏の映画評（六月十九日付朝日新聞）は、私には的はずれとは思えなかった。

氏は、戦争の中で行なわれる虐殺や強姦という犯罪がアメリカ軍の側にだけ発生し、敵が味方の中に見えてくるのは、この戦争が正当性のない戦いだっただと述べている。

だが、ベトナム戦争の真実はベトナム側から見たベトナム戦争と



いうものが出てこない限り断定はできないし、氏の意見は局外者だからいえる一見「公正な正論」にすぎないと思う。

今は、この映画を世に送り出したアメリカの勇氣にただ驚嘆するばかりだ。(写真提供・ワナー・ブラザース映画会社)

「矢沢永吉ロックコンサート」

千葉県千葉市 高木 百合 (37歳)

文化会館の前に着くと、車、車、車、バイクの列。平均年齢二十歳の若者達が、うわーいっている。暴走族的なグループもチラホラ。黒に、ショッキングピンクで矢沢

永吉と背に書いた、キョンシーまがいの服を着ている女の子たち。髪にもショッキングピンクのリボンがフワフワ。チョット場違いな所へ足を踏み入れた状態。「ヤバイノ、しまったノ」横須賀支部なんて字のはいった親衛隊らしき男の子の集団。原色のハチ巻きをして、矢沢グッズのバスタオルを肩にひっかけている。

前から十七番目、右側よりの席。

両隣はどんな人だろうと少々心配だったが、左は大人しそうな背の高いフツウの青年。一人で来た様子。右は私と同年配の(ホッとする)何となく水商売風の男性二人連れ。スーツでピシッと決めている。

スモークな舞台の上にドラマやピアノが光っている。と、やにわに「エッチちゃん」パンパン

（手拍子）「エッチャンノ」パンパン、な、なんだ？ これは。これが永吉へのコールか？ 例のハチ巻き姿のお兄ちゃん達が会場の各所に散らばり、このコールを始めた。若いなあー、あー、エネルギーがあり余っているんだなあ。腕を振り上げ「エッチャンコール」が続く。（矢沢永吉がエッチャンと呼ばれているのをそのとき初めて知った）

文化ホールの三階席までびっしりの若者たち。ある者は、タオルを階上から幕のようにたらし、ある者は口笛を吹く。予定より二十分ほど遅れて、会場係が舞台の前と各所に立ち、コンサートで死ぬこともあるということが、この熱気で実感となる。

いよいよ開演。幕などないから、即、矢沢永吉の登場。ワッーという歓声とともに全員総立ち（私も



矢沢が見たいから立った）。「えーノ 立って聴くの？」と思っっている暇もなく、音楽と同時に手拍子が始まる。

そうか、ロック・コンサートというのは参加して熱狂するものだと気づき、私も立ったままリズムをとる。

ここはコンサート会場。家で一人テープを聴いているのとは違う。二分ほど醒めた感覚で、八分ほどでこの雰囲気は酔う。のってしまえば楽しく何ともいえない感覚だ。

ロックのリズムは私にもできる。毎晩テープで聴いているおなじみの曲が続く。会場の熱気は、ますます上がっていく。矢沢はGパンにTシャツ、素肌に白いジャケツト。カッコイイ。

全員総立ちの状態でも、ロックのリズムにのっていると何というそう快さ。しかも、バラード調の静かな曲になるとスッと着席するという暗黙の約束があるようだ。これなら矢沢のコンサートは安全

だ。会場がエキサイトしても、事故は起こらないだろうという予測がつき、ますます会場の若者たちの雰囲気は酔う。

ラストは、ミラーボールがキラキラ輝き、ライトは星のように流れた。コンサートは終わり、すっかり解放された気持ちになった。彼の音楽に出会えてよかった。また彼に会える日まで、グッド・バイ。

映画「サクリファイス」を観て

神奈川県横須賀市 松本 弘子

八十六年十二月末、肺癌にて五十四歳の若さで亡くなられた、天才映画詩人アンドレイ・タルコフスキが、「希望と確信を持って」

息子に捧げた遺作、死を前に渾身の力を振り絞って人間に深い反省

を迫ったという映画「サクリファイス」を観た。
スウェーデンの南、バルト海を臨むゴトランド島という静かな美しい島の草地で、主人公たる父親が、倒れかかっている一本の木

(日本の木と呼ばれていた)を起
こして石で固定させながら、幼い
息子に、枯木に三年間毎水をや
り続けた僧が、ある日ふと上を見
たら、花が咲いていて枯木は甦っ
ていたと話を聞かせ、何ごと
も思い続けていれば必ず目的は達
せられるものだと言るところから
物語は始まる。



果てしなく広がる草地の一軒家
に登場する四人の女性のなんとま
あ美しいこと。この世のものとは
思われぬような神秘性を湛えた
美しい情景が延々とくり広げられ
美しさに私はほーっとしたままで
あった。

白夜のその夜、一軒家のTVが
核戦争の非常事態発生を告げる。

核による滅びの予兆に主人公は、
私の持てるものすべてを捧げるか
ら、愛する人々を救って欲しいと
神に祈る。

一本の木に水を運ぶ幼い息子に
希望を託して物語は終わるが、
訪れる最後のとき、それを救う道
は自己犠牲しかないと思えられる。
愚かな人間が生き残る道は自らを
捨てることから生まれる希望で
あって、決して絶望ではないと励
まされる。

「人間は精神の偉大さを目指さな
ければなりません」というタルコ
フスキの言葉と、清らかに歌い
上げられるバッハの「マタイ受難
曲」が耳にこびりついて忘れられ
ず、私もまたひざまずいて、主人
公同様神に祈らずにはいられない
敬虔な気持ちにさせられたのであ
る。

(写真提供・フランス映画社)

「勝手にしやがれ」
数年ぶりの再公開!!



ジャン・リュック・ゴダール監
督、ジャン・ポール・ベルモン
ド、ジャン・セバール主演のフ
ランス映画の名作、八月中旬よ
り、東宝洋画系にて公開。
この機会にお見逃しなく!!

フランス映画社

投稿ホットライン——精神に何事か成る？

ナウい熟年

老いの入り口思案坂

東京都中野区 村田起久代

正直言って我が身の老いについて書くなんてまだまだ先のことだと思っていた。商売柄とはいえ、テレビに映る熟年女優のなんと若々しいこと、加えて世間ではヤング顔負け元氣印老人の話題に事欠かぬ。

大正十五年生まれの私めもかくありたい、人生すべて氣力の問題と最近までは思い込んでいたものだ。

ところがある。高齢化社会を目前に人間どもが悪あがきを始め、マスコミカ

らナウい熟年などと景氣づけられたところで、自然の摂理は間違ひなく忍び寄ってくるものであります。

ある本で「人生福祿寿が得られるほど幸せなことはない」と教えられた。まず寿というのは還歴をすぎるまで元氣に生きていられること。祿とは生涯食べるに困らぬこと。福というは子供や孫に恵まれてワイワイ騒ぐのを見られることだそう。曲りなりにも現在の私にはこの条件が揃っていて、神に感謝のほかはない。

十八年前に手遅れ寸前のガンの手術を受けたが、名医のお力で命拾いをし、放射線治療の後遺症のため年に数回の病院通いは避けられないにしても、一病息災、持病は我が友なりなどとイキがってこられた。

終戦後大陸から引き揚げ、以来、中小企業主の妻として全力投球してきた私が大病をしたことで、ワンマン亭主の氣が変わり、妻が趣味を持つことも許される（なんとしおらしい言い方）に及んで、他人様から見ればまことに幸せこの上ない身の上。

ところが伏兵はどこに潜んでいるか分からないのであります。五十肩、膝の痛みなどはともかく、二年ほど前からときとしてむやみやたらに寂寥感が胸を噛む。理由もないのにしんと寂しい。まず食べ物に味がなくなる、夜眠れない、取りとめの不安で心がちりちりする。経験のない方ならそれはぜいたく病よ、の一言で片付けるだろうが、私自身こん

なはずはないと首をかしげ、正気を取り戻すべく家事に励み、趣味の楽器にしがみつきのだが……。

ことに夕暮れがいけない。人恋しくたまらなくなり、買物もないのに籠を提げてバスに乗り、荻窪の商店街をうろつく仕儀となる。

悪戦苦闘の末、三か月もするとやっとトンネルから這い出ることができてほっとする。詩的な表現をすれば、胸の中に舞い込んで羽を休めた無気味な黒蝶が、大きな背を見せてやっと飛び去っていったくれたという感じ。

時を置いて気まぐれ蝶々は再び「しんしん病」を連れてやってくる。いわゆる初老期のウツ病とやらに該当するのであるが、考えてみると誘因のひとつに我が亭主の影響がある。

今や時代遅れの「仕事の鬼」をもって自負する亭主殿は、七十の坂を越しても自営業の社長の座を下りない。後継者たる一級建築士の息子は、しびれをきらし

て独立してしまったので、現在彼は営々と築いてきた城をわずかの従業員と死守している。心身ともに疲れるので、毎朝



目が覚めるなり体の不調を訴えている。来る日も来る日もやせ我慢の老いの一徹を見ていると、何とも気が滅入ってしま

うのだ。

とび立っていった息子のほうは流れに躍動する若鮎さながら、仕事も順調で、困ってもいない私に小遣いなどくれるので有難いことではあるが、老いの限界を認めようとせずグチばかり言う父親。裏切られた無念さ、やる方なさも分からぬではないから、一層困りものなのだ。

私はここでひとつ利口になった。将来後家さんになり、ひょっとして子供夫婦や孫と半同居した場合、自分の老いに周りを引ずり込んでほならない。グチは言うまい。病を得て辛くとも、それは衰えていく者の成り行きである。さり気なくいそいそと病院通いをすればよい。さすれば若い者は老後とは何と気楽なものよと思ひ込み、老いを怖れずに済む。

ある日ばったりと倒れている私を発見して、「まあおばあちゃんたらこんなになるまで黙ってのんきそうにしていたなんて……」と胸をつまらせてくれたりする、こんな具合になりたいのであります。

ワンポイント情報 13

私の受けたしつけ

貧乏士族の誇り高きしつけ

明治四十五年一月三日生まれで、
当年当月七十五歳半。

出生地は鹿児島県出水郡野田、貧
乏士族の家に生まれた。

わけあって母は福岡県に住んでい
たが、私は十歳のころから母によ

ってきびしくしつけられた。先ず
は挨拶から。畳の上での挨拶は両

手をついて丁寧に頭をさげる。
玄関で履物を脱ぐときは、先を向

こう側にして、きちんとそろえて
おくこと。みだれがあると、泥棒

などにふしだらな家として目をつ
けられる。

襖や障子の開けしめをするときは
片ひざついて左手はひざに置き、

右手で静かにあけしめをすること。
歩くときはすり足で畳の縁をふま

東京都田無市 法村 祐子（75歳）

ないように、人の寝ている頭のほ
うを歩いてはいけない。簾をまた
ぐとお産がおもい。

お便所はいつもきれいにお掃除し
ておくという子が産まれる。親よ
り先に風呂にはいらない。寝るの



も親よりあとにねる。

外を歩くときでも目上の人や親の後からついていくこと。悲しいからと、ワ・ア、ワ・ア、泣く、人に涙をみせてはいけない。

おかしくても、ア・ハ、ア・ハ、と、大口あけて笑う。おなかやすいてもがまんする、武士は食わねどたか揚子。腹はへつてもひもじう

その反動で……口が悪い!?

確かにしきいの上に乗ると母に叱られた。「おじいちゃんやおとうちゃんのを踏むのとオンなじです!」と言われて、幼い私は立ち止まってその意味を考えた記憶がある。

しつけ、小言はほとんど母から受けた。箸のあげ下ろしまでウルサカッタ、と記憶する。そのせいで? 「上品ぶってる」と小学生のころまでよくいじめられた。



ない。と、先代萩の千松みたい。

お金というものは、人が便宜的に遣うもの、お金に遣われてはならない。

友達といつまでもつき合いたかったら、お金の貸し借りをしないこと。もしどうしても貸さねばならないときは、あげるつもりで……いくら親しくなっても礼儀は守る

こと。

まだまだ書けばキリがありません。私が母と暮らしたのは、十歳から十七歳までの七年間でしたが、このほかにも、ご飯の炊き方から、米のとぎ方、木綿物、絹物の洗い張りから、仕立てまで、がっちり教えた。

もちろん教えこまれたことは今も

しっかり守っています。

お陰さまで七十五歳のこんにちまで、困ることもなくすごしてこられました。

あのころはきびしい母だとうらんだこともあったけど、今ではえらい母だったと、心から感謝しています。

東京都 匿名 (34歳)

和歌山の田舎で都会(大阪)から嫁にきた母は、都会育ちのママア美人によくあるタイプで、どういうわけか「田舎」を見下していた。

特に言葉遣いについてはうるさかった。和歌山の方言「つれもて行こら」を揶揄をこめて冷笑するのは子供心に辟易した。

そして私には、「してはるう」という敬語を教え込み「幼稚園のセ

ンセが『センセ、あんなこと言うてはるわア』ってあなたに言われて恥ずかしかった、って言うてはったわ」と、私がずいぶん大きくなるまで自慢げに語った。

その反動は恐ろしい。子供の身になれば、上品だとか言われて、小さいころ仲間はずれにされた痛みは大層こたえたらしく、中学、高校と進むにつれ、言葉遣いは荒っぽくなった。



口の悪さは、和歌山の方言に向かうのではなく、男の子っぽい語尾に向かい、本日もた今に至る。と言いたいところだが、もう一度言

他人の痛みを自分のものとする

しつけ、と言っても、ああしろだのこれはだめだのと言われた覚えはあまりない。祖母と両親は、私達子供とともに暮らす中で、無言のしつけをしていたのだと思う。実家の信条は、「他人の痛みを自分のものとする」だった。早くに夫を亡くし、女手一つで父を育て

葉遣いについて横やりが入った。今度は義母。新婚旅行から帰ってすぐそれを言われ、私はくやしくて、悲しくてボタボタ泣いた。二十七にもなって、またしつけを受けたわけである。その年になると、「私の言葉は私が選んで遣っている」という自覚もあるのに、そう反論できない立場の人から言われて、抵抗しながら関西弁を義母の前では捨てた。義母のこのしつけは、「一流大学

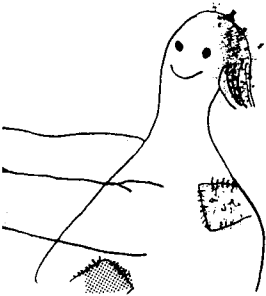
た祖母は、暮らしも楽であったはずがないのに、戦争中庭でやっと取れたわずかな野菜も近所に分けたり、行くところがないと聞けば、見ず知らずの人でも泊めたと聞く。私が小さいころ、水害で家を流された人のことなどニュースで聞くと、祖母と母は心を一つにして、

を出た息子の嫁として恥ずかしくないように」（アホかノー）ほら、この口の悪さ」という理由であることは、言葉を変えて聞いた。ほうちっち ほうちっち おまえの子じゃなし 孫じゃなし 田辺聖子のこの「ほうちっち」ソングの大阪弁をおもしろいと思わない人は、味覚音痴ならぬ言葉音痴だ、と思いつながら、子供が生まれるまでは、義父母を「おとうさま、おかあさま」と呼んだ。

救災の荷作りをしていた。私は昭和三十一年生まれだから、もうかなり物は豊かだったのだが、小学生のとき、つぎのあたった服を着ていかされ、おかげで卒業まで「ツギ」というあだ名で呼ばれた。子供の私がそうだったのだから、祖母や母の衣類のひどさはかなり

おかげで今は、なんとか標準語をマスターし（と言っても関西風アクセントは残るが）感情が激したとき以外は、マア並の言葉遣いをしているのではないかと自覚している。二歳半の娘は、兄やその友達の影響で、「ドケヨノ」などと言う。私達夫婦はギョツとしながらも、笑って論じ、言葉遣いのしつけは二人の我が子に対して最小限にとどめている。

東京都武蔵野市 田岡あかね（31歳）



議でならないほど、沢山あちこちから出してきては、風呂敷に包んでいた。

今私は五歳と二歳の子の母である私もまた、言葉によっていろいろ

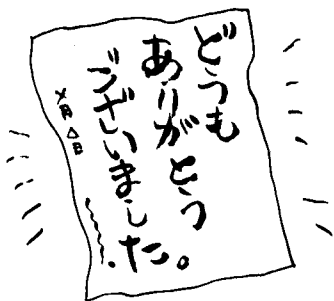
はがきで感謝を

娘ばかり三人ということもあって、「布団を踏んではいけない」とか、「外から帰ったらすぐ着替えをしないさい」とか、「大人の話に子供が口出しをするものではない」とか、家庭の中で受けたしつけは多かった。

母が割合のんびりした性格で、「なるようにしかならないから」と淡々と子供を育てたのに対し、父の場合、昆虫採集につき合ったり、夜、布団の中でむかし話を聞かせてくれたり、学校への提出書類を書いてくれたり、こまやかな気配りをしてくれた。

言うことはあまりないのだが、上の子のほうは、まわりにいる人々を平等に愛し、弱い者を自然にかばえるようになってきた。道端にしゃがみこんでいる浮浪者ふうお

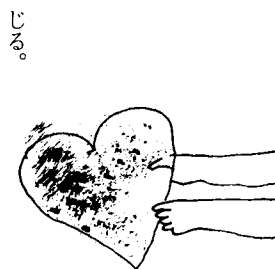
そんな父が娘たちに一貫して言い続けてきたことは、「はがきで感謝の気持ちを伝えよ」ということであつた。他所の家を訪問したり



年寄りに、やたらに声をかけたがるのにはまいてるが、障害のある人に気軽に手を貸した話など聞くと、あの実家のしつけがこれまで流れ下りてきているのだと感じる。

泊めてもらったり、また人から何かをいただいたりしたときは、必ず、はがきでいいからお礼状を出しなさい。わずか五円で（昭和三十年代は、はがき一枚が五円であつた）自分の感謝の気持ちを伝えることができるのだから、というのが父の教えであつた。

親戚づき合いの多い家庭で、お礼状を書く回数も多く、文面を考えながら書くのは辛いことであつた。しかし、幼い子からもらったのは一枚で、大人がこんなにも喜ぶものかと、私は子供心にも大きな発見をした思いだった。ちょっと



じる。

兵庫県伊丹市 伊賀美智子

した心づかいが、人間関係をどれほど潤すものかを知つたのである。はがきも当時の五円から四十円に値上がりし、電話の普及で気持ちの伝え方も様変わりしている。でも、上手、下手に拘らず、肉筆で書かれたはがきや手紙を受けとったとき、何ともいえず温かい気持ちになれるのは、そこに相手の誠意をみるからであろう。

父が逝つて十年になるが、お礼状に限らず、言葉にしても態度にしても、父のしつけは、広く私の心の在り方を示すときに役立っているような気がする。

ユワイチューの子はヒンギヤサクの子と遊ぶな

千葉県 山田さとみ(51歳)

幼児期の環境は怖い、といまでも

身震いをするほどだ。戦争を境にふるさとの山や河との縁は断たれたが、いまなおいっそう、そのころの教育(調教)が、わたしを支え、わたしを苦しめる。

「先に頭を下げるのはよくない子」いつも無表情、無口の祖母の一言。村長だった祖父は死んでもういなかった。

「うどんを食べるとき、音を出すな」と口をつねったのは叔母、「おはじきだって友だちに負けちゃだめ」と、綴方の練習をさせたあと、おはじきの練習をさせたのも叔母。父は小学校の教員、おとなしい人で「東はお日さまが出るころ、向かって立ってごらん。背中のはうは西、右手のはうは南」とか教えてくれたことだけが心に残る。

(戦死)

「あなたはユワイチューウ(祝い衆——神事をつかさどる上層階級の意らしい)の子だから、そこいら



のヒンギヤサク(貧小作)の子と遊んじゃいけない」

わたしは遊ぶ子がいなかった。何となく、家柄の良い家の子と思っていた。そしてヒンギヤサクは貧乏人、小作人とケイベツすることを中心で知っている大人のような子供であった。

鹿兒島の南方海上の、ある島でのわたしの幼い日のひとこまである。大声で笑う女、手足の大きな女、畳のへりを踏む女、あの女は馬の骨だなど、障子の向こうで孫にはオバアちゃんらしいところが少しもない祖母と、叔母親子が、話しているこれらの言葉が幼いわたしの心に芽ぶかせたものを、彼女たちは知っていたのだろうか。

父の戦死を契機に彼女たちは変身し、調教の効きすぎたわたしに財産でも奪われるとでも思ったのだろう(叔母は一人息子連れて出て戻っており、息子は政治家になりたがっていた)、雑草を抜いて捨てるようにわたしをヤマト(島ではいまでも内地のことをこう呼ぶ)へ送った。

あれから四十年、島には一度も帰

ったことがなく、このヤマトに住んでいる。しかし、ときおりユワイチューウがまだ心の中で、顔を出す。

五十一歳にもなったのに、他人への挨拶が下手、会釈さえ苦痛だ。培われたはずの負けず嫌いはヤマトの巨大な機構に魂消てショック死。鏡にきつそうな表情と、あまり笑わない祖母のような表情が残るのみとなった。

しかし、「現代だって本音をいうと身分制度は残っているわ」などと、つい子供たちについてしまう。「さしずめ医者には士じゃない?」とも……。

昔の後遺症らしい。つける薬はなくても、読む薬を発見、「わいふ」である。

わたしの全快は近い……。

さびげなく毎日の生活の中で

宮城県仙台市 渡辺美智子(43歳)

その日の遊びから帰ると、「ちゃん」とゲタ揃えさいよ」祖母の声に迎えられる。「ただいまあー」の声と同時にゲタは飛びはね、あ

ぐなっから」と、よく言いきかされたものです。玄関は、その家の顔。だらしのない生活か、そうでないか分かったか。

つつむいてホイッ／＼「なんば言っ

食事どきもよくごはんをこぼして

でもわがねえんだから」と玄関

捨てようとする「汗たらしして作

に引き戻され、ちっちゃなゲタを

拾って食べなさい」残したりしよ

きちんと揃えさせられる。腹ペコ

うものなら「お母さんが働いて買

で「ふかしいもやせんべい」に手

った米だよ、有難く食べないとバ

を出したくてもおあずけ。抱きあ

チあたるからネ」と。

げられ流しで手を洗い、ブクブク

戦争で夫を亡くした母は、祖父母

うがいをする。やっと「おやつ」

に幼い私を預け働いていました。

にありつける幼いころ。

月に二度ほどしか逢えず、母に甘

怒りつけることをせず、一緒にや

えたい、ぬくもりが欲しいと思う

ってみせる祖父母の手のぬくもり

五、六歳のころ。

や声が、未だによみがえってくる。

祖父母が交替で添い寝をしながら

「他人様ひとさまが来て最初に目につくと

話してくれる昔話を楽しみに、布

ころに、ゲタやズックだの、あつ

団敷きを手伝う。布団の上をピョ

ちこっちはねてたら気持ち悪くて、

ンピョンはねたり、でんぐり返し

をしたり、踏みつけて歩くと、よ

く叱られたものです。「あつたか

い布団に寝られない人もいるんだ

よ、美智子のネンネするフトンを

いじめないのっしや」

物も豊富で生活機能も便利な現代、

人や物へのいたわり、「心」が薄

れかけているように思います。日

常生活で大切な挨拶、家族や友達、

近所の人、会社組織の中に於ても

「おはよう、こんにちは、ありが

とう」などの言葉が少なく感じら

れる。「学校で躰を」と言う母親

の意見があるそうですが、愛情あ

るしつけは、祖父母や父母が、さ

りげなく毎日の生活の中で教える

ものではないでしょうか。

母や祖父母の姿を通して、物を大

事にする、感謝する気持ち、素直に有難うと言える心、教えら

れました。

祖父は一つだけ悪い行儀を教えて

しまったのです。「あぐら」なの

です、足がきれいになるからと言

って。未だに正座が苦しく、つい

「あぐら」をかいてしまう私。

外から帰ったら手を洗いうがいを

する、布団を踏まない、はき物を

揃える、きちんと挨拶をする、日

常生活の習慣として自然に振る舞

っております。



父の姉と踊りのお師匠さん

私、四十代後半の専業主婦、戦後

育ちの私達が受けたしつけも、生活様式が洋風化するにつれて、少しずつなくなろうとしている。郷

里は長崎市。実家は坂の長崎と歌にも歌われる通り、繁華街まで五分もかからないというのに、百六十二段の階段の頂上にあった。その昔十人の侍が住んでいたの、町名を十人町という。

その十人の侍の一人が、我が祖先さま、小さな武家屋敷が私の生まれ育った家であった。自分がしつけられた中で今でも忘れられないのは、親よりは周囲の大人達のはうで、中でも父の姉に当たる伯母と踊りの師匠が印象に残る。

私が小学校のころ、その伯母は外科医の未亡人として、広すぎる家にただ一人、優雅に暮らしていた。

その伯母が実家である我が家に、

仏様に参るため、月一度来訪した。

伯母は先ず仏様を拝み挨拶を済ませ、奥座敷へ行き座る。

兄達はうるさい伯母をさけて、二階から下りてこない。兄三人、四人目の一人娘である私は、母の手伝いで逃げるわけにはいかない。

先ず母の入れたお茶をこぼさないよう、静々と奥座敷に運ぶ。その

一挙一動を伯母はじっと見守っている。私の息づまる瞬間である。

出し終わると走らないよう台所に戻ってホッとす。改めて母と一緒に奥座敷に行き、じっと二人の会話を聞く。

あるとき伯母は私の箸の持ち方が悪いのに気付き、しつけが悪いと母はおしかりを受けた。それから伯母の来訪のたびに、先ず火鉢



の前に座らされ、火箸を持たされ、火がついた炭を持ち、横の灰の上にそれを置く、またそれを元に戻す。それをくり返しやらされる。

それは伯母の来訪のたびに続いた。今ではすっかり正しい箸の持ち方をして何げない日常の私であるが、ときおりふと感謝とともに、あの今はなき伯母を思い出す。

私の踊りの師匠は、目上の人が畳に座っているとき、部屋の入る口

で立ったままで受け答えをしてしまった私を、スカートのすそをビッピッと引いて目で注意をうながし、そこにいた大人達の前で恥をかいてしまった。

多感な年ごろであったから、師匠をうらんだりしたが、今では思い出とともに、しつけてくれた師匠に感謝している。

昔はこうして周囲の大人達がきちっと他所の子供でもしつけてくれた。ふり返って今の自分を思うとき、気がついていても知らない素振り、お節介オバサンと言われるような、つい口をつぐんでしまう。注意したために反対に恥をかかされることだってある。住居が洋風化していく中でこんなこともだんだん風化していくのかと思うと、ちょっと淋しい気もする。

東京都国分寺市 児島 正子

わが子にも仕込むつもり

東京都中野区 鈴木由美子

一、訪問した家庭で出されたお菓子は、一個しか食べてはならない。よそのお宅でガツガツ食べるのはハシタナイ、と母がよく言うので、私も兄もこの言いつけを守っている。

たところ、大叔母は笑いながら「いくつでも食べてちょうだい」。残りは全部おみやげにしてもらって、意気揚々と帰宅したものである。

母のこの教え、今でも気の張る相手を訪問するときは守っているが、親しいお宅では無視。出されたものは残らずいただく食いしん坊になっってしまった。

二、足で踏んではいけない、またいではいけない各種ルールを厳守せよ。

本やノートをまたぐな、食べ物もまたぐな、昼寝しているお父さんを飛びこすな。ざぶとんを踏むな、かけぶとんに乗るな、

しきいを踏んではならず、畳のへりに足をおろすのもダメ。和室を歩くときは、ここを何歩で行けば

自然にへりを踏まずに進める、と見通しをたてながら足を運べと教えられた。十二畳半と六畳がつながる座敷で練習したもののだが、今や三DKのマンション住まい。唯一の和室六畳間は家具と本棚で埋まり、畳の上を五歩以上歩くことは不可能。畳のへりに乗らなきゃ取れない本もあるのだ。

三、家族が帰宅したら、三十分か一時間は、文句を言ったり相談したりしないこと。

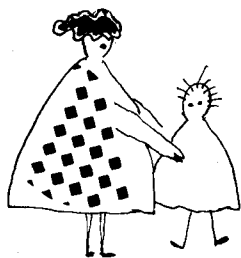
会社や学校で精神的に疲れているのだから、気持ちの切りかえがすむまで待つてあげましょう、というわけ。こういう点で、母は思いやりがあった。

しかし、その三十分が過ぎ、母が私の部屋にやってくる。みけんにタテじわがよっている。やっぱり

コワイ親なのであった。
四、他人を指さして批評してはならない。

母と手をつないで歩いているとき、一面緑の水田に、白い野良着のお百姓さんたちががんでいるのを見て、「うわー、牧場のヒツジみたい」と叫んだ。そのとたんものすごく厳しい顔で、「そんな失礼なこと言っではいけません！」死ぬまで忘れられないくらい叱りとばされた。

周囲を見回せば「身体に障害のある子をあざけてはならない」という基本的なしつけすらできていない子が七、八割。子供が他者を侮辱するのを容認する親たちが、無意識のうちにイジメを促進してきたのだ。母のこのしつけだけは、わが子にも仕込むつもり。



親類をトライ回していつけられ



「人から物をもらうときは、両手を下にかけて、上から取るものではない」

乾燥した「そら豆」の炒ったものを、伯母（母の姉）が私にくれようとしたときだった。両手のひらに掬って持っている伯母の手から、私は待てなくて上から掬い取ろうとして、叱られた。大変厳しく、私を叱るときは、眉間に皺を寄せ、白眼で睨む。そんな伯母の顔が怖くて、言われたことは必ず守った。このときのことは、よほど印

象深かったのだろうか、今でもそのときの情景をくっきりと憶えている。

あと、十数日で小学校（昭和十九年。当時は国民学校）に入学という、六歳になったばかりの三月、父は結核のためにこの世を去った。その二か月ほど前から、私は母の姉の嫁ぎ先である、京都府北部の、草深い田舎に預けられていた。

戦時中のこととて、食糧事情は田舎でも悪かったが、野菜は豊かだった。子供達のおやつも、乾燥したさつまいもや豆、麦こがし（はったい粉）、柿や栗といったものがほとんどである。いくら豊かでも、預けられている身には、従姉妹達のように自由に食べられない。必ず伯母がくれるまで待たねばならなかった。この伯母の元には、

三年間預けられていた。

以後、中学を卒業するまで私は四軒の親類に預けられねばならなかった。そのため、母からは何ひとつ躰けられなかったが、厳しい伯母（または叔父叔母）達に、口答えや甘えさえも許されずに育った。今振り返っても、暗いだけの子供時代で、まさに「おしん」の日々だった。

だが、生来の負けず嫌いは「何くそ、負けるものか、今に見ておれ」の心意気で、躰のひとつひとつを、しっかりと心に刻みつけている。そんな中でも、言葉遣いは厳しかった。特に私の小、中学校時代、教師と生徒の間には、厳然たる一線が引かれ、話し言葉は必ず敬語である。後年、東京で就職した際に、アクセントは仕方がないにし

ても、言葉遣いで悩んだことは、一度もない。言葉の躰がいかに大切かを知らされた。

我が家の子供達にも言葉遣いは厳しく言ってきたが、何せ、新人類達には私もお手あげといったところである。が長女（十八歳）は、電話の受け答えが私にそっくりだと、他人様からよく間違えられるが、いつの間にか私のことを見習ってしてくれたようで、うれしく思っている。

淋しかった子供時代に受けた躰のすべては、世間を生きる上でどれほど役立っていることか。友人達に完璧なぐらいいだ……と言われても、私は少しもうれしくない。普通の子供のように、親に甘えて口答えも我がままも言えて……そんな子供時代を、一度経験してみた

岐阜県各務原市 池田 敦子

いと思う。ときどきは、伯父や伯母達に感謝することもあるが、同時に私に辛く当たった数々のことも思い出されて、複雑である。

来世は、ぜひ普通の家庭に生まれたい……とあの世で天国の神様に

お願いしよう。

母から伝わったわが家のしつけ

埼玉県草加市 堀場美代子（42歳）

・畳のへりを踏むな……行儀が悪いから。今は無頓着。

・布団を踏むな……兄や姉と夜布団の上で暴れると叱られた。綿が千切れるから。今も気を付けている。

・ご飯は大盛りに……母が若いとき、並によそって出したら姑から「けちくさい。もっと山盛りにせえ」と叱られたとのこと。

私がその通りしたら姑から「ご飯は何杯でもおかわりできるように八分目に」と教えられた。今は、家族各々のおわんに適量をよそっている。

ご飯におはしをつきさない……さんまいさん（墓地）のお供えにだけおはしをたてるのだから。

子供にはおはしの持ち方、置き方、

さぐりばしをししないように教えている。皆で気持ちよく美味しく食事するのが大事だから、マナーは守らねばならない。それが守れないと一人前に見てもらえないことを話している。（……が食事の行儀は悪いノデス）

・借りた物はすぐ返すように……母が昔、借りてきた傘を干して乾かしてから返すつもりでいると父（母の）から「借りた物は濡れてもすぐ返せ」と叱られたとのこと。傘に限らず借りた物はすぐ返して、その人の信頼を裏切らないようにすることが大切ということ。私も子供も実行するようにしている（図書館の本はときどき期限を過ぎてしまうことがあるが……）



・頂き物をした場合、すぐお礼を言うか、礼状を出す……田舎では、おかず、畑の収穫物、よそからのもらいものなどを近所でおすわ

うが好評である。

けしあう。母は「これは○○さんからもらったん。今度道で逢うたら『おいしかったよ。おおきに』と

・試験は必ず見直すように……小学時代から繰り返し言われ、ずっと実行したが、見直して迷って直して×になったときも。

よう礼言いなよ」とそのたびに繰り返した。遠くから送ってもらった場合は、「その人はちゃんと着いたかどうか心配してるさけ、すぐ礼状を出さなあかんで」と言っ

子供にはときどき、ウツカリしたミスをしているかもしれないから、見直すようにと言っている。試験だけでなく、他のことも再考しながら歩んでいけるとイイデスネ。

父から、

・授業中は右手を挙げるように……それが身体的に正常であり、マ

ナーなのだそう。今も気を付けている。
私の長男は左利きでもあり、子供

には特に注意していない。姿勢は正しくするよういつも注意している。

育った所 和歌山県有田郡金屋町
糸野（蜜柑山のふもと）S十九年
生まれ（十一月二十四日）

私の受けたしつけの基盤

私の母はアメリカ人である。

学を許されたのは、そもそもが、

に成功している。日米の間にも戦

に頼み、学問の道にもどって父と

一九一〇年の生まれといえ、アメリカは不景気のどん底で、それ
でなくとも敬けんなるプロテスタ
ントの信者だった私の祖父母の質

闘が開始されて、父は敵国の妻と
こともたちを抱えて孤立した。
やがて終戦となる。

ともに仕事をはじめたので、私
ちきょうだいは日常的にはキヨさ
んの世話になった。

素儉約は母の身についていた。三
人姉妹の長女として、父親にはと
くに可愛がられた。その父に早く
死なれ、病弱だった母を助けて、

父はよくこのときのことを、
「世の中がひっくりかえったろう
？ それまでビリッカスを走って
いた者がこんどは先頭を走ること
になったのさ」

キヨさんは、当時四十を少し過ぎ
たところで、気丈で気位が高く、
後に私が「奥女中」とあだなした
人である。以後四十年近い日を私
たち一家と暮らしてきている。

一家の柱として何事にも積極的
に取り組む楽天的な性格だったらしい。
日本人である私の父と会い、結婚
して日本にきたのが昭和十二年で

と、言っていた。
私がものごころついたとき、す
でにキヨさんが両親を助けて家に
いた。

私の祖母に仕えていた十数年がキ
ヨさんの人生で最も華やかな時期
であつたらしい。

父は生物学の道をえらんだ。
同じ学問を同じ師についてともに
学んだ母を異国から連れて帰った
のも、父の家庭を日本の社会のわ

私が生まれる前に亡くなった祖母
にながいこと仕えていた人である。
戦後、母がこどもたちをキヨさん

そんなキヨさんが、世間知らずな
母の後見人のつもりになって、私
たち兄弟姉妹五人の養育に張り切
ったのは、祖母に対する敬愛の気
持ちから出たものだったのだろう。

昭和の初期に私の父がアメリカ留

ずらわしい因習から引き離すこと

戦後、母がこどもたちをキヨさん

持ちから出たものだったのだろう。

器の選び方、皿の置き方、行儀作法、言葉づかいなど、母にできない日本の形式や風習を、祖母に代わって私たちに教えるとうと努力した。

キヨさんの精一杯の努力は、新しい時代の流れや時代を先取りして

いた両親の生き方に押され気味で、私たちがようだいの上に十分な成果を残したとも思えない。けれども、日本の社会に生まれ教育されてきた私は、もしもアメリカ生まれの母だけが母だったなら、それなりの文化的なハンデキャップを意

識しないわけにはゆかなかつたろうと思う。もしかしたら、私たちがようだいは二つの文化のあいだのディレンマに悩まされて生きていかなくはならなかったかもしれない。

私は養育される過程で、二つの人格、一方に社会的な意味で一人の学者であり西洋の文化を持った母を、もう一方に家庭的で日本の古来の文化を負った母親役のキヨさんを持っていたことになる。

テーブルに肘をついて食事をして

はいけません。スープを音をたててすすってはいけません。あいさつをちゃんと下さい。

確かに母からもキヨさんからも耳にたこができるほど口やかましく叱られた。しかし、そういう基本的なしつけは、言ってみれば、取りはずしのきくアクセサリーのようなものではないか、と今思う。しつけというものがなんらかの意図をもってなされるものとするなら、私のうけたしつけにはどのような意図がこめられていたというのだろう。

私は父からも、母からも、口やかましかったキヨさんからも、いわゆる厳しいしつけは受けなかったような気がする。それでもなおあえて私の受けたしつけを言おうとするなら、三人三様それぞれの持ち備えていた人格文化から、私自身が選択して取得した、取りはずしのきかない私自身が、意図されていたのかもしれないと思う。

(え・万合陽子)

ちびっこのお母さん



版画・みやしろかずよし「自然食通信」編集部編

風土に培われ暮しの中でめんめんと受け継がれてきた食へもの数々。母たち祖母たちによって伝えられてきたそんな技を取り戻したい。

好評発売中

定価一八〇〇円

百姓志願 中村顕治著

僕たち一家が村に入るまで

百姓への熱き想いを胸に一步の下、顔に汗し土を耕し、生ずつ着実に走り続けて十七年。き物と共に生きる。心楽しきサラリーマンから見事転身を百姓暮らしの日々にこれまでの果した中村さん一家。広い道。道のりを重ね合わせます。

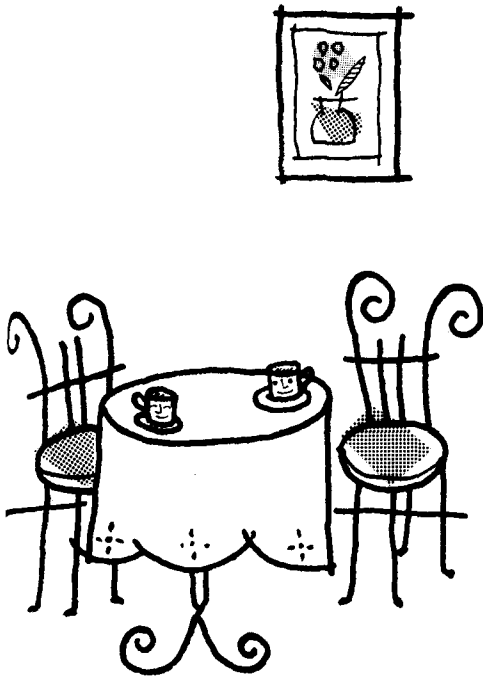
発売中

定価一七〇〇円

ご注文の際は発売元・新泉社で
東京都文京区本郷2-6-10
☎03(816)3857 振替・東京5-78026
自然食通信社

借りたい方・貸したい方の 仲人役つとめます

一戸建・マンション・セカンドハウスまで



甲南不動産(株)

社長・支店長はじめ、全員女性の会社です。
当社をご利用になれば、駅前の不動産屋さんを
足で回るのとちがい、首都圏一円、または関東
一円でも、広域の物件情報がすぐ手に入ります。
お貸しになる方も借り主を広くえらべます。
土地建物の売買部もぜひご利用を。

貸し主さんの条件と
借りる方のご希望の
間に立って

調整するのが私たちの役目

一見食い違っているようにも
じっくりとご相談にのって

話し合ううち一致する

とてもうれしいですね

外国の方は 権利金・礼金

分かりません 貸し主さんを

説得 その分お家賃に

上のせしてまとめたり

収入は？ 勤務先は？

と心配なさる貸し主さんには

保証人を立てて安全契約

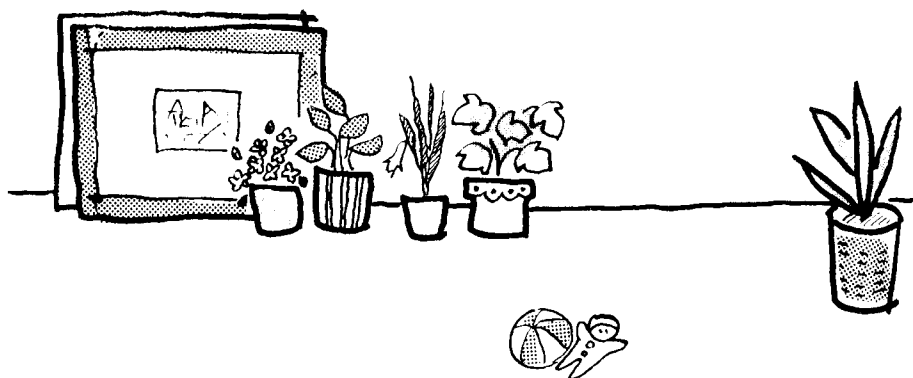
借りる方もご満足

広域情報で勝負しています

とにかくお電話下さい

経験豊富なプロが

アドバイザーいたします



甲南不動産株式会社

代表取締役 南 かつ子

本社 東京都新宿区百人町1 17 5メゾンオグラビル101,102

TEL 03(362)9311

代々木支店 東京都渋谷区代々木1 21 11トキワビル3F

TEL 03(374)2511

高田馬場支店 東京都新宿区高田馬場2 14 4八城ビル3F

TEL 03(208)7531

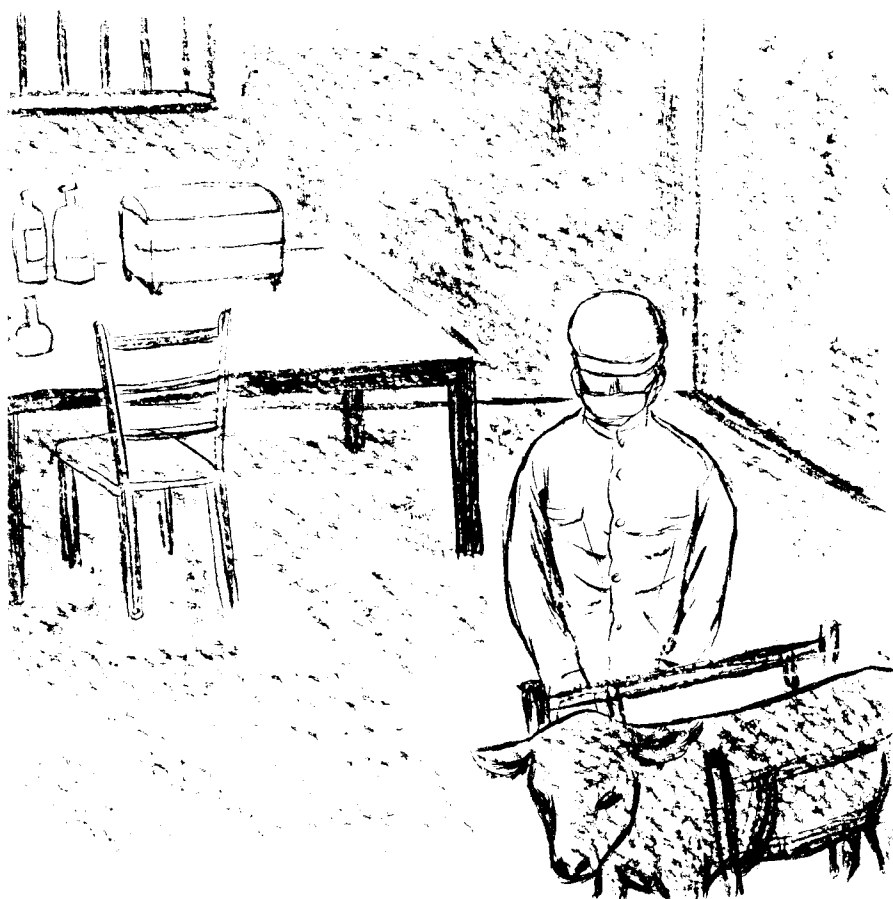
売買部 東京都新宿区百人町1 17 5メゾンオグラビル1F

TEL 03(363)9971 (土地建物の売買はこちらです)

とともに

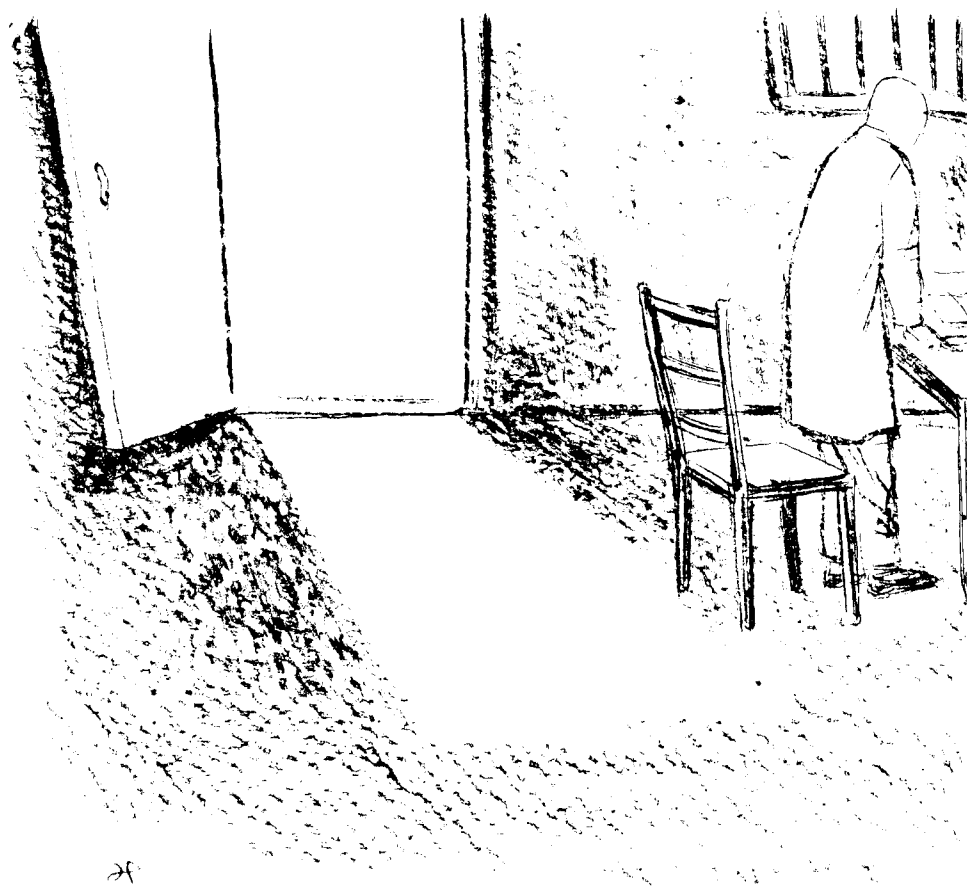
——私の放浪の旅——

法村香音子



連載 4

八路軍



父の仕事

話はさかのぼる。

省政府の二階に軟禁されていたときのことだった。

母は身をもて余していたようであったが、私達子供は元宝山に登ったり、ママゴトをしたり飽きることがなく、そればかりかむしろ、父の仕事を手伝ったりして充実した生活になった。

私は越してきて初めて、父の仕事の内容を知ったのであった。往診カバンを持って出掛ける姿しか見なかったから、ただのお医者さんだ、と思っていたのだ。

二階の窓から覗くと、左手に平屋の牛小屋と続いた父の作業所がある。夏だったから、窓を開け放した小屋のなかの父の白衣がチラチラ見える。つねに父が身近にいるということは、むしろ以前にくらべてこのほうが安心して生活できるというものであった。

牛は常時三頭ぐらいいて、八路の兵隊

や中国人のおじさんたちが世話をしていた。父の仕事を手伝う日本人のおじさんとおねえさんも一人ずついたそうだが、私は憶えていない。

そのおじさんは、ある日、「すみません。お先に（日本に）帰らせていただきます」と父に耳うちして翌日からは現われなかったという。赤谷さんというおねえさんは、きちんと帰してもらえたそう

だ。

牛小屋は糞の匂いが満ちて、白黒ブチの牛が、縦になったり横になったりして絶えず口を動かしており、八路のおじさんたちはしょっちゅう大きなまぐさ切りを上下に動かして、サクサクと糞を切っていた。

ヤカンを持って牛乳を貰いに行き、入り口に立ってまぐさ切りや乳搾りなどの作業を見ていると、来い、来い、やって見ろ、と、手招きをする。やがて私も牛の餌やりや水汲みを手伝うようになった。終戦一年目の夏が巡ってきていた。

その暑い盛りに、鳳凰城に出張に行ってきた父が、マクワ瓜やトウモロコシなどのお土産をたくさん持って帰ってきた。私とのんちゃん、父と一緒に帰ってきた八路が床に置いた籠の中からさっそく一個ずつ丸ごと貰うことにした。

よく熟れておヘソがびよこんととび出ているマクワ瓜を、匂いをかきかき選んで父のそばに行った。畳にあぐらをかいて一休みしながら、汗を拭き拭き南京まめをつまみ、パイチューで一杯やっていた父が、いつものように指頭消毒器から脱脂綿を取って、

「どれ、父ちゃんにかしてごらん」と私のマクワを丁寧に拭いてくれた。

「のんちゃんは、これれ」

「あんたは食べきれんのに、こんなに大きい取らんでも、もっといいのがあるろうが……」

のんちゃんは身体もちいさく口もおちよぼ口なのに、いつも欲張るのだ。

ここまではいつもと同じであった。

「今日の患者は、ちょうど香音さんとおないどしだったよ。肌のきれいな可愛い子でなあ」

「どうしたの？ その子」

拭いてもらった香りのたかい甘いマクワを、皮を剥かずに上のほうから噛っていた私は、食べるのに夢中になりながらもそう聞いた。

「そりゃあひどい天然痘でなあ……、かわいそうに」

「ふうーん……」

「その子から菌を採ってきたんだよ」

「……」

マクワの破片を片手に、皮を残すようにして中身を噛っていた私は思わず手を止めた。

芯が崩れて指のあいだから汁がしたたり、簡単服の膝を濡らした。

「……その女の子、あばた、ひどいの……？」

私はまじまじと父を見つめながら息をひそめて聞いた。

「今、かさぶたがぼろぼろ落ちているが、ありゃあ、顔じゅう大きな跡が残るだらうなあ……」

あばたの女の人たちを中国人街でよく見掛ける。月のクレーターを思わせるような、深くえぐられたおできの跡が無数についている女の人の顔が思い浮かんだ。

「ひどかった……。ほっそりした、美人になる子だったよ。どうしてこの病気は顔に残るんかなあ……。まったく残酷な病気だ」

私はマクワをお膳に置いた。

三ミリぐらいに粒の揃ったあばたが無数に顔に残り、そのために目鼻立ちの印象さえさだかなくなる……。

私は思わずべとべとの両手で自分の頬を挟んでいた。喉に描く女の子の顔はなぜか私の顔だった。会ったこともないその子の、あばただらけの顔が目に見え、胸が詰まり、もうマクワは食べられなかった――。

鳳凰城に患者が出たということ、父は侯さん達と痘苗作りのための病源体の採取をしに行ってきたのであった。

天然痘も、落瘡期のかさぶたの菌が伝染力が最も強いのだそう、ぼろりと落ちるところをいくつか採取するだけでいいのだという。落ちたかさぶたは膨らんだ円盤型をしている、と聞くだけで、そのくぼみの深さが想像される。そのかさぶたがそのまま人の肌の傷に付いたら天然痘になる、というから恐ろしいことだ。

伝染病というのは、人間から人間に渡っていくほど強くなっていくが、動物では逆に弱まっていくのだという。そこを利用して、動物通過を繰り返させ、菌を弱めてただのおできになるようにして人体に植え、免疫にするのである。

翌日から父たちは痘苗作りにとりかかった。

父が考案した、牛固定機、というべき木の枠を組み立てて仔牛を縛り付け、おなかを消毒して毛を剃り、あの子の菌が

植えつけられた。

数日後、仔牛は天然痘に罹って熱のために目を潤ませ、胸から腹にかけてびっしり菌を植えられているから寝かせてもらえず、身動きならないままゆらゆらと悲しそうに立っていた。かさぶたを採集するために、おなかに白い大きな布が巻かれた。日毎にひどくなってくるのが私にもわかった。

強い天然痘だからそばに寄ってはいけない、と言われていたが、私は毎日戸口に立った。

「苦しいの……。かわいいそうに、かわいいそうに……」

牛に言いながら、まるはだかで布団にくるまっていたというその子も、こんなに苦しかったのだろうかと思うと、可哀そうでならなかった。

かさぶたを提供した、病気で痩せてしまった仔牛たちは、次から次へといなくなった。

父に聞いたら売られたんじゃないか、

ということだった。あの仔牛たちが、またワクチン作りのために殺された、とは思いたくなくて、父の言うことを信じることにした。

出来上がったかさぶたを乳鉢で摺り潰し、膿状にした痘種を作る。こうなると、私達は赤ちゃんのうちに痘種をし、免疫になっているから、もう天然痘の菌も怖くなくなる。

父が痘苗をスポイドで細いガラス管に吸い上げて渡してくれる。そうっと受け取った私は教わった通りに、それを約十センチごとにアルコール・ランプの炎の先端にかざす。要領よくやらないと熱ですぐに菌が死んでしまうぞ、と注意される。管を溶かしてスーッと引っ張り端を止め、プチンと折ってはガーゼを敷いた空き箱に縦に並べてそっと置く――。

種痘する日は、私にも手伝わせてと父に頼んでおいたが、父は忘れずに前の日にそう告げてくれた。あの子や仔牛や私に役に立つのだと思うと嬉しかった。

父の十坪ほどの仕事場の、入り口を入ったところに机を置き、その上にシーツのような白い布を掛けた。机の端に寄せて、電気では煮沸する器具の消毒器が置かれ、湯気の中には父が丁寧に研いだ、光ったメスが何本も並んでいた。その横にアルコール綿やガラス板やアルコール・ランプを並べ、私が手伝って作った痘苗のアンプルの入った箱を置いた。

嫌だ、というのに父は、「手伝いたいなら、借りてきなさい」といって私は脚のつま先まである母の白い割烹着を着せられた。

「うんうん、なかなかよく似合うぞ、小さい母ちゃんだ」と父が面白そうに笑った。

（子供がいっぱい来ているな？）

外のざわめきに、私はなんだかわくわくして窓に寄り、そっと覗いた。

初めて接触した中国人たち

どういふかたちで知らされ集められた

のか、まだ用意もできていない朝のうちから、中国人の子供たちが親に連れられたりして大勢やってきていた。

「(わあ……!) 父ちゃん! すごいよお! ものすごく、いっぱい来てるよお



!」
右手の戸のすぐ前に並んでいる、のんちゃんぐらいの男の子たちが、やたらと騒がしい。

その子らはみんな額の部分の髪だけ残

して切り揃え、あとはつるつるに剃り上げるという男の子の一般的なヘアースタイルだ。耳の前にもちょこつ、と残したり首の後ろに小さな三つ編みをしている子もいる。

女の子はオカッパを、毛の傘みたいに頭の中のほうだけこれも剃り上げてあって、髪の毛が風に舞い上がるととても可笑しい。涼しいようにそうするのかと笑っていたが、それがシラミ対策であったと知ったのは、旅に出て、自分たちがそうされてしまったときであった。

その子たちの四、五人後ろの、腰骨に乗せるようにして一歳ぐらいの坊やを抱えたおばさんも、子供たちの頭越しに仲間としゃべりあい、子供たちに負けないぐらい騒々しい。

「いっぱいって、どのくらいかな?」

「来て来て。父ちゃんも来て見てよ」

と言っているとき、おばさんが坊やの鼻を指でひねってわきにピッと払い、片足を内側に上げると布鞋の底にその指をな

すりつけた。

（やーだぁ！ きたないい）

「おう、こりやすくないな。もう三百人以上はいるな。今日の予定以上だぞ。全然足らんがな……。おーい、侯さん、どうなってるんだあ」

父が私の頭の上から群衆の中にいる侯さんを呼んでいる。

おばさんが、むずかる坊やを下に降ろした。坊やがトコトコと五、六歩あるいてきたので、私は私のほうに来てくれたのか、と思った。

「わあ、可愛い」

ところが坊やは私を無視して、窓の下でいきなりしゃがんだ。すると、坊やのズボンの、膝と膝の間の乾いた土が黒くなり、それがだんだん拡がった。

（あらやーだ）でも可愛い。うちには男のこがいないのだ。

みんなに付いてきた飼い犬なのかノラなのか、茶色の大きな犬が首を伸ばしなから急いで坊やのそばに寄ってきた。坊

やは犬を振り返りながら立ち上がり、少し前へ進んでまたしゃがむ。みんなが坊やを指してドッと笑った。

私には一瞬何のことだか分からなかったが、次の瞬間慌てて窓から首を引っ込め、侯さんと窓越しに話をしていた父の胸にぶつかった。

「父ちゃん！ 犬がウンコ食べた！」

「そうだよ。犬は胸焼けしないように草や人間のウンコを食べるんだぞ。掃除の手間も省けて一挙兩得というわけだ。おもしろいだろ」

侯さんと笑いながら坊やを見下ろしてそう言ったが、面白いだろうなんてとんでもない！ のんちゃんも私も、ノラでも何でも犬さえ見たらすぐにかまっていたけど、もう止めた！ 犬の顔を撫でくりまわし、ぺろぺろ舐められて喜んでいたらなんて！

「——ないと分かったら、彼ら、没法子（メイファーズ、仕方がない）で帰りますよ」

「じゃあ、そこんこは君らでよろしくやってくれよ」

侯さんに指示しながら、父が、始めるぞ、と私や中国人の助手たちに声を掛けた。

（それにしてもあの子、変なズボンを穿いているなあ）

父と一緒に窓から離れて、私は机の後ろにまわり、父と向きあって立った。

「父ちゃん。中国人の子は赤ちゃんのときおむつするの？」

新京に住んでいたころから、父はしょっちゅう北満や蒙古の中国人部落に出張していたので、彼らの生活や習慣について詳しく知っているのであった。

「いいや。おむつはしないで、おこしのようにキレでお尻をぐるぐる巻いとくだけだよ。夏は、お尻から下はだいたい大きくなるまでスッポンポンだ。あの子はまだいいほうだぞ。いまごろから股割れズボンを穿いているんだからね。中国人の子はみんな、冬も股割れズボンで大きく

なるんだよ。歩くようになったら、自分でオシッコするように早くから躰をしているのだ。生子ちゃんみたいにションベンたれじゃないんだぞ」

（ほんとだ。あんなヨチヨチ歩きの赤ちゃんがちゃんと屈んだ）

父は、さかんに湯気をたてている長方形の消毒器の中から、長いピンセットでメスを一個一個つまみ出している。中国人の女の助手は、父のすることを見ているだけで役に立たない。慣れないから言われたことしかしないのだ。

「ふーん。でも、前に生子ちゃんのおむつ盗られたのよ？」

「そうかあ？」

父も私も、盗られたおむつは鞋になったのだ、と知ったのはのちのことである。メスを消毒するアルコール・ランプに火がついた。

牛小屋の前あたりから、騒がしい笑い声や怒鳴り声まで聞こえる。窓や戸口から、にやにや笑いながら中を覗き込むお

となや子供を、兵隊たちが追い払ったり、外はものすごい騒ぎだ。

「お尻は拭くの？」一番気になることを言ってみた。

紙が不足しており、私達はいつも母から口酸っぱく節約するように言われ、お便所に行くにもその都度買って行くのである。私はそれが嫌だった。「また行くの？」というからだ。何故なのか、そう言われたらよけいにしなくなる。キレのない人たちでも、そんな紙はあるんだろうか、と、余計な心配までしてしまうのだ。

坊やの鼻をつまんだことを思っそう言ったのだが、（まさか！）と慌てて自分の考えを打ち消した。

用意が済んだ父は、どかっと椅子に腰掛けて片腕を白い机にあずけ、白衣の背中を反らせて子供たちを見ていたが、やがて先頭の子に手招きした。

今までワイワイいいながらも並んでいた子供たちが、急に静かになった。それ

から大人に背中を押された先頭の子が、おずおずと遠慮ぎみに入ってきた。すると、今までガヤガヤしながらも並んでいた子たちが、列を無視して後ろに押しよせ、おばさんたちの金切り声が飛び交ってますます大騒ぎ。

「こりゃ、到底足らんがな……」

父が独り言のようにそう呟いたが、この場合は紙のことよりそのことのほうが重要だった。

私はびっくりした。父は平気なようであったが、戸のところから父の前まで十数人並んだ子供たちや特に数人のおとなが、ものすごく臭く、たちまち部屋が臭い匂いでいっぱいになったのだ。おまけにすごい鼻たればかりで、服も手も足も真っ黒に汚れている。

子供は訳の分からない言葉でベチャクチャ声高にしゃべり、私を指さし、覗き込み、女の人たちはお互いに囁き交わし薄気味悪く笑っている。

私は気分が悪くなった。

父とは見れば、にこにこしながら、もう二人目の子の、大人の服を着ているのではと思うようなだぶだぶの服の袖を慣れた手つきでまくり上げ、汚い腕を脇の下から掬い上げるようにして肩の皮を張らせ、メスを入れている。

子どもは身をよじってくすぐったそうにしたり、顔をしかめたりしながらも嬉しそうにやってもらっていた。

官舎という隔絶された日本人社会にいた私には、大勢の中国人の子供とまぢかに出会うというのは初めての経験であった。中国で生まれ育ちながら、今さらにカルチャー・ショックを受けるという矛盾。それが「大東亜共栄圏」の実態であった、などとは子供の私に分かるはずもなかった。顔かたちのさして違わないこの人たちと、私達日本人とのあまりの違い。私はまだそれを認めることができるほどには成長していなかった。

この種痘のもとになった私とおないどしという女の子のことを、私のなかで美



化していたが、何だか急に色褪せてしまった。

（その子も、こんなに臭くて、こんなに汚かったんだろうか……）

「どうした……。看護婦サン。もう、なくなつたぞ。はよ出してくれんか」

ぼんやりしていた私は父の声に慌てて、

肩からずり落ちそうになる割烹着の袖をたくし上げ、アンブルをつまみ上げた。そして、最初に父が見本を見せてくれたように、ハート型のヤスリで両端に傷を付け、一方の端をボキンと折って水平にアンブルをガラスの上に近づけ、垂直にしてみよう一方を折った。

クリーム色というよりは乳酸飲料のよ
うな色をした膿が、スーッと流れ出てき
て、ガラスの上にわずかに盛り上がって
溜りを作った。

「うん、うまい、うまい」

父はせっせと種痘を続け、机の上の膿
盤には腕の汚れで真っ黒くなった脱脂綿
の塊が溜っていった。生まれてこのかた
お風呂に入ったことがない人がさらなの
だ。

一個のアルコール綿では足りずに、も
う一個で拭いても汚れの取れない子もい
て、父が笑いながら、その子の鼻づらに
黒いアルコール綿を突き付けてからかっ
ている。どの子の腕も、大体種痘したと
ころだけが際立って白くなった。

四、五人で一本のアンブルがなくなる
から私も結構忙しく、そうこうしている
うちに鼻が馬鹿になったのか、自分の考
えに気を取られていたからか、臭いこと
を忘れてしまっていた。

順番が進むにつれて、終わった子まで

が追っぱらわれても帰らないから、どん
どん人が増えて騒がしさがひどくなるば
かり。秋が近づいてずいぶん涼しくなっ
たというのに、部屋のなかは人いきれと
暑さで耐えられなくなってきた。

私は思わず立ち上がった。

「お手伝いに、母ちゃんを呼んでよう
か」

初めて口をきいたと思ったのか、日本
語がめずらしいのか彼らは私のほうを見
てガヤガヤいった。たぶん私はずーっと
仏頂づらをしていたに違いなかった。
「もうすぐ終わるからいなさい。このぐ
らいのことが我慢できないのか」

仕方なく、またそーっと腰掛けた。

子供に付いてきたおとなまでが、こっ
そり自分にもやってくれ、と腕をまくっ
て父にねだっている。父は手真似でしき
りに、子供の分も足りない、と、やって
いる。

おとなの分どころか、来ている子供た
ちの分さえ全然足りないし、着床が危ぶ

まれるからつける分を少なくするわけに
もいかない。

「ここで作るのも人手も限度だしなあ……」

次の子供の腕を握みながら、父はまた
も独りごちた。

菌の保存に苦勞する

房産住宅にいたころ、餓死者もだが、
天然痘だけでなくジフテリア、コレラ、
発疹チフスなどの伝染病が終戦直後から
大流行した。弔ってもらえない死者たち
が、たくさん鴨緑江に浮かんでいたもの
だった。それらの伝染病はまだまだ治ま
っていないかった。予防用のワクチンがな
いのだから治まるわけがないのだ。

ワクチンを作るには、たくさん雄の
ウサギが必要であったが、当時は手に入
らず父たちは苦勞したという。

その種を手に入れるについても、父が
もといいた新京の衛生技術廠にあるのは分
かっているが、新京は国民党軍と八路軍

の激しい攻防戦のさなかにあつて危険で近づく、大連の中央試験所、か関東試験場にあるはずだが、と思つていても、この情勢ではどうにもならないだろうと父は考へていた。

ある夜、かなり遅い時刻に候さんが父を呼びにきた。行つてみると、仕事場の暗い電灯の下、作業台のまわりに数人の幹部が集まつていた。父を待つていたらしい。

一番の幹部の、閻同志も当然いて、何故かみんなにこにこしていた。

「先生。ご希望のものです。どうぞ、お一つお取り下さい」

たくさんリンゴが入つた岡持ちのような柳籠が父の前に押しやられた。

「どういう意味だね？」

リンゴ自体は珍しくないが、父はいぶかつて籠の中を覗き込み、侯さんのいう通りに一つ取り上げてみた。

「不、不是那個。……是這一個（いいえ、それではありません。これですよ）」

いつもの柔和な顔を一層和ませながら、閻同志がじれたように別のリンゴを籠から選び取つて、茶目つ氣たつぷりに父の前に突き出し、くりくりと手首を回してみせた。

そのリンゴのヘタの周りの皮に黒ずんだ傷口がついていたので、父はやつと（問題はこれなんだな）と氣がついた。

エンピツの芯のような茎を引っ張つたら、案の定ぽっくり取れた。リンゴの芯をくり抜いた中には、なんと、菌の入つたカプセルが隠されていたのである。

すでに弱められ保存されていた各種の菌が、秘密のルートを経て大連から持ち出され、こうして安東の父のもとへ運ばれて来たのであつた。

大連——安東間は鉄道をルートに取ると、一旦奉天までさかのぼらねばならぬ。時間もかかるし交通事情は不安定なときでもあるし、夏の盛りでもある。

いずれにしても、誰が考えたのかリンゴのなかとは。暑さに弱い菌を隠して運

ぶにはもっとも良い方法であつた。

喜んだ父が、「どのようにして貰い、誰が持つてきてくれたのか」と問うたが、閻同志が人差し指を唇に当てて、「秘密（ミイミー）」と、笑いながら言つたという。

興奮した面持ちで帰つてきた父が、「どうやって手に入れたかわからんが、彼らはさすがだなあ……」と母や私にその様子を話してくれて、私たちは「まるで、探偵小説みたいだね」といいあつた。

だが、こうして手に入れた貴重な菌を使って、多くの人々に待たれているワクチン作りに着手しないうちに安東の情勢が変化するとは思つてもみないことであつたし、しかも、大切な菌を保存するために長い年月を苦勞することになろうとは、父には予想しえないことであつた。

弱めた菌を生かしておくには、一週間か十日ごとに新しい培養基を作り、菌を植え替えてやる必要がある。どうしてもやらねばならないこの作業は、遊撃戦の

長い移動の途中でも実行された。だから私達はときどきは村に泊まることができたのだ。

村に泊まって菌を培養しているあいだ、父たちは診療所を開いて住民の病気の治療に当たった。これぞ八路軍の住民宣撫工作である。やっていることは昔父がやったことと同じではあっても、その軍隊が日本軍か人民の軍隊かで意味が違うのだが、父には同義であった。

父たちだけが数日いなくなることもまああった。移動中の「出張」という二重の行動で仕事をしていたのである。例えば手術とか難産などもある。中国人は盲腸を患ってもなすすべもなく死んでいたのだ。冬でも伝染病は流行る。その手当てをしなければならぬ。さらにもっとも肝心な菌の培養を、私達には旅を続けさせて別の場所で行ってくるのである。

あの広大な大地で父とはぐれてしまう可能性もおおいにあった、と後になって姉妹みんなで恐ろしかった。

のちに朝鮮に行ってから牛肉を手に入れることは比較的楽になったが、主として豚肉を食べる中国で、しかも戦争のさなかに一定期間ごとに新鮮な牛肉を手に入れることだけでも容易なことではなかった。父は自分で牛肉の筋などを取り分け、細かく刻んでいた。煮るのは電気ではなくても良いわけだから、ほかの人們が七輪を馬車に積んで、昼も夜もコトコト煮てエキスを取っていた。暖かだし良い匂いを嗅ぎたくて私達もやりたかったが、馬車が倒れたら危険だからとやらせてもらえなかった。

母はエキスを取ったカスの、柔らかくなった牛肉で佃煮を作った。エキスを取ったカスは味が無いけど、カスでも肉には違いない。私達は作業の日が待ち遠しかった。

そうしておいて村に泊って電気を取り込み、ふ卵器を使うのである。

ゼラチンを入れたエキスをシャーレーに分けて培養基を幾つも作り、先端に小

さな輪が付いた銀でできている特殊な棒で、日が経って弱ってきた「素」の菌を塗り付け、培養してやるのである。

その都度父たちは木箱を降ろし、荷物を解いて顕微鏡や器具を取り出すのであるから、手間のかかる仕事であった。が、幸いにして時は冬だ。小まめに培養してやれば、暑さに弱い菌を寒い大地が守ってくれるのだった。

だが、電圧が不安定なうえに停電はあったりまえ、その上戦時である。いつなんどき何が起るか予測はできかねた。しかし、この戦争が終わり、ワクチンが作れるようになる日まで、なんとしてもあの子の菌や、危険を冒して手に入れてきてくれた大切な菌たちを生かしておかなければならない義務があるのだ。

そうはいっても、旅に出るからの父はいつでも、八路軍の幹部の言うなりに協力的であったというわけではなかった。

(え・早乙女光子)

サークル だより

関西サークルだより

関西サークルは「たまり場」を持ちました。

「自由にお喋りしたり、勉強したり、仕事ができる場所を貸して下さい」と呼びかけたところ、同じわいふの会員の方から「空いている部屋があります。どうぞ」と連絡があります。有志数人で、

ゾロゾロ（ゴキブリではありませんが）と見にいつて気に入り、早速借りることにしたのです。

大阪市内、地下鉄四つ橋線、本町駅より走って一分（歩いてもいい）、とっても便利なところですが、私には、ここを単なる「女のたまり場」にしなくてはなりません。

これからは「女の時代」ではなく「男女共存の時代」、女ばかり集まってワイワイガヤガヤもいいで



すが、老若男女、書きたい人、書ける人、いろんな集まりにし、そして経済力をつけ、一歩ずつステップアップできたら、と思います。そして関西サークルに限らず、いろんな人が、いろんな企画を考えて下さることを望みます。

当面は、勉強会や文章教室を計画しています。心の触れあいを求めて、ぜひ参加して下さい。

住所 550 大阪市西区靱本町一の一四の七清美ビル2F・Tel〇六一四四三―四四四一 FAX〇六一四四六―六〇四五 WRITING & PLANNING PRODUCTION

ぐるーぶ・日下恵子

※カンパを募ってますのでよろしく（現金、切手、ハガキなど）。

東武・日比谷線沿線の わいふ読者の方へ

月一回（第二水曜日午前十時～十一時四十分）わいふをもとに話合いませんか（現在四名）。

一つのことに関しても皆各々違う見方を持っており、話し合うことで、自分の考えの足りなかったところや、考えもしなかったことに気付くのはとても楽しいと思われるあなた、ぜひどうぞ！皆で考えを持ち寄って楽しいサークルを作りませんか。

堀場美代子 Tel〇四八九―二四一六九〇四 草加市谷塚町四二―四二（谷塚駅より徒歩六分、谷塚は竹の塚と草加の間の駅）



投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

生きてます 活字人間

——目の鱗、落としてますか？

手づくり日本食シリーズ

健康食お茶

大石 貞男・他著

東京都八王子市 和田 好子

伝統的な健康飲料、お茶の楽しみ方と、家庭でできる手づくり法を教えてくれる本。

現在日常の飲料であるお茶は、昔は薬用であった。じっさい種々の薬効があり、茶の産地ではガンが少なく、とくに胃ガンの死亡率が低い。ビタミンCが多いため、

高脂血症、動脈硬化を防ぐ。二日

酔いに利くことは昔から実験済み。

薬効の解説に始まって、日本人の暮らしの中のお茶の歴史、地方々々で作られている珍しい郷土名物茶の紹介と製法、上手なお茶の選び方と保存法、おいしいいれ方など、お茶百科辞典という感じで

ある。一冊家庭に備えれば、毎日のお茶をより楽しく、おいしく飲むことができるだろう。

さらに後半には、珍しい「お茶の食べ方」が載っている。昔から各地方に独特のお茶料理があった。

茶めし、茶がゆも本当のつくり方を知らない人が多いだろう。伝統、本格の炊き方が出ている。とてもおいしそう、山かけ、大豆入り、さつま芋入り、さけ入りなどのバラエティも紹介されており、さらに抹茶みそのぬた、抹茶マヨ

ネーズサラダなどの料理、お菓子と飲み物もさまざまある。

最後に、家庭でお茶をつくる法が出ている。庭に二、三株の茶の木を植える栽培法、摘み方、むし方、もみ方、乾かし方、炒り方。プロのようにしてできなくても、素朴な味がするのでは？

筆者は農林省のお役人、静岡県茶業試験場長の太石貞雄氏をはじめ、農学博士で管理栄養士の畑明美氏、医学博士、薬科大学教授の林栄一氏と、斯界のオーソリティを揃えたベストメンバードである。

農山漁村文化協会 一〇〇〇円



ルポルタージュ

進学塾

中学受験を考える父母へ
早川裕子＋グループわいふ

千葉県船橋市 森本 邦子

読み始めたらやめられなくて一
気に読んでしまった、という本に
ときどき出合う。

塾に関する本など関心はなかつ
た。民教審で活躍された早川裕子
氏の本だから、ベラベラとなめ
読みするつもりでページを開いた
のは夜の十二時を過ぎてからだっ
た。ところが「はじめに」の箇所
を読んで、きちんと読もうと心変
わりした。そして、全部読み終え
て枕もとのスタンドの灯を消した
のは夜明け前だった。

翌日から、仕事に出かけるとき、
カバンの中に入れておいた。
ある日、電車のつり革にぶらさ

がりながら読んでいたら知人に肩
をたたかれた。「塾の本ね。我が
家も今悩んでいるのよ。参考にな
るかな?」「さ、どうかな。何度
読んでも面白いのが実感だわ」
ある集会で、「塾の勉強に疲れ
て授業に身の入らぬ子が多くて困
る」とこぼす教師に出会った。

帰り道、「塾の実体を知りたい
とは思いませんか?」本をかざして
みた。惘然として「別にイ」。「ク
ロネコヤマトが国鉄も郵政省もガ
タガタにしたと同じことが起こり
そうな予感があるのですけど」
「そんな恐ろしい内容の本なんス
か?」「スリルとサスペンスがい



っぱい。希望も湧いてきますわ」
我が家では台所のテーブルにボ
ーンと置いた。ピアノとエレ
クトーンと書道の月謝で精一杯の
母をみて、塾まで行きたいと言
い出しかねている高三の娘が最初

平和を求めて

港区学童集団疎開

東京都港区立みなと図書館編

高度成長に便乗して、今や日本
は経済大国として、世界の人々か
ら注目を浴びています。

に読んだ。娘が浪人経験もある社
会人の兄に薦めた。息子は父に薦
め、私の作戦は成功した。

教育と産業が結びついて塾とい
う結果が生まれたのなら、原因は
社会のどこにあるのか。学校教育
は何をめざせばいいのか。三人三
様の意見を熱っぽく語ってくれた。
「いかがで?」と薦めた人に感想
を聞き出すと、その人の虚飾のな
い素肌が見える。ゲン二この一冊は
リトマス試験紙の役にもなる。

有斐閣新書 六九〇円

東京都板橋区 篠木千枝子

豊富な品物を自由に選び、次々に
開発される新製品を買い求める、
という生活状態にいつしか慣れて、



そうしなくてはならない錯覚まで起きてまいります。四十年前には、とても考えられないことでありました。

八月になると原爆記念日が訪れ、被災者慰霊祭の状況が、テレビに映し出され、沖縄女子挺身隊の実話が報道されたりしますが、年中

行事の感じがしないでもありません。もう二度と想い出したくない戦争中から戦後にかけてのこと等……。

しかし、今年五月に、私のところに一冊の記録書が、港区教育委員会から送られてまいりました。題は「平和を求めて」昔の芝区・麻布区・赤坂区の二十八校の学童集団疎開の当時の写真・日誌・学童の図画などが、二百十六頁にかけてぎっしりとまとめられていて、六十一年度卒業生全員に卒業記念として、配布したとのことでした。

私は、読みかけて、次第に四十年前の過去の世界に入り込み、一晩中想いを走らせておりました。帰るあてのない親子の別れ、物資不足の生活、シラミ退治に追われていた日々、一番困ったことは食べ物で、献立表の一部を見ると、朝はナスの味噌汁、おかゆ、キュウリの漬物、昼めきで、夜はかぼちゃの煮付け、雑炊、キュウリの漬物、病人も続出で、亡くなってその土地の寺に葬られたままの学童もあったと聞きます。

同じ年齢の現代っ子が、いつま

た、このような時代に遭遇するか、否定はできませんが、この記録は、原爆や沖縄体験や中国孤児に劣らないもの、私も資料を一部寄贈した者ですが、十か月を費やして編集にたずさわった方々、区の六年生全員に配布の企画を立てていただいた教育委員会の皆様に感謝するとともに、永遠の平和を祈らずにはいられません。

東京都港区教育委員会発行 非売品

連絡先 東京都港区立みなと図書館 電話〇三―四三七―六六二―

●最新刊

わが子の進路を考える

山田暁生 著

偏差値は絶対的なものではない。とはいえわが子の進路では一ランクでも上を望むのが親心。その親心に進路指導のベテランが訴える進路と生き方。定価九八〇円

〒112 東京都文京区春日2-17-3 電話03-815-5511 (代)

あゆみ出版

中学生の勉強法

石井郁男 著 九八〇円

実力10倍アップのひけつ公開!! 各紙誌絶賛!! 6万部

愛と性教育

村瀬幸浩 著 定価二二〇〇円

いかに「性」が大切なものか、子どもに語ることがどんなに重要か、お母さんたちにわかりやすいことばで語りかける。

投稿ホットライン——人には添ってみよ、馬には乗ってみよ

遊び来しよ

楽しいこといっぱいヤル、ヤルとき、やれば、やれ！

日光を見ぬうちは 結構と言うな

埼玉県草加市 堀場美代子（42歳）

六月四日、友達と二人で日光へ。朝七時に家を出、東武線で東武日光に九時過ぎ着。バスで湯元温泉まで。湯の湖の周りのハイキングコースを歩いて湯の滝へ。踏みしめる土が柔らかくうれしい。

釣り人に、釣り上げている魚の名を聞

いたり、湖岸のしゃくなげのうすピンクに目を奪われたり。湯の滝の休憩所で、鮎と鱒の塩焼きとビールを買い、皆がカメラを構えたりしている滝正面の展望所から少し下りて、木々の根元に敷物を敷き、持ってきた食べ物もひろげ、四十五メートルという滝の飛沫を感じながらカンバイ！

お腹を満たした後、戦場ヶ原の木道の自然研究路を歩く。湯元へ向かうバスの中からも目についていたズミがたくさん。薔は紅くボケに似ている。開くとピンクから白の花弁で木によって色が少しずつ

違う。

行き交う人とどこから来たのか尋ね合ったり、湯の川の釣り人に釣果を聞いた（大てい釣れてない）、ズミの花にカメラを向けている人にあっちのズミはもっときれいだったと情報を提供したり。

やがて両岸に山つつじの薄紅が映える白き流れ……それが竜頭の滝になる。またまた滝を見上げる茶屋で一服。

「ここはお団子が美味しいのよ。だけどまだ食べる物残ってるからね」と、ザック



▲戦場ヶ原

の中の果物やおにぎりをたいらげる。

白いしぶき、両岸の木々の緑、つつじの薄紅、滝の瀬音が心地良い。

バス停へ下りて行く間に、オレンジがかったつつじ。「あたしはこっちがいいな」と友達。それまで二人で自分のことを花にたとえたらなんだろうと考え、薄紅のつつじが見えてきたころ、私が「私はこれ」と言った後だったので二人でニヤリ。

できたら菖蒲ヶ浜で船に乗り、中禅寺湖を楽しむつもりだったが、時間をオーバーしたため、バスで東武日光へ直行。東武日光発十六時五十分の快速で夜七時前に帰宅。ズミを満喫した梅雨前の一だった。

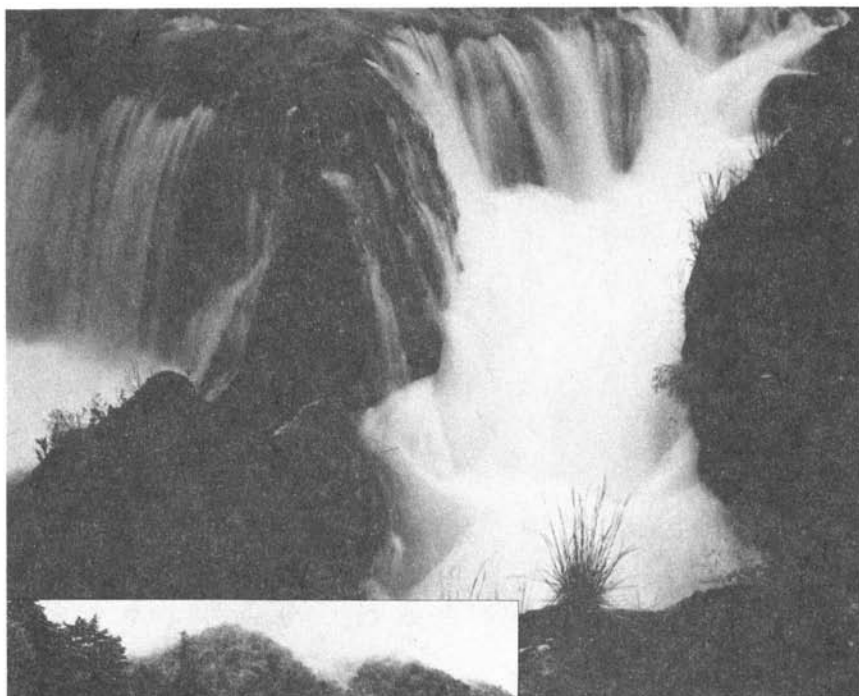
東武線 谷塚⇄日光 一七八〇円

バス 東武日光⇄湯元温泉 一三八〇円

竜頭の滝⇄東武日光 一一〇〇円

交通費計 四二六〇円

(写真提供 東武トラベルサービス株式会社)



▲ 湯 川

◀ 湯ノ湖

投稿ホットライン——笑う門には福来たる

ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば

ああしんど!

水子供養

兵庫県姫路市 窪田 潤子（47歳）

方向音痴の私は、義姉の産見舞いに一歳半の息子を乳母車にのせて、国道を義姉の産院と反対の方向へ二時間も歩き続けていた。

そのときの私は妊娠四か月であった。足がだるくなって、目指す産院が見つからず、やっと人にたずねてみてひきかえしていったが、翌日少し出血していた。

病院で「切迫流産」と診断され、「絶対安静」を言いわたされた。

息子は乳児院に預かってもらって、私は昼食は近くの寿司屋で出前をとり、夕方は夫が息子連れて帰り、台所に立ってくれた。公務員官舎に住んでいたのので、隣近所の方々が、交替で昼食を運んで下さったのは、有難かった。

産婦人科の先生の往診で、毎日流産止めの注射をしてもらい、二週間がすぎた。

しかし、いつまでも隣近所の方々のご

厚意に甘えてもらえず、夫は、私の母と姑に応援を頼んだ。

母は私をみて、夫に「急に出血したら命がないから、救急車を呼んで、大きい病院へ連れて行って欲しい」と、手を合わさんばかりに言っていた。そして私に「夜中でも病院はあいとるさかい、夜が明けてからやなんて辛抱したらあかんでえ」と言った。

母よりすこし遅れて姑が枕元に立った。母は姑に遠慮するように帰っていった。母の心配がなくなつて姑は、やっと座つて厳しい声で言った。「人が見舞いに來とるのに、寝とるいうことがありますか。ちゃんと起きて座りなさい」私は「絶対安静といわれてるので……」と言いかけると、「人を何と思とるのか」とわめかれた。その剣幕に驚いて、私は二週間ぶりに座ってみた。頭がふらつくが「すみません、壁にもたれさせて下さい」と断わつて、壁に背をもたせかけた。

姑は「主人や子どもにこないな迷惑か

けて、それで一家の主婦と言えますのか。聞けば近所の人にも、ご飯作ってもらったりして。そんな子はおろしてしまたらしい。胎^はにようおらんような子は、産まれてきてもまともな子やない。

私は、今、ここに来る前に、そこらの産婦人科によってきて、なんぼでおろしてくれてか、値段聞いてきた。ン万円やそうや。今から行きなさい」と、私の腕をつかんだ。

私は泣いて頼んだ「よう、おろしません。片輪の子でも、私の子です。育てます。殺しとないんです」必死の命乞いであった。姑が鬼に見えた。泣き伏してしまった私を見て「二度とあんたの顔なんか見とうない」と、玄關の扉を音を立てて閉めて帰っていった。

夜中一時ごろ目がさめた。昼間の姑の言葉が思い出されてくる。「おろしてしまたら、よろし」「産まれてきても、まともな子やない」「なんぼで、おろしてくれてか」「二度と、あんたの顔なんか」

私の胎に宿った生命は、生まれれば姑の孫である。「嫁が病気をすれば、母は娘の身を案じ、姑は息子の身を案じる」というけれど、これほどまでの言葉で姑に叱られるとは思わなかった。

しかし、この状態で、産み月まで、頑張れるだろうか。一歳半の息子も淋しい思いをさせるしと考えると、私は、悲しさとも口惜しさとも分らない感情におそわれて、声を出して泣いてしまった。

そして、まだ見ぬ我が子に話しかけていた。「どうか、母さんを助けると思っ、自分の力で流れておくれ。母さんは、自分の手でお前の命を絶つことはできない。縁あれば、また、次の世で、私の子どもとして宿っておくれ。弱い母さんを怨んでいいよ。私はもうお前を守ってやる力がないのだから」

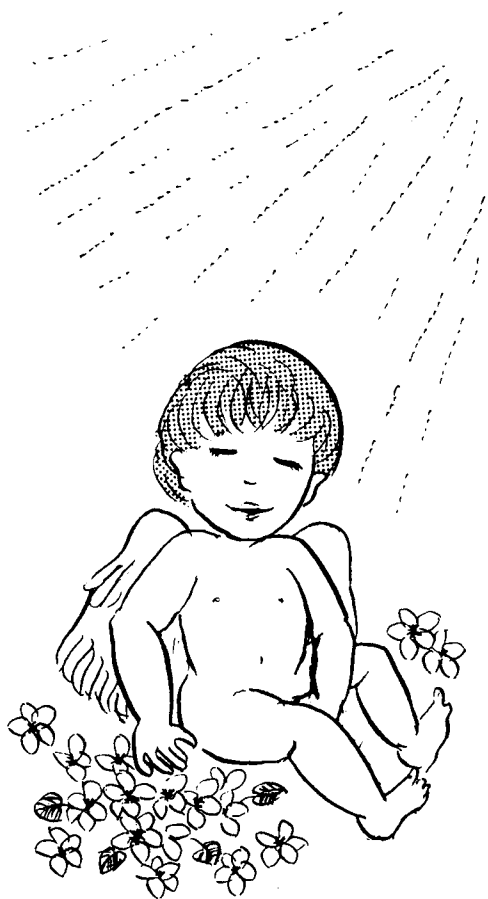
精神的なショックが胎児の安定を破ったのか、弱い陣痛が始まり出した。三十分一回、五分から十分の痛みがおこっている。四時近くなると、十五分間隔に、

かなり激しい痛みになっていた。

二階に寝ている夫を起こす気はなかった。姑が、私の腕をつかんで産婦人科に連れて行こうとした現場にいても、反対しようもしない夫には、絶望していた。

母が「急に出血したら、命がないから」といった声も頭の隅では聞えていたが、私はもう五か月児になっている我が子を、産婦人科で、メスや鉗子で切り刻まれないうで、きれいな身体で、この布団の上で、産みおとしてやりたいと願っていた。痛み腹をおさえて、裁縫箱から裁ちバサミを敷布団の下においた。へその緒は、せめて母の手で切ってやるよと。もしも出血多量で自分が死んだら、一歳半の息子はどうしよう、とは思ったけれど、今、私の身体から出ようとしているのも、我が子である。

「自分の力で流れておくれ」と頼んではみたが、もしもこの子が私を恋しがるのなら、私はこの世にいるわけにはいかない。この世とあの世から、二人の我が子



にひっぱられたとしたら、私はどちらをも選べない。その判断は、子どもの命を預かる何者かにたくすより他に方法はない、と布団の上を転がりまわりながら、だんだんと意識を失っていった。どれくらい時間がたったのか、周囲が明るくなって目がさめた。

下腹に、何か異物感がある。身体が命ずるままに便所へ入った。便器にしゃがみ込むとヌルリとした感覚を股間に感じ、何か大きな物がボトリと便器の中に落ちた。

薄赤い血の中に、魚の子のような物が浮いている。片手では、ひろい上げられ

ず、両手ですくい上げると、熱い。あわててトイレットペーパーでつつみ、主人を呼んだ。

主人の車で、産婦人科に運ばれ、その流れ出た物を見せると、「胎盤が先に流れ出てしまいましたな。お気の毒でした。今から、子宮の中を掻爬します」と言われた。

「麻酔をかけますからね、一から十までの数をかぞえて下さい」と、顔の上に大きなガスマスクのようなものをあてがわれた。数をかぞえているはずの自分の声が聞こえなくなったとき、自分の足の間に、大きなモーターのような音がして、赤ん坊の泣き叫ぶ声が聞こえた。「痛い、痛い、おかあちゃん」私は涙が止まらなくなり、自分の涙の熱さが、便器からすくい上げた胎盤の熱さと同じだと感じながら、「ごめんしてえ、ごめんしてえ」と泣きわめいていた。

手術室から出てくると、夫から連絡をうけた母が、目をまっ赤に泣きはらして、

私を見て合掌した。一時間ほど安静にさせてもらって家に帰ったが、赤ん坊の泣き声が聞こえてきて、悲しかった。

今、あの子の霊は、この宇宙のどのあたりにいるのだろうか。あの子の命とひきかえにこうして私は生きている。申し訳ないと思う。もし私の命がつきて、あの世とやらへ行けるのなら、五か月の胎児のままのあの子を、しっかりと抱いてやりたい。そして、「自分の力で流れておくれ」と頼んでしまった非情な母を許してほしい。

「今、お前の命を絶とうとしたおばあさんは、脳硬塞の後遺症で、運動機能が侵され、二年前におじいさんには先立たれ、食べるだけの毎日なんだよ。七十七歳になって、母さんと暮らしていて、死にたい死にたいって口癖のように言ってるよ。お前のことは忘れてるんだろ。ね。でも、許してやってね、もうすぐそちらへ行くと思うけれど……」

何不自由ないくらし

長男を妊娠中に三キロもやせ、出産後一年たった今、もとの体重より十三キロも減り、百六十センチ、三十八キロ、生理もとまったままで、摂食障害で神経科に通う私。何が私をそうさせたのか？

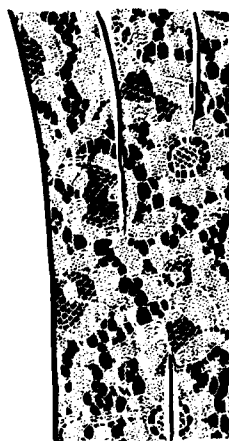
大学卒業後一年で同級生結婚をし、転勤族の夫についていくため、郷里での教員生活を断念。なごやかな社宅で、毎日、お茶会や昼食会とのんきな生活、やさしく、文句ひとつ言わない夫と手のかからない長男にめぐまれ、何不自由ないくらしのはずなのに……。私はそれがたまたらないのだ！

結婚するまでは、夫と同等に働き、同等に議論もたたかわせた。今は、みみっちい家計のやりくり、おかずのこと、子育ての話題しかない私に対し、夫は、ぶ厚い経済書を読みふけり、とうとう私の

千葉県船橋市 坂本 由美（26歳）

理解できないレベルの世界へといってしまった。もちろん家事だって、夫の仕事におとらない立派な仕事だとは思っている。けれど、夫のためにアイロンかけたり、部屋をかたづけたり、料理したりしていると、なんだか夫の召し使いになったような気分で、しゃくにさわって、家事に熱中できないのだ。そこで、暇にまかせて読書にふけると、子育てしながら、社会にでてがんばっている女性の話にあせりを感じてしまう。社宅は共働き禁止が暗黙の了解事項。

その結果、私のイライラは、すべて夫に向けられ、夫の帰ってくる足音がきこえただけで、ドキッとし、いっぺんに気分が悪くなり、いっしょだと食事もできなくなり、当然妊娠以来夫婦関係もなし。誰に相談しても、また自分で考えても、



夫には何の非もなく、悪妻としか言いようのない私。毎朝、フトンの中で夫を見送った後は、今日こそやさしく「おかえり」と言おうと反省するけどできない。内職も、資格取得の勉強もやったけど、それも一時しのぎにしかならなかった。夫を選ぶか仕事を選ぶかで、世界に一人しかない夫を選んだ私だけど……。

日本国憲法では「何人も、公共の福祉

ああ親子・夫婦・家庭とは

神奈川県川崎市 十文字美恵

玄関のベルを続けざまに三つ押す音で目が覚めた。時計をみると六時、あの押しがたは前のおばあさんに決まっている。

もしかしたら、急におじいさんの具合でも悪くなったのかと思い、飛び起きて、慌てて玄関を開けた。

タオルを首に巻き、腕で額の汗を拭きながら、腰を曲げたモンペ姿のおばあさんが笑顔でそこに立っていた。

に反しないかぎり、居住、移転および職業選択の自由を有する」ってありましたよね。いいんでしょうか？ 日本の大企業は、こうも社員の居住の自由をうばって……、私は夫の会社にふりまわされたくない。私は自分のひとつしかない人生をもっと自分の意志に忠実に生きていきたいのです。

「これ、一つだけど、シゲルのお土産」といって出したのは、いつもの「いろいろ」の包み紙である。

連休を前に名古屋から三男が帰ってきたことが嬉しくて、一刻も早く告げたかったにちがいない。

私はムーッとして、にこりともせず形ばかり「ありがとう」をいってから、ドアをボタンと閉めて、また布団にもぐ

った。

「もうっ、今朝は久しぶりに寝坊できる
と思っていたのにつ、全く非常識な、何
がお土産よ、今度という今度は完全に
アタマにきた！」

独りごとをブツブツいつていたら、す
っかり目が覚めてしまった。

二十数年来のご近所同士、私の家と道
路を挟んだ、お向かいさんの老夫婦のこ
とである。

三男が帰ってくることは一週間も前か
ら聞かなくても、ちゃんと分かっていた。
二階の雨戸が開き、バタバタとはたき
を叩く音が聞こえ、ガラスをキュキュと
磨き、畳をゴシゴシ拭き、布団はもう三
日も乾し続けていたのだから。

きのうの朝早くには、普段開かずの車
庫の扉を全開にして、タオルではちまき
をしたおばあさんが、せっせと掃除をし
ていたこともちゃんと知っていた。

近所の人は誰だって「ああシゲルさん
が帰ってくるんだナ」とわかっているの

だ。

夫婦は揃って七十八歳。

おじいさんは、今は鉄冷えといわれる
鉄鋼の、良き時代に四十年を勤め、定年
後は下請けの会社に十余年、家にいるよ
うになって十年は過ぎた。

おばあさんは専業主婦、忙しい、忙し
いが口癖でクレゾールを使って掃除をす
る。家中がクレゾールの匂いがする。洗
濯ものはいつも漂白剤を使って真っ白で
ある。

ここに越してきたのは、ちょうど定年
になったころだから、土地も家も退職金
で買ったのかもしれない。

越してきて間もなく、私と同じ年の長
男に嫁がきて、孫が生まれたが、それか
ら一年も経たずに、長男一家は家を出て
いった。嫁姑のよくある話だったらしい。
以来、嫁さんももう二十歳を越したはず
の孫も、ついぞ見かけたことはない。

二男は婿養子に行き、三男はしばらく
は自宅から通勤していたが、十年ほど前

から名古屋に転勤になったのが未だ独
身、以来夫婦二人で暮らすようになった。
ときどき、お茶に呼んでくれるおばあ
さんの話は決まって、三人の息子を大学
に入れた手柄話と自分の姉妹や実家の自
慢話になる。

最近では、おじいさんの悪口をきかさ
れるので、お茶に呼ばれても、理由をく
っつけて避けるようになってしまった。

「鋼管の職工の給料で私立の大学に三人
も入れるのは、飲んだくれのおじいさん
の甲斐性ではできないよ」が口癖で、そ
れ以外の話はめったにすることはない。
「おじいさんに、もう少し優しくしたほ
うがいい」などというおもうものなら、プ
ッとふくれて口を利かなくなってしまう。
他人の話聞く耳を持たない人なのだ。

二人暮らしになってからの十年の間に、
おじいさんは軽い脳溢血を三回起こした。
鼻血が止まらなくなったり、畳につまず
いて転んで、肩関節の脱臼骨折をしたこ
ともある。

そのたびに夜でも夜中でも関係なく、私と呼ばれていく。必要があれば入院させ、自宅で手当てができる程度であれば、朝晩に通ってめんどうをみる。

今まで四回入院した。

おばあさんは、血圧が高い、膝が痛い、腰が痛い、胃腸が悪い、目がショボショボする、風邪をひいた、下痢をした、食欲がない^{えし}、常に数えきれないほどの訴えをもってせつせと病院に通い、数えきれないほどの種類の薬を服んでいる。「血圧を測ってくれ、咽にルゴールを塗ってくれ」などといってくる。

私が看護婦だからである。

つい一か月ばかり前のことである。

私の帰りを待っていたらしく、「ああ、やっと帰ってきた、十文字さん、おじいさんが吐くんだよ、もう三日になる」というので、寝ているおじいさんを見舞った。

枯れ木のようなカサカサの皮膚、虚ろな腫、顔に手を当てたら四十度近い高熱、

不整で結帯のある脈拍、荒い呼吸……脱水症状が極限に達している。原因は扁桃腺炎らしいが、全身状態が最悪、めったにあわてない私だが、このときばかりは、このまま逝ってしまうのではないかと思ったほどだ。

おばあさんは、血圧以外は病気とは思っていないのだ。

すぐ入院させて大事にいたらなかったが、このとき、上二人の息子呼び、一体誰が親を看るつもりかと糾した。

高齢と病弱、いっどうなるかも知れないのに近所ばかり当てにされても責任は持てないこと、子どものためにばかり生きてきた親をまさか見捨てるつもりではあるまい、とかなりきつい調子で話したのだが、結局おじいさんを病院に置いたまま帰っていった。

それ以来、私は今までより頻繁に呼ばれるようになった。喧嘩である。

「おじいさんが言うことを聞かない、朝二時に起きてしまう、もっと眠るように

注意してやって」とか、「医者に睡眠薬をもらってきなさいというのに、私の言うことを聞かないから十文字さんからいって」と、いう具合である。

おじいさんは「九時には寝てしまいうんだから、目が覚めてしまいうんだよ、誰にも迷惑かけるわけではないから、好きなようにさせてくれ」と、顔に縦のシワを寄せて哀願するように言う。

その繰り返しなのである。

おばあさんが心配なのは、おじいさんの体ではなくて、おじいさんが生きていなければ半分になってしまう、年金のことが心配なのではないか、とだんだん思うようになった。

「心配だ、心配だ」というおばあさんの目は三角に吊り上がっているのだ。

あるとき、私は二人に「子どもなど、当てにしないで、この家を売って医者と看護婦のついた老人ホームに、思いきって入きなさい」と勧めた。

「やっぱしねえ、子どもにこの家をのこ

してやりたいべよ、十文字さん」と、おじいさんは力のない東北訛でいった。

何を楽しむゆとりもなく、ひたすらに働き続けてきたこの人、爪に火を点すようにしてお金を貯え、子どものために使うことを生甲斐としてきたこの人。

その夫婦が七十八歳になって、妻は年金のために夫に生きてもらわなければと考える。

年に二、三回帰ってくる息子の、その日のために三百六十五日があるという生活。

明治末期から大正にかけて生まれた、私たちの親の世代の典型をこの夫婦に見る。

農地解放後の農村の二男三男は分家する土地もなく、京浜工業地帯へ裸一貫で倒れ込んできたのだった。学歴がなかつた。



たが故に味わった辛酸や屈辱は、我が子にだけはさせたくないとばかり、子どもの教育に全てを賭けたのではなかったか。その結果、ここにいるのは脱け殻になった老人二人なのである。

三十九歳で死んだ郵便局長だった父の老後を想像すべくもないが、女手一つで五人の子どもを育て、六十五歳のいまわのきわに、紙と鉛筆をといい、「死にたくない」と書いて死んだ母と、このおばあさんがどうしても重なってしまう。

生きていけばはば同じ年である。どんな生き方をしたであろうか、と思わずにはいられない。

夫はときどき、「前のおばあさんをみているとお前の老後をみているようだ」という。

男の子が三人いて、気の強いところもよく似ている、といって笑うのである。

「『ういろう』だけが挨拶にきて、シゲルさんの顔は今回も見なかったねえ」と、私はおばあさんにいった。

(え・新井様子)

情報 コーナー

● 女性のからだの本

— ディアボディー —

ご案内

浜松の女たちのグループ・ソナ
ティエイトが「女性のからだの本」
を企画、「月経」「妊娠」「出産」「不妊」
などについて、たくさんの方の女性の
ナマの声を集めて、A5版六十

一ページの小冊子を製作し

ました。(一冊三百円、

送料百七十円)

学校での性教育のサブテク
ストに、あるいは結婚プレゼン
トに絶対おススメ。もちろん、男
性にもO・K。産婦人科医や女子
医大生など専門家のお話もうかが
い、「読みやすくするために本」
と好評発売中。

誌上でたくさんの方たちとコミュ
ニケートして、女である自分の性
を前向きに受けとめるトレーニン

グをしてはいかがでしょう。

◆連絡先 浜松市高町二〇一—二

四 ソナティエイト Tel〇五三四

五四—二六—

● 映画「エミリーの未来」

上映会を開きませんか?

女たちの映画祭実行委員会では岩
波ホールでの上映終了後、全国各
地の女性たちへ、十六ミリフィル
ムでの上映会を呼びかけています。

東京での公開後は、大阪、札幌、

博多、名古屋では映画館で上映が

予定されています。が、その他の

地域では予定がありません。

「エミリーの未来」には、三世代
の女性が登場します。「自己犠牲

の上に愛を成立させるのではなく、
人生を全うすることができ、しか

も人との愛を結ぶ道は？」こんな
問いかけをしている映画です。

ぜひ上映会を企画して下さい。



◆問い合わせ先 151東京都渋谷
区代々木四—二八—五東都レジデ
ンス四一〇 女たちの映画祭実行委
員会 Tel〇三—三七〇—六〇〇七

● ネパールの人々を

古切手で救おう!!

ネパールの平均寿命は三十代で、
ほとんどが結核で亡くなっていま
す。

日本赤十字社では古切手を集め、
救済資金に当てています。古切手
二百枚で予防注射一本分です。ぜ
ひご協力下さい。

切手の回り五ミリを残して切りと

情報 コーナー

り、左記宛お送り下さい。まとめて、日赤に送ります。

◆送付・連絡先 177 東京都練馬区三原台三二一三七 小江鍾子
Tel 〇三一九二四一四六七四

●求人

神戸三宮で小
さな紅茶専
門店をし
ていま
す。

将来お店
を任せられ
る人募集して
います。

◆条件 男女不問 年

齢三十歳ぐらゐまで 経験不問

◆連絡先 660 尼崎市東難波町五

一三一 一 尼崎ガーデンハイツ四

〇四号 渡辺結城子 Tel 〇六一四

八一 四二五

●「介護」

—— 分かりやすい医療カウ
ンセリングと家庭看護の実
際を図解で学ぶ ——
石本茂監修 平出田鶴子編

長年家庭看護教育の普及につとめ
てきた、ホームヘルパー福祉協会
では表記の本を出しました。
医療のルーツから介護の実際まで
図解入りで分かりやすく書かれ、
すぐ役に立つ本です。

一家に一冊ぜひお備え下さい。
ご希望の方はハガキか電話で左記
宛お申し込み下さい。

◆230 横浜市鶴見区上の宮一—
八—七 ホームヘルパー福祉協会事
務局 Tel 〇四五—五七二—三二四五
◆定価 千円 送料二五〇円



●自主統合保育の会

「バブバブ」に

参加しませんか

障害児と健常児が、地域とともに
成長していくことを目的に会を発
足させて、今年で三年目を迎えま
した。

いろいろな出逢いの中で、お互い
が成長しています。

子供を預け合いながらいっしょに
考え、楽しいことをいっぱいやっ
てみませんか。

ボランティア活動・自主幼稚園・
統合教育等に関心のある方、ご連
絡下さい。

◆対象児 〇歳—（大人だけの参
加歓迎）毎月一回学習会（学習会
のみの参加可）

◆連絡先 東京都世田谷区赤堤三
一三一 一六 近藤佳代子
Tel 〇三—三二四—〇五四一

私の P R

●一緒に仕事をして、人の
輪・和を広げ、楽しい仲
間作りをしませんか

低公害の家庭用洗剤（洗濯、食器
洗いなど）、調理器具、栄養補給
食品、化粧品などを友人、知人を
通じて販売しながら、自分を高め、
助け合って豊かになっていくのが
目的の仕事。

小さい子供のいる方、外へ出られ
ない方でも、都合のいい時間と場
所で始められます。一〇〇パーセ
ント現金返済保証つき。最低一万
円あれば事業主になれます。人生
を変えることも可能です。

但し本気・根気・やる気のある方
ご連絡下さい。一緒にやりましょう。

◆東京都目黒区鷹番二一七一 一六
Tel 〇三—七二一—一七七 紅露
操子

50人の隣の女たちから

離婚しっかり本

グループくるくるのY編



女の人生

いつでもスタートライン

樋口恵子



カタログ式の離婚ガイドブックである。

関東、東海、北陸、関西など、日本各地に在住の離婚経験者五〇人から、六〇項目に及ぶアンケートを取り、インタビュもしてまとめたものだ。

何より実例であることが強味で、離婚はけっして異常なことではな

く、ふつうの結婚生活の中に、ふつうの顔をしてひそんでいるものだ、ということが分かる。

いわば結婚は離婚と隣り合せなのである。結婚して、子供がいて、家庭の形の中におさまっていさえすれば、女はしあわせなのだろうか？ ある回答者は言う、

「たった一度の人生のわけなんで

すから、結婚によって自分の生きていきたい道を妨げられたり、やってみたいと思う意欲を抑圧されてしまうのはたまらない」と。

あなたの結婚生活をふり返るためにも読んでみてはいかが。ガイドブックとして、法律、手続、福祉の親切的解説も載っている。

冬樹社 二二〇〇円(W)

先日発表された統計によると、日本人の平均寿命がまたまた延びたそうだが、一口に長寿といっても、ただ身を横たえて命がらえている状態では手放しには喜べない気がする。子育て後をどう生きるかが、これから老齢期を迎える我々にとって大きな課題といえよう。本書はそうした課題に应运て、三十代、四十代こそ後半生をめざし

ての助走の大事な時期であり、特に女性がよく口にする「もうトシだから」「まだ子供がー」という意識をまず捨てよう。またこのころからの体力の衰えは当然のことと素直に認め、長距離障害物競争のつもりで、与えられた未来の時間を目測しつつ息の長いランナーを心がけよう。と説いている。

筆者については改めて紹介する必要もないほど有名な人だが、現在「高齢化社会をよくする女性の会」代表として活躍中。柔らかな中にピリッと辛味のきいたあの独特の口調がそのまま活字に表われて、つい引き込まれて読むうちに、共鳴し目を開かせてくれる、そんな親しみ易い本である。第Ⅱ部の依萌子さんとの対談がまた面白い。

有斐閣 二二〇〇円(T)

育児不安をこえる

子育ての輪

池亀卯女



はじめて、女の視点で書かれた育児書にめぐりあった。一日中、赤ん坊と狭い部屋で向かいあい、相談相手もなく「育児書」にふりまわされてしまう若いお母さんが、この本を読んだらどんなに救われ

ることだろう。

「手ぬき育児」「母原病」「母乳のすすめ」などといった「批判」や「学説」が、母親の不安をかきたて、ぜんそくやことばの遅れなどで、自分の責任であるような気が

してくる現代の子育て状況。小児科医として、四人の子の母としての筆者が、さまざまな面で母親を呪縛している「俗論」の誤りを指摘する、バランス感覚に溢れた一冊だ。 ユック舎二二〇〇円(K)

ポストファミリー

(その他の関係)

桜井陽子



単身赴任の話はよく聞くけれど、夫が子連れで単身赴任、妻が一人東京に残って独身を謳歌するという話はついぞきかない。この一冊はその「夫の子連れ赴任」の話から始まる。

グループ・S・Rの代表でライターの著者は「男はしごと・女は家庭」の役割分業を拒否、二十代の後半から四十歳の今日まで、男と女の対等な結婚生活を模索しながら生きてきた人。その半生の歩み

が、生き生きした筆で、飾り気なくつづられている。対等な夫婦関係と風通しのよい母子関係が、どんな努力の上に築かれるかを知らせてくれる、楽しい読物である。

汐文社二二〇〇円(M)

まっすぐに生きるために

伊藤雅子



「公民館で大勢の主婦たちに接していてつねづね思うことのひとつは、女の活動はまるで空果ねらいみたいだなあとということ」の書き出しに思わず吹き出してしまう。国立公民館の職員として長く女た

ちの学習に関ってきた著者ならではの、主婦の生活に対する鋭い観察と、深い洞察と、そして巧まざるユーモアに溢れた一冊です。電車の中で人に席をゆずるとき、ゆずられるとき。あたりさわりの

ない会話を交わすだけが「いい関係」と思っているらしい若い主婦たち。日常の中から、生きることの深い感触をつかみ出すこの人の筆は、エッセイの極地ではないでしょうか。 未来社一五〇〇円(K)

ほん

ほん

わいわいガヤガヤ

タウン紙の編集長になって

埼玉県 N・M

いろいろなことがあります、いろいろなことが重なって、地元でタウン紙を出すことになりました。すでに二号が出て、いま三号の発行を目前に忙しい毎日を送っています。

この新聞は、以前のF新聞時代の編集長と二人で独立した形で発行しましたが、一号半ばにして独立は断念、結局、Bという奇妙な出版社に吸収され、そこをバックにいま、発行を続けています。私はその社員になり、現在、東京のタウン紙を発行して、二十万円の月給をいただいています。

そして、なんと空恐ろしいことに、三号からは、私が編集長になりました。以前、一緒に独立した彼（元編集長）は、現在、同じ社内での地元の出版を担当、実質的に私がこのタウン紙の編集長となったわけです。

そして、さらに恐ろしいことには、私の下に二十名のモニターという主婦たちがくっついていて、私プラス彼女たちで採算を考えたつ、主婦の草の根企業になれ……主婦のイベント集団をつくれ……そしていずれば、私に独立しろと会社はいうのです。私自身、女のネットワークをつくりたいし、主婦に仕事を出してあげたい、主婦パワーを生かしたいという強い要求があったので、この話は、のれない話ではないのです。

あのちょっと前まで、夫がどうの、主婦売

春がどうの……と言っていた「主婦がこんなになっちゃうのって、どう思いますか……？」「あなたのやりたいようにやりなさい」これがB紙の私に対する言葉です。

世の中って本当にわからないものですねー。

いまは、編集長っていったって、広告とりから原稿書きからイベントの企画までオールマイティにこなしている私です。社長とこづかいを一緒にやっているようなものですが、なかなかおもしろくて、しんどい毎日です。東販の方が、本でも出したらなんて言いますが、私がもし女のネットワークづくりに成功でもしたら、本になるかもしれませんね。でも失敗したら、「やっぱり主婦はだめだなあー」って言われておわりなんでしょうね。

そのうちに田中さんの講演会を、私の新聞



主催でやりたいですね。編集長対談なんてできる身分に早くなりたいです。誌代切れの文字も生々しい「わいふ」が送られてきたので、これを書いています、近々お目にかかりたいと思います。

あのー、夫のことですが、「編集長になったら離婚だ」「俺は出ていく、独自の道を歩む」なんてわめいています。この間、私がおつき合いで飲んで遅くなったら、すごーくおこって、荷物をまとめて、どこかに出ていったりしていましたね。でもすぐ帰ってきましたけど。

従順だったかわいい妻の変身に、かわいいような彼はついていけないみたいです。「つい六か月前まで君がそんな人だとは思わなかった」をくり返しては、「離婚だ！」とわめいているんですが、いま男性が余っているんだから、もっと冷静になればいいのに……と私は冷やかに見ております。

以前は「だれに食わせてもらってんだ」が十八番だったのに、このごろは「二十万円もらうとそんなにエライんか」が十八番です。

サブロー

大阪市鶴見区 家守 恭子（57歳）

四年余り前知人から「マンションに移るのでぜひ飼って欲しい」と頼まれて一匹の犬が来ました。南極越冬隊に参加し、映画「南極物語」で話題になったタロー、ジローの弟に当たるとのこと。すでに成犬で体軀は中型、太い四肢の先端は白、五等身の頭部に凛と張った小振りの両耳、半円を画きそり返った豊かな尾、黒く精気ある目。夫と私を見て「わん」と吠えた声にたじろぎをおぼえたものです。

「名は何ていうの？」

「サブローよ」

「ふうん、サブロー……、えっサブローなの」離婚して帰った娘の慰めにでもなれば、と飼う承諾をした犬の名が、別れた先方の舅「三郎」と同じとは少なからず驚き、このブラックユーモアに苦笑しながら、今さら改名して

は犬も混乱するだろうと由緒ある名のまま我が家の一員になりました。

朝の散歩は先ず足固めが肝心です。首輪でのけん引力はすくくもし轡掛けでそりを引かせたらさぞや威力を発揮するだろうと感心し、冬は庭石の上で昼寝中雪が降り積もっても一向構わず、眠っておりまして。何しろ地肌は綿毛が密生し、外側は粗くて固い毛がおおい、理想的な防寒衣に恵まれ、南極犬に選ばれたのも成る程と納得できました。

いわゆる教育、訓練は施されておらず、芸めいた所作は何もしませんが、人の言葉を理解し、特に夫の言うことはよく聞き分け、意に添おうと善意と期待を体一杯に漲みなぎらせるさまは涙ぐましいばかりです。子猫が貰われてきたとき「大事にするのよ」と目の前に置きますと、よちよち歩く猫の後をガードよろしく付いて歩き、水溜りに近づくと鼻先でそつと方向転換させるのです。昼寝中の鼻先へ子猫がじゃれて爪を立てると「きゃん」とサブローのほう逃げます。

こうして、大人三人の単調な日常に犬、猫

が加わり、うるおいある色彩を添えてくれる生活になりましたが、昨年秋フィラリアに冒され、獣医からしよせん長くはないと診断されました。投薬を続け、寒さに強い体質も利して元気に冬を越し、誤診だったかと希望をつなぎましたが、五月下旬腹水が溜り始め、食欲が落ちてきました。その朝も垂れた尾を少し振り、大儀そうに見送りに出ましたのに、夕方帰宅すると、敷居に上体を乗せ、留守を守る姿勢で動かず「サブロー」と呼びながら駆け寄りましたが、呼吸は止まっておりました。猫がせつせとサブローの耳あたりをなめております。一瞬思いました。

三郎氏は健在であろうか。

何事かあったのではなからうか……。

よし、何があったとして何としよう。

どうぞ何事もなくお元気でいらっしゃるようにとサブローを前にして思うことしきりである。北国で生まれ、関西で育ち、天寿を全うさせ得ず、八年余りで生涯を終わらせたのは本当に残念です。

心経を唱えながら白いバスタオルをそっと

掛け、庭のくちなしの花を散らせました。

今ごろはきつと地球を一またぎ、タロー、ジロー兄達に「はじめまして、弟のサブローです」と挨拶しているでしょう。

ほんもの

東京都江戸川区 高橋らんこ



私が初めて身につけた長さ四十センチの金のネックレスは、母が私の二十歳の誕生日にプレゼントしてくれたものである。「これからは本物を選びなさいね」というメッセージを添えて。初めて自分の肌に触れた本物の金の感触に感激し、毎日毎日首を通していたことは今でも忘れられない。

あれから十年。この十年をふり返ると、母のメッセージの重さをひしひしと感じる。

母が反対するのを押し切って結婚、親子断絶、そして——彼の目に余るわがままに苦しみノイローゼになりかけ「死」をも考えていた日々。しかし離婚したとき、それまでそばを向いていた（今考えると、じっと見守っていたのであろう）母が、両手で私の体をしっかり支えてくれた。「母の本当の愛情」だったと確信している。それから二年たってから相手に恵まれ再婚し、素直に生きられる幸せを感じている。彼に合わせよう、合わせようと毎日ハアハア喘いでいた生活が、まるで嘘のようである。

これからこの状態が続くかどうかはわか

らないが、少なくともこの暮らしが私の価値観で考える「本物の結婚」ではないかと思っている。また、そうでありたい。

母の伝えたかった「ほんもの（本物）」は「一流」という意味ではなく「生きていく上で大切にしたい真実を求めなさいね」ということだったのかと、やっと頭ではなく心で理解できた。

大好きなこのネックレスを見るたびに、将来、自分も子供に何か自分の生き方や考え方を、伝えられるプレゼントをしたいと秘かに考えている。

助 走

大阪市福島区 鷺洲 優子

「ほら、あのひと、メガネかけてて、神田川って曲歌っている人いるでしょう」

「ああ知ってる知ってる、夢一夜って曲を歌う人でしょう」
「そうあの人」

「私もきらいじゃないわあの人、おいちゃんって自称している人でしょう」

お互いに同一人物を思っていることは確かなのですが、固有名詞がどうしてもでてこない、話題が他に移ってからもお互いに、その歌手の名前を頭の片隅で探しているのです。家に帰り着いたところでタイミングよく電話が鳴り響きます。

「南こうせつよ」

いきなり受話器から弾んだ声が聞こえてきます、さっき別れたばかりの友です。

「私だってさっきわかったのよ」

と返します。

「お互い好きな歌手の名前も忘れるようになってどうしようもないわね」

私達は五十代。

「更年期、みんなで渡ればこわくない」

なんて言っていたその日がもう懐かしく思われます。

寄ると騒ぐと物忘れの失敗談を披露してお互いを慰めあっているのです。

トマトを夕食に使うとしたら、冷蔵庫の中で財布が冷えていたの、トマトは買い物籠の中よ。

朝、主人から預かった七万円入りの新札入り銀行の紙袋をエプロンのポケットにねじ込んで、洗濯のとき、ポイと屑籠に投げ入れ、一日中捜しまわって、ドスンとソファに沈みこんだ瞬間ひらめいて、探し当てた友、

「いいのよ、自分で気付いた失敗は失敗ではないのだから」

なんて詭弁を合言葉に傷ついた心をなめ合っている五人組なのです。

人間ドックの際、私はおすおすと告白しました。



「私、物忘れがひどいんです。動脈硬化ではないでしょうか」

「それで、どんなことを忘れますか」

「人の名前とかいろいろ」

「だいじなことも忘れますか」

「いまのところは……」

「心配いりません」

いつものメンバーの前でこのことを話すと、
「お目あてのコンサートは絶対に忘れない」
「法事や結婚式も主人は忘れても私は絶対忘れないわ」

とわいわいがやがや。

人間、自分にとって大せつなことは忘れないのだそうです。

全部を記憶する能力がなくなると無意識に選んで記憶するのでしょうか。

「仕事を持っている人は、忘れたりはいないのでしょね？」

いっぴになく深刻な空気が流れてきて、

「仕事はたいせつなことだから忘れたりはいないのよ」

「私達は緊張がたりないのよ、使わないでい

ると衰退していくのは当然なのよ」

あれから囲碁を習い始め、ご主人の相手が務まるようにまで上達した友の錆び止め対策。

自作の素敵な手編みのセーターで現われては注目の的だった友は、近所の奥様相手に教室を開き、気軽に編み方を聞けなくなった。

短歌に手を染め、いつもいつもメモから手を放さず参加する、心そちらの友。

本気で書道に精進し、めきめきと上達して展覧会でいい位置に作品が掲げられるようになってご同慶の友。

私一人が、椅子取りゲームの椅子を取りはぐれた子のように、いつまでももたもたしていて、あたりをぐるぐる見回しながらモラトリウム。

五十代は不惑でも円熟でもない、「四十、五十は鼻たれ小僧」この言葉がエンドレステープのように私の頭の中で回ります。

老いへの助走とは老いに抵抗することだと思いますが、これはまたまた、たいへんなことだと頭をかかえている私です。

遠くから熱い視線を

宮城県仙台市 高谷みつほ

皆様お元気になりましたか。友人遠藤史子さんのおすすめによりお仲間入り、「わいふ」二冊目だ。今落手いたしました。視力の衰えている目に大きめの文字がありがたいです。

やりかけの仕事放ってさっとめくったところが、久保さんの「六年間の沈黙」一気に読んでしまっ、合点、合点。あとはゆっくりね。おいしい物はゆっくり味わいたい、そんな思いです。

本つくりのむずかしさ、しみじみ感じているところなんです。「あなた書くひと、わたし読むひと」なんて言ってすましていられない。「わいふ」より学ぶべきこといっぱいいます。皆さまどうぞご自愛のうえ、がんばって下さい。遠くから熱い視線おくらせております。

宗教つまみぐい

東京都世田谷区 桜井 淳子



「わいふ」を購読して数年を経たが、その間あまり宗教に関しての投書は記憶にない。

二〇五号、「弱い者として生きる」山田恵子さん、二〇六号、「妻に宗教の自由はない？」匿名さんの二編を読み、宗教について真剣に取り組んでいる方々もいたのだとほっとした。

お正月には神社や仏閣に詣で、年頭の願いや、一家の幸を祈る。

春秋の彼岸やお盆には、坊さんにお経をあげてもらい先祖を供養する。

お祭りには、神社にお参りし、神輿をかついで町内をねりあるく。

七五三には、子供の幸のため、氏神様にお参りし、千歳飴を配る。

クリスマスには、一家団らんの中でケーキを切り、「ジングルベル」や、「聖しこの夜」を歌う。

神も仏も、キリスト様も合わせて行事としてしまう日本人の生活。

これは、外国人から見ると理解できないこ

とらしい。

「あなたの宗教は？」

外人と交際するとよくたずねられる。

「仏教徒」と答える。

「宗派は？」

「浄土真宗」

すまして答える。

宗教の押し売り屋が我が家に来る。

「キリスト様の……」

「私どもは仏教徒でございます。悪しからず」と、インターホンで返事。

「何々教ですが」

「家はクリスチャンです」

口は調法なもの、なんとも臨機応変に答えればよい。

私自身の宗教と言えば、熱心な信者や、信徒には叱られそうだが、キリスト教も神道も仏教でも、私の好みに合ったところだけが大好き。

「叩けよ、さらば開かれん——」

「狭き門より入れ——」

「野の百合を見よ——」

や、「山上の垂訓」などの訓の句を私の心の支えとしている。

浄土真宗の御文章の中にある「白骨の章」

は平家物語や、枕草子、つれづれ草の冒頭の句と同様に暗記している。

「夫、人間の浮生なる相を、——されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば……。阿彌陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏まうすべきものなり。あなかしこあなかしこ」

寺の娘として、寺の中の嫌らしさを見て暮らし、一時は毛嫌いし、反抗期には、わざとカソリックの教会に通ったり、聖書をこれ見よがしに父の目にさらし、怒りを買った。

英語を学び始めたころ、宣教師の家の聖書研究会に出席し、英語で聖書を学んだ。戦後の貧しいときに研究会で出されたケーキやクッキーは、フリーカンパセーションと同じように魅力の対象だった。

人間業を五十五年も続けていると、なんのために生きているのか？と哲学的な思いにかられたりする。

しよせん、人は生まれ、生き、土に帰するものと信じる。

草が萌え、花を咲かせ、実を結び、そして枯れいくように。

父の読経を子守歌として育った私。

その仏の道に背を向けた若き日々。

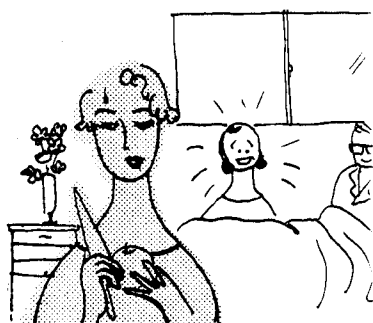
しかし、最近では、お経を聞くと、とてもなつかしい。

頑張ります

宮城県岩沼市 猪股てるみ(59歳)

二〇六号を夫の介護をしながら病院で読んでいます。初めて投稿したのが載っていたので嬉しくなりました。

六十三歳の夫は植物人間に近い状態になり、これから長期間の入院生活になると思います。



定年退職後病氣勝ちで入退院の繰り返しだったので、旅行もせず、何のために働いてきたのかと可哀そうになりました。

人の好い夫がなぜとよく落ち込みましたが現在は振っ切れて心静かに介護に当たっております。お見舞いに見える方は「たいへんです」と言いますが、その言葉はもういらなと思っています。今必要なのは、マイペースで介護している私のペースを乱さないで欲しいということです。

頑張ります。

たかが少年野球というけれど

大阪市住吉区 北川 時子

小学校二年のときから、地域の少年野球チームに参加した長男が、突然辞めると言い出しました。

理由は、担当のコーチが、練習に出かけた子供達のうちの、補欠組だけを帰したことにじまります。

帰されたあくる日も練習があったようですが、それも知らされずに、次の日参加した練習でも、すぐに「帰れ」と言われて、帰りました。

訳がわからないままにも、(もう自分はチームにはいらないのだ)と思ったようです。以前から似たようなことが続き、練習も見ているだけという日もありました。

試合に勝つためには、レギュラー級の子供達の練習をするのが精一杯ということらしく、どんなに態度が悪く、練習をさばる子でも、

上手であれば、出場していました。

不器用ですが、まじめだけがとりえの長男は、朝練、夕練、休みなく頑張り続け、六年生卒団までは、通うつもりでいたようです。

十五人もいれば、六人が補欠は当たり前。でも十五人が力を合わせて、はじめて野球が



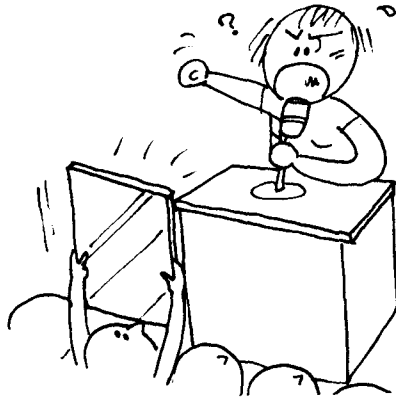
できるのよ、とはげまし続けた親のことばも、この子にはむなしく聞こえる日があったのでしょう。彼が涙を浮かべて、「もう辞めたい」と言ったとき、それに気がついたお粗末さです。

地域の中で波風たてるのはよそうと、黙って辞めるつもりでしたが、せめて子供の気持ちを伝えて、これから先こういうことのおこらぬようにと、補欠組の親達が、監督のもとへ話し合いに出かけました。

結果は散々でした。ポランティアであるコーチに不満を言うとはけしからん、よろしい、辞めてもらいましょう、というわけである。我が子を含めて、四人の子供達が辞めました。スポーツを通じて、健康な心身の子供を育てようという、親達の願いは届きませんでした。チームの他の母親達の反応も、きわめて冷たいものでした。子供達が大人を信じられないというのは、悲しいことです。たかが少年野球というけれど、大きな問題が秘められていると思いませんか。

烈女に化粧は似合わない？

東京都世田谷区 西山美沙世



先日私は、とあるフェミニズム運動の会合に初めて列席しました。フェミニズム運動と言っても、女性解放は必要なことですが、男女同権には、無条件に賛成というわけにはいかなないと考えている私には、場違いな会合だ

ったかも知れません。その日のパネリストの一人がMさんであり、お書きになるものを通してMさんのファンだった私は、ノコノコ出掛けたわけでした。

一体全体、フェミニストを標榜するからには、女らしくふるまい、装うことは許されないものなのでしょうか？ 女らしいってどういうこと？ 化粧するって何のため？ 美容院に行く暇もお金も、もったいない！ 等々という批判や反論が聞こえてきそうですが、ハキハキものを言う、キラキラした瞳の烈女達を眺めて、私は、せめてもうちょっと、格好に気をつけたら、もっともっと素敵になるのになあと、内心思いつつ、「安易に結婚したら、女はお終いです！」などという議論を聞いていました。

化粧しない女性というと、中山千夏さんをお思い出しますが、あの人だって、おしゃれ心はあるんですね。男性にひけをとらぬ活躍をしている方々、例えば、土井たか子さんのファッションブルなこと、森英恵さんは当然としても、犬養道子さん、高橋展子さん、

今井道子さん、木村治美さん、俵萌子さん、いずれ劣らぬ、おしゃれな方々ばかりでしょう？

でも、その会合の、元氣印の彼女達は、一様に「女」を自ら排斥することで、意志の強さを示しているように思われました。まず、口紅ひとつつけていない素颜に、洗って放しで済むような短いザンバラ髪、黒か無彩色の上着に、ジーンズかパンツ、アクセサリーなんか一つもつけていないという清々しさでした。清々しいというのは、ものも言いようというところで、殺伐としているというか、寒々としたという印象を受けたというのが本音です。

私は、何歳になっても、否、年をとればなおさら、「女」としての身づくろい、おしゃれ心は、失うべきでないと考えます。女の人って、どこかふんわり柔らかくて、いい匂いがして、明るく、きれいでいて欲しいと思います。シミや肌色のくすみが見える程度の化粧はなかったら、顔を明るく見せる程度の化粧はしたほうがいいし、白髪も目立ってきたら、

ストリートヘアというのは、だらしく見えるので、避けたほうがいい。身の回りのどこかに、気配りの感じられる装いをして欲しいなあと思うのです。

家にいるからって、いかにも構わないという感じの服を着続けていると、精神も弛緩してしまいます。洗った顔に、ジーンズとTシャツという格好でも、センスのいいピアスやペンダントをしてみる。マニキュアでも口紅でも、ホオ紅でもいい、何か一つ、お化粧しておく。何気ないシャツにスカートでも、ベルトとか、スカーフとか、リボンとか、ブローチとか工夫してみる。銀髪の婦人が、きちんとセツトのしてあるヘアスタイルをし

ておられるのも素敵。おしゃれなんか無関心よという雰囲気の方が、さわやかなコロンを漂わせていたりすると、ハッとします。

男女同権を声高に叫び、目指すからには、「女」であることと訣別しなければいけないものでしょうか？「女」であることも愛おしみつつ、男に負けずに生きることでもできるのではありませんか？若い、勉強家の烈女達、今一度鏡を見て、眉間の立てジワを消してみても。口紅を一本、買ってみて。

女性解放の文をよく書いておられるMさんが、さっぱりとお化粧し、センスの良い服に、こじんまりとした帽子を被っておられたのを私は、ほっとした思いで見つめました。

まじめな「趣味」が
できるまで

埼玉県 藤村 佑

趣味は？と訊かれて、読書とか手芸と答えるのは嘘ではないけれど、あまりに日常的に過ぎてつまらないとつねづね思っている。

バードウォッチングが何より好き、とか、何てったって財テクよ、なんてキツパリと言ってみたいものだ。

そもそも、ワットと飛びついてサッと飽きるというのが私の特徴的性格で、何ごとも長続きしたためしがないのである。

発行・自治研中央推進委員会

月刊自治研7

1987

vol.29 no.334

どうなる日本の農業地帯

インタビュー●民衆の側から山村の危機をみる：井出孫六 座談会●いま山村の人びとは：乗本吉郎・岩本由輝・原剛 論文●日本の農政を見直す：田中学／「広義の労働」に導かれた村：内山節／自治体と農業問題：佐藤克廣 報告●浅井まり子／和田蔵次／藤井勤／木原義法／自治労農業改良普及所代表者会議

定価450円

発売・八月書館 東京都文京区本郷1・10・12 カルム本郷40
電話 03・815・0672

(それにしても、何かひとつくらいあったていいのに。これだけは続いてるってもの)

情けない思いに、おのれの存在証明を得なくてはという焦りが手伝って、あっち、こっちとかき回してみたものの、出てくるものは中途半端で放り出された趣味のなり損ないばかり。

やっとのことで捜しあてたのが、講演会。これなら、機会あるごとに出かけて行って十余年、細々ながら途切れることなく続いているから、趣味に昇格させられるかも。

毎週何曜日と決まって束縛されるおけいごとと違って、自分の都合次第でどうにでもなるし、一回きりで完結する。飽きっぽく忍耐力のない私とは相性がいいらしい。

講演会に出かけるといっても、立派な人生訓や高尚なお話を承って、今後の生きる指針にしようなんてことではなく、単にミーハーの好奇心から、ちょっと有名なあの人の人の素顔を見てみたいだけ。

だから、私はほとんどいつも最前列に陣取って、しっかりと講師を見つめてしまう。た

だただ講師の顔を見守って聴き入ることにしているの、メモはとらないし、聴きっぱなしだから講演内容なんて全然記憶にない。

ツバの飛んできそうな近くに座って、ずいぶん色が黒いこと(栗本慎一郎氏)、やっぱり太ってるわ(林真理子さん)、きれいな人ねえ(山崎朋子さん)、ちょっと訛るわね(五木寛之氏)、私好みのいい男だなあ(田原総一朗氏)なんて、いろいろ品定めするのがなんともいえず楽しい。

これを趣味というにはあまりにお粗末だ、と自分でも思う。

それでは、世間に出して恥ずかしい趣味にまでもっていくにはどうしたらいいか。

まず、講師ひとりに一枚のカードを作り、講演日、会場、主催者、演題、満足度、感想を書きこむ。次にそのカードを基にして、とくに応じて、専門分野別、アイウエオ順、男女別などと分類する。その資料を次回の講演会選びに活用する。たとえば、スポーツの分野の人にしようとか、アからワまで最低ひとりずつ揃えたいとか、男女のバランスをよく

しようとか、いろいろな角度から検討し、選択する。

こんなふうに、講師選びにそれなりの気配りをして、お話を聴いたあとはカードを作って整理する。

なかなかマニアっぽくなったところで、「ミーハーオバンの暇つぶし」が、れっきとした「趣味」に生まれ変わる予感がしてきた。ムリやり作り上げた気がしないでもないけれど、とにかくめでたい。良かった良かった。

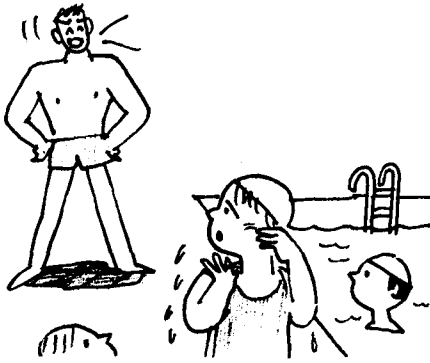
水泳に関する二つの思い出

愛知県名古屋市 岩田 和子

私の通っていた小学校の若い男性事務職員は、水泳の名手だった。彼は教師ではないが、夏になるとよくプール指導を手伝っていた。そしてこの時期には、学校中の子供たちの尊敬を一身に受けていたのだった。

三年生のとき、ある日私は、見よう見まねのクロールをやってみた。するとたまたまそ

ばにいた彼が、いきなり「君のクロールはメチャクチャだよ」と言った。「え？」と言った私に、彼はその言葉をもう一度くり返した。幼いながらも、友達の前でとても恥ずかしい思いをした私は、それ以後何年もの間クロールをやるうとしなかった。今でも、クロールで泳ぐときは、何となく人目を気にしてしまう。彼を恨む気持ちはないが、あのとき、ああ言わずに、「こうやるんだよ」と、ちょっと手を貸してくれたのだったら、と残念に思う。



私は体育がとても苦手だった。先生は一生懸命やればいい、というが、どう努力したってできないものはできない。中学時代には特に悩みの種だった。人より太くて短い足をさらさなければならぬだけでもいやなのに、不様なプレーまで丸見えだ。テストの点なら悪ければ隠せるが、体育ではそれができない。好きな男の子がいたりすると、もう泣きたいほど。それに私の得意な器械体操なんか、先生にも生徒にもてんで人気なし。血湧き、肉躍るバレエ、バスケットが何といっても花形だ。が、恥ずかしながら、クラス対抗戦などでは、補欠にすら一度も選ばれたことがない。つねに貴重品預かり係だった。

先生たちもよく私の鈍いことをからかってくれた。体育以外なら、勉強でも課外活動でもそこその成績をあげていた私は、先生たちにもわりと受けがよかった。この子にならこれくらいのことを言っても大丈夫だろう、くらいな気持ちから、私の鈍さを笑っていた

のだろう。別にイジメではなかった。私も、深刻に傷ついたりすることはプライドが許さないから、何を言われてもヘラヘラしていた。（私に乙女心があるなんて、先生方は思っただけでなかったんでしょナア）

それでも中学時代がとても楽しく、先生たちのこともみな好きでいられたのは、学校全体、いや時代そのものが明るく、若かったのだろう。ビートルズ全盛の、六十年代半ばである。管理よりは自由が多く、先生も生徒も今よりはるかに人間臭かった。

高校に入ってから、今度は教室内で小さくなっていた。青春ドラマみたいなものんびりした中学から、いきなり受験校に入ってきたので、熾烈な戦いには初めからついていけなかった。

ところで、私はひょんなことから水泳部に入ってしまった。泳ぎ方くらいは心得ていたから、毎日練習するうちには、速さはともかく、距離だけは人並み以上にいくようになった。勉強のことを考えると、登校拒否でもし

たいくらいだったが、プールで泳いでいるときには、学校もまんざらではないな、と思っていた。

そのうち、一学期の終了日となった。成績表はさんたんたるもの。予想はしていたものの、やはりガツクリきた。ところが、大番狂わせ、体育が「4」（五段階で）なのである。それそのものは初めてではないが、実技で認められた「4」は、これが初めてであった。

それは水泳のおかげだった。私の運動神経に偏見を持たない体育の先生が、私の泳ぎぶりに対してつけてくれた成績だったのだ。このときの感激は忘れられない。

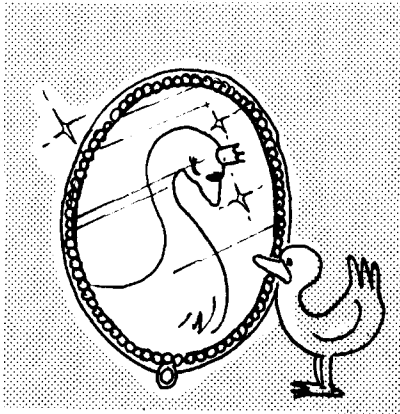
体育が苦手で、一生運動嫌いになりかねなかった私、そして頼みの他の成績すらダメで、心底劣等生になりかかっていた私が、自力で体育の「4」を得たのである。六歳から二十二歳までの成績表の中で、このときの「4」はどううれしく、ありがたかったものはない。かなり灰色っぽい私の高校時代の、これはさ・ん・ぜ・んと輝く金字塔なのである。

そしてこのときから、何年ぶりかで、クロ

ールもやってみようかな、と思いはじめたのだった。

試験場で会った北島マヤ

東京都新宿区 富永 柳枝



今年二月四日、私は本物の北島マヤに出会った——北島マヤとは少女漫画美内すずえ作「ガラスの仮面」の主人公で、まるで目立た

ない存在なのだが、一旦演技が始まると、まわりを圧倒してしまうほど変身する少女である。

この日、X大の演劇科の実技試験。

前日に渡された課題は次のセリフだった。

「なんですって？ それではお父様は、私の、あの人への変わらぬ愛情を忘れてしまえとおっしゃるんですの。お父様に言わないで勝手にきめたのなら、それは私が悪いのでしょうけど、私のあの人への心をお約束なさったのは、お父様ご自身じゃありませんか」

これを、試験官の前で演じるのだ。

一読して「まいったな」と思った。こんな言葉遣いにはまるで縁がない。母を相手に悪戦苦闘の練習の結果、明日は、とにかく思いっきり、跳んだりはねたりして見ようと腹をくくった。

その日、私は初めて彼女を見た。一見平凡というよりはサエないという印象だった。長い髪を三つ編みにしていて、体格もずんぐり、田舎から上京してきた女の子という感じだった。だから、最初はてっきり美術科専攻の子

にちがいないと思ったほどだ。まわりの、いかにも演劇っぽい、美人で器用そうな女の子たちとはまるで異質だったから。私と彼女は何となく友達になった。

私達は全員狭い部屋に入れられて、試験までの少しの間、練習時間が与えられた。まわりの練習風景を見ていると、皆たいてい「怒りをみなぎらせたお嬢様」になりきろうとしている。

そのとき、隣の彼女がいきなり笑いだした。全員が一斉に彼女に注目した。「ね、あれ本当に笑ってんの？ それとも演技？」という声も聞こえた。しかし、その答えはすぐにわかった。

「クッククク……オーッホッホッホ……何ですって？ それではお父様は……」と、彼女は高笑いの後で、父親をあざ笑うようにセリフを言い始めたのだ。つまり、そのセリフを読んだとき誰もが感じるような「怒り」を表わすのではなく、「何言ってるのよ、笑わすんじゃないわよ」という感じなのだ。

そしてその瞬間、そこにいたのは、さっき

までの野暮ったいお下げの田舎少女ではなく、まぎれもなく『良家のお嬢様』だった。見事な変身ぶりだった。

「お父様ご自身じゃありませんの、あらやだ、また間違っちゃった。あたしすぐ『ありませんか』じゃなくて『ありませんの』って言っちゃうんだよねー！」と言って笑いかける彼女を見て、私はまたハッとさせられた。もう、元の彼女に戻っていたからだ。

私が彼女と話を交わしたのはそのときが最後だ。なぜなら、本番の実技試験はカーテンで仕切られて見えなかったし、翌日の最終日は私は一番遅いで次のグループにまわされてしまったからだ。そして、あの三十分の練習時間に発揮された彼女の実力からすれば、たとえ筆記試験の成績がどんなに悪くても彼女がこの大学に受かることは間違いないかつたし、一方、終始一貫、場違いだった私自身はその逆だったから。

次の日、試験場に向かって廊下に並んでいる彼女の後ろ姿を見かけたが、話しかけられる距離ではなかった。私としては、あのセリ

フで「笑う」ということを、どうして思いつくことができたのか聞いてみたかったのだが、たった一日の出会いだったから、彼女は私に、判断の重要さと、人間は変身できるといふことの、二つを教えてくれた。

私は彼女の名を決して忘れない。もちろん、北島マヤではない。彼女の本名だ。そして確信している。何年かあるいは何十年後かに、彼女が必ず芝居で世に出ること、そして、彼女にしかできない、情熱のこもった、独特の演技で観客を魅了するだろうことを。

そのころ、彼女は私を覚えていただろうか。

農産物輸入自由化と 八百屋さんの一言

兵庫県宝塚市 野村 純子

わが家で「道のやおやさん」と呼んでいる八百屋さんは、朝一番に御へ行って、そのままトラックでやってきて、道にダンボールを並べて、その日の相場で売る八百屋さんです。何といっても品物が新しいのと安いのでトラ



ックが来るころにはワッという人ばかりです。早い者勝ちで少しでもいい物を選べるというので、並ぶのをもっともしない人たちはトラックの着くのを待つほです。

兄ちゃん（本当は私より年上ですがみんな彼を兄ちゃんと呼びます）は一人で値段をダンボールに書き終わると、道に座ぶとんを敷いて座り、前に上皿ばかり、横につり銭のザルを置いて、手に愛用のそろばんを持って仕事開始です。だいたい三時間ほどでトラックは空になるのですから、台所をあずかる人のドン欲さ、食べることにかける人の情熱をいっつも思います。私は並ぶのがいやなのでおわりのほうに行きます。ダンボールの上も下も

それほど差がないし、数が半端なときは兄ちゃんは負けてくれるので、残り福ということもあるのです。

最近わかったのですが、兄ちゃんこそが食いしんぼうだということです。おそらく卸売り市場で、今日は何かい物ないかなと自分で作って食べる目で仕入れてくるのではないでしようか。「形が悪いから安かった。けどこれはうまいよ」なんてやりくり主婦を喜ばせます。

その彼が先日玉ねぎのことで言っていました。——確かに輸入玉ねぎは安いよ。でも安けれやいと何でも輸入していてごらん、日本の農家はつぶれてしまうさ。そうしたらどうする。今度はきつと高い値つけてくるよ。絶対、物の値段ってそういうものだから、今安いからって日本の農業を考えないでつぶすようなことしたら、後で高い買い物をすることになるんだよ——。

身近で、生きていくのにかかせない食の現在の大きな問題と、その正しい解決策を明確に示された思いです。
（元・堀切潤子）

お友達に△わいふ▽を
おすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さることに、誌代プラス送料とも一回延長。

（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

△わいふ▽年間分をプレゼント
にお使い下さい

●ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。

お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

次号投稿募集

▼特集テーマ原稿

二〇八号の特集テーマは「わが子の留学」です。

国際化時代とて、外国留学も昔のように、珍しいことではなくなりました。

フランスへ行きたしと思えども、フランスはあまりに遠し、せめては新しき背広着て……なんて詩は、もう若い人には実感が湧かないでしょう。おそらく読者の中にも、お子さんを留学させた経験者が、かなりいらっしゃると思います。

近頃は日本の教育に見切りをつけて、という留学もさかんだそうです、どんな理由、どんないきさつで留学することになったのか、手続は、費用の調達は？ 別れの悲しみ（喜び？）行ってからの便り、そして結果（未完なら現状）と、親の立場から、わが子の留学事情をお書き下さい。

たぶん幼いお子さんをお持ちの後輩母親にも、将来の問題として、ご参考になるであろう

うと思います。四百字詰十枚〜二十枚。

▼ワンポイント情報

二〇八号のワンポイント情報のテーマは、「私の気分転換法」です。

最近、うつ病が非常にふえているそうです。なぜかといえば、社会の変化が激しくて、それに適応できず、ストレスの発散の場もなく「うつ」にのめりこんでしまう人が多いとくに律儀できちようめんな、真面目な人がそうなりやすいのだときました。

日頃の心配ごとをパット忘れ、忙しい生活のストレスを転換する、何かよい気分転換法をみなさんそれぞれに持っていらっしゃるのではないのでしょうか。

お酒をのむ、音楽を聞く、プールに行く、絵を描く……趣味やスポーツ、遊びも含めてみなさんのやっていらっしゃる「気分転換法」をぜひお寄せ下さい。（どんなとき、どんな具合にそれを使われるかも具体的にお書き下さい）。

締切特集投稿とも八月二十五日です。

△氏名 住所を秘密にしたい方▽

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。

「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をさせていただきます。

△仕事をしたい方▽

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事かしたいですか）というアンケートを、お送りしたことがありました。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せます！

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。（無記名のものは受け付けません）

●次のコラムへご投稿をどうぞノ

- うちのワルガキ 子どもとその周辺の話題について、どんなことでも。
- オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。
- ナウい熟年 今どきの若い者へ、一言いいたい方のためのシルバースhirt。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。
- ファミリー・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそでは

言えないホンネのはけ口に。

- マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。
- 職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

- 親のホンネ 親、ことに母親はどうらしいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことがありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。
- 男性専科 敵に塩を送る心意気、男のいいたい放題のページです。

- マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろあるんじゃないですか。遠慮ない告発をノ強いマスコミに弱いミニコミからならり込みかけよう。

●マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですわー。

あなたの主張や切実な体験をお寄せください。

- 対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。
- 女の道楽 あなたがやってるホビーについて。
- 観たり聴いたり 映画、演劇、音楽会

展覧会などの感想を。

● 狂育ニッポンどこへ行く 日本中狂ったみたいに教育がさかん、でもそのわりに、変チクリンな若者や子どもが増えていると思いませんか？ 新人類の若者や子どもたち、あるいは狂師たちの生態報告をどうぞ。

● 生きてます活字人間 読んだものについて。

● 遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

● わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

● エッセイストクラブ ずいひつのよさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

● ワンポイント情報 一つのものまたは事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。

● 以上いずれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。

締め切り偶数月二十五日。

×

● 持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。掲載分には薄謝を贈呈します。枚数自由。締め切り日はなし。他の出版社などに推せんもします。自費出版も引受けます。

● 短い投稿はハガキでもけっこうです。

● 絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。

● ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせてお送り下さい。

×

● 投稿は原則として一応編集部で選択します。できるだけ多くの方の投稿を公平に掲載することをめざしています。

● 編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえて下さい。

● 年齢をお書きそえになりたい方は、名前の後ろにアラビア数字で。

● 匿名またはペンネームは投稿原稿の文頭にお書き下さい。

● 本名と住所も並べて文頭に。

● 投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

● ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお書き下さい。原稿用紙の使い方はルールを守って下さい。

● ヨコ書き原稿は書き直すことになるので必ずタテにお書き下さい。

● 原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

● 誌上匿名は自由ですが、投稿の信頼性の問題もあり、なるべく本名が望ましいと思います。居住地名もとくに理由がない限り、記載したいのでよろしく願います。

● 二重投稿は堅くお断りいたします。

編集だより

●猛暑がやってきました。みなさまそれぞれ夏休みのプランにお忙しいことと思います。

●複数の原稿を、多いときには三篇、四篇と投稿される方があります。編集部を選択してほしいというお考えでしょうが、大へん手間がかかり、他の方に対しても不公平です。今後は一回につき一篇ということをお願いいたします。

採用は、お一人一篇に限っていますが「ワンポイント情報」だけは例外で、他に採用原稿があっても載せていました。七月の合評会で「対話のページもそうしてほしい、感想も書きたし、自分の作品も書きたいで困る」というご意見が出、賛成なさる方が多かったのです。そこで次号から「対話のページ」「ワンポイント情報」は、他の投稿とダブっても採用することに致します。

●来年度に向けて、新しい企画を考えていますが、読者の皆さまにも積極的にご参加いただきたい、わいふへの注文、新しいアイディアなどたずさえて、ぜひ拡大編集委員会へお

出かけ下さい。イラスト、レイアウトなど、腕におぼえのある方は作品を持ってのご参加をお待ちします。

八月は合評会をお休みしますので、拡大編集委員会はそれかねて九月二十九日(火曜)に開きます。八月末までに電話でお申しこみ下さい。場所は人数によって決め、八月末に締め切ってから後、改めてハガキでご通知いたします。

●二〇六号の十五ページ中段「中川敬子」は「敏子」のミスプリでした。訂正しておわび申し上げます。

●ゴキブリケーキをお送りした方のお一人から「粉々になって届いた」とお便りがありました。他にもしそういう方がありましたらお申しこし下さい。もう一度送らせていただきます。またその後ゴキブリの出没状況がどんなふうか、ぜひご一報いただきたいと思います。

●「女性による民間教育審議会」が心血を注いだ「女たちの教育改革提言」が出来ました。一部五百円。ご希望の方は編集部までどうぞ。ではお暑さに負けずお元気で！

購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りします。
で、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

WIFE

(隔月刊) 207号
1987年 9月1日発行
印刷・浩文社印刷
定価 450円

(年間購読料送料共3600円)
発行所・樹グループわいふ
編集・わいふ編集部 ●162
東京都新宿区市ヶ谷加賀町2-5-23
TEL (03) 260-4771・4773
郵便振替 東京5-110430
銀行口座 三菱銀行神楽坂支店
普通預金 052-4348909

購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れてもひき続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。



東京ヒューマニクス研究所の

専門家養成講座

8月末日面接

生徒募集

現在の仕事のために更に自己を高めたい人や、将来セラピストをめざす方のためのセミナーです。今までのカウンセリングやセラピーで避けがちだった「性」をあらゆる専門分野から理解を深め、加えてゲシュタルト・セラピーの理論と技術を体験的に学習して、人の心層に複雑にからみあった、いろいろな問題解決のきめ細かい手助けが出来る高度なセラピストをめざします。

●就学期間 3ヶ年

〔指導講師〕大島 清(京都大学教授) 石川弘義(成城大学教授)
大野 美都子(ゲシュタルト・セラピスト) その他(敬称略・順不同)



東京ヒューマニクス研究所

☎03-492-2838

〒141 東京都品川区西五反田2-31-11
五反田永谷タウンプラザ904号

月刊

ゆたかな暮らし

定価 500円(送料50円)

年間購読料 6,000円(送料600円)

御購読は直接当会へ御申込み下さい。

郵便振替・東京 9-162684

すいせんします

原田 正二

鷺谷 善教

木下 恵介 中島 紀恵子

山田 洋次 浦辺 史

早乙女 勝元 真田 是

前田 甲子郎 長 宏

寿岳 章子 小川 政亮

〈国民的課題としての老後を考える特集〉

7月号特集 金の切れ目が命の切れ目
——武蔵野福祉公社にみる
有料サービスの矛盾——

8月号特集 委託化でホームの給食は、
どうなるか

専大 西岡幸泰
関東学院大 岡部義秀・他
企業から追い出される

9月号特集 高齢労働者(予定)
——円高空洞化の中での
実態をルポ——

10月号特集 高齢者の住居と人権(予定)
神戸大 早川和夫・公団住
宅自治協 多和田栄治・他

——好評連載——

歯と口の中の健康……………吉田 万三
シリーズ・住は人権……………各 専門家
日本の古典に描かれた老人……市川 真一
くすりのはなし……………小林 裕子

編集・発行 全国老人福祉問題研究会

〒177 東京都練馬区南大泉4-16-37

わいふ編集部編

A5判美装カバー・250ページ・定価1400円送料300円

有料老人ホーム数々あれど、
新聞広告によく出るようなホームは、
素敵だけれど高いのが玉にキズ。
そう思ってたため息ついているあなたに打ってつけ。
毎日のくらしのやりくりを頭を悩ます主婦が、
買物上手のセンスを生かしてまとめたガイドブック。
ン千万円のホームはお呼びじゃない。
こちら一般大衆、ただのわいふ。
フツー感覚の主婦が、
クチコミと足をたよりに、
老後のついのすみかの情報を集めました。
自立の目で見てたしかめて、
老後生活を自分で設計する、
「わいふ」たちの旺盛な自立精神に乾杯、
——推せんの言葉 樋口恵子

ガイドブック

入居金〇〜一千万円
生活費は年金程度

安くはいれる 有料老人ホーム

わいふ二〇七号

一九八七年九月一日発行(隔月刊)

ぼけ

家族による

ホシネの介護ブック

黒田輝政編

OP叢書③

ぼけの出たお年寄りを世話する人の気持ちの支えになるように、ぼけの家族の会の方々から寄せられた豊富な事例をのせました。様々な制度・サービス・社会資源の有効利用法もわかります。一三〇〇円 250

こうありたい老後設計

蓄財パスポート

川村匡田著・愛読者蓄財相談カード付 あらゆる種類の個人年金・医療保険を紹介。豊かな老後を迎えるための蓄財の仕方を、それぞれのライフスタイルにあわせて手ほどきします。一五〇〇円 300

石ころばあちゃん ひとりごと

『あしあと通信』
田の記録

井原静江著 幸せとは何か。激動の戦中・戦後を生きてきたひとりの女性が、古い、ふるさと、友、親子、夫婦、暮らしの問題について語り、生きにくいこの世の中にひとつの灯をともし。一三〇〇円 250

定価 四五〇円